明治三十九年度

豊明幼稚園・小學校開校式
并びに本校第五回記念式に於て

遠方の所を度々、殊に雨天にも拘らず、斯く御參列下さいました事は、吾々の深く謝する所であります。實は今日の式は先達ての卒業式に兼ぬる筈でありましたが、餘り澤山な式を兼ねますと全く形式になりまして、式の意味を失ひ、且つ其の實質も精神も無にする事は、本校が始めから取り來つた精神に背く樣に感じまして、御出でを願ふ方々には、餘り毎度でありまして、御氣の毒にも存じましたが、本校の第五回記念式に兼ねて、教育部、豊明幼稚園、小學校の開校式を行はうと致しました。然るに丁度二十日は宮内省に於て、觀櫻會を催さるるといふ事を、或所から御通知下すつて、成る可くならば少し延期をしたらどうかと云ふ事を御注意下さいました。殊に今日は此の式の後で、本校の評議員會を致す事になつて居りましたので、丁度一週間延ばして今日此の式を開く事に致しましたから、一言御斷りを申して置きます。

就いては此の第五回記念式に對しては、本校が過去五年間に經驗した事を報告致し、並びに教育部、豊明小學校及び豊明幼稚園に對しては、將來の希望を述ぶべき筈と考へますが、其の樣に別々に致しますと時間を取りますので、今日は本校の方針、教育の目的、其の目的に達するに必要なる材料、及び其の材料を目的に應用する方法等を簡單に述べて、自然に本校の五年間の經驗も分り、又將來の希望をも表はす樣に致したいと考へます。

併し乍ら斯くの如き問題を順序正しく申すと、時を要しまするので、其の目的並びに目的に達する材料及び方法等に關しては、昨年「本校教育の方針に就きて」と云ふ私の演說（本書五九二頁掲載）を、小册子に附して諸君の御覽に呈した事と考へますので、今日は本校の方針に就いて世間から誤解を招き易い事、又度々批難攻擊を受くる點を說き明かし、並びに本校の精神のある所、及び五ケ年間に經驗致した事を、成る可く簡單に申したいと存じます。

教育の目的は最も大切なもので、若しも之を誤りましたならば、其の學校に與へる所の知識も方法も、悉く無用に歸するのみならず、或は有害に陷るかも知れないのです。然るに本校開校以來、其の目的に就いて、世間の疑惑を起こした事は度々でありまして、或は演說に、或は雜誌に於て之にお答へした事もありますが、猶、其の說明に滿足せられぬ諸君も未だ大分有る

様に感ずるのであります。

其の中で最も人の注意を惹きたる批難は、此の學校を女子大學と云ふが、果して其の目的は此の名前に適當するか、否か。卽ち此の女子大學が、帝國大學の目的及び實質と同一なるを得べきか、否かといふ事でありましたが、本校は最初より其の標準を帝國大學に置かなかつた。今後と雖も決して帝國大學に近づけんとするものに非ず。男子の如く女子にも學位を授け、或は男子の職業に立ち入らせ、或は男子と競爭せしめようと云ふ考は毛頭ない、寧ろ斯くの如き考には、大いに反對の態度を持つて居つたのみならず、今日我が國の教育が帝國大學を中心とするが爲に起れる弊害を改め、缺點を補ひたいと云ふのは、本校の目的の一つであります。

抑々帝國大學の目的は何であるかと申せば、學理の蘊奧を究むる事、卽ち學術研究と云ふ事にあるのであります。併し乍ら實際は此の目的を以て大學に入る者は、極く少數である。我が國青年男子の競うて高等教育に進まんとする目的は學理研究にもあらず、人格養成にもあらず、眞理を愛する熱心にもあらず、只資格に在り。卽ち官吏になり、會社の役員になり、職業の特權を得んが爲、教育の資格を得んが爲である。然らざれば肩書きを得て、社會に地位を高めたいと云ふ虛榮心である。其の目的物を得んとするには、必ず試驗と云ふ關門を通らねばならぬ、其の試驗といふ關門を通るには、成るべく僅かなる時間に成るべく多くの知識をつめ込まんければならぬ、天下青年の其の目的に達せんとするが爲に高等學校、大學に入らんとする者は年々其の數を加へるのである。故に是を制限するには、益々試驗を嚴重にし、其の結果彼等の頭腦を弱め、彼等の能力を彌々淺薄にする弊に陷るのは、已むを得ぬのです。此の目的が卽ち今日の教育界の中心である。我が國男女青年の目的物になつて居るのであります。獨り其の門に入る關門である所の高等學校のみならず、中學校も、小學校も、高等女學校も、其の他の私立學校も、其の目的とする所は資格を得る事、其の資格を得るに必要なる試驗に及第する事、其の試驗に必要なる點數を多く取る事であります。

今日の學生を奬勵する唯一の方法は、此の試驗の點數である。其の點數に依つて學生の優劣を決するのであります。其の學校から出た及第者の點數の比例に依つて、其の學校の價値を定めるのである。今日の教育は彼等の品性を作るにあらず、彼等に確信を與ふるにあらず、我が國家に必要なる人材を養成するにもあらず、只試驗によりて學位を與へ、或は卒業證書を授くると云ふに過ぎぬのであります。學生の資格を目的として學

問するも、品性修養を目的とするも、學術研究を目的とするのも、左程違はない樣に考へられますけれども、實際は大いに異つて參ります。其の大學を卒業する爲に資格を得る爲に、是非及第しようと思つて、勉强する者と、志を立てゝ生涯の爲に、己の品性を養ふ爲に、眞理を愛して已まぬ爲に、研究心を滿足せしめ、或は內から起る興味を滿足せしむる爲に、學問するのとは大いなる差がある。既に其の動機に於て大差があるから、其の結果に於ても必ず大差あるべきである。故に優等生として名譽の卒業をしたる者、必ずしも有爲の者にもあらず、高尙なる人物にもあらず、身體の健全なる人にもあらず、意志の强固なる人にもあらず、却つて教育家としても、實業家としても、役人としても、役に立たぬ、一向つまらぬと云ふ事を澤山に聞くのみならず、吾々も是迄、さう云ふ經驗を自ら經たのであります。故に吾々は今日の帝國大學を目がけて進まんとする男子の高等教育の目的と、本校の教育の目的と、一致せしめんとした事は本校を立つる初めから一度も考へぬ。故に本校に於ては創立の初めから此の弊風の侵入せぬ樣に勉めたのであります。

それで本校の目的である女子を人として、婦人として、國民として、の人格を養ふと云ふ事に、最も力を注いだのであります。是迄試驗を目的として進んで來ました學生の心の態度を改むることは非常の骨折りである。最初の一年間は生みの苦勞を致しましたが、漸くにして今日は彼等の目的と此の學校の目的とが一致して、本校に於て學ぶ所の知識、與ふる所の學問の統一も、本校の特色なる全校の活動も、感情の融和も、意志の結合も、凡ての精神は凝つて吾々の意志となり、全體の寮風となり校風となつた。卽ち淑女たり賢母良妻たり、人間たる立派なる品性を養ふと云ふ目的の爲に、凡ての活動をなし、凡ての知識を集めたのであります。其の經驗は大分世間にも認めらるゝ樣になりまして、今年の入學生の目的、及び特に本校を選んだ動機等を調べて見まするとと、五年前の入學生と大いに趣きを異にして居ると云ふ事を見出だしたのであります。

今此の前に列んで居る所の、卽ち今年開校したる教育部の學生の入學の動機を先日調べて其の答を分類致しますと、一昨年の十二月でありましたか、此の教育部を開設する時に當つて、私が「第二維新を論じて我が國教育の宿弊に及ぶ」（本書四三一頁掲載）と云ふ演說を聞き、或は其の演說筆記を讀んで、大いに感ずる所あつて此の教育部に入る決心をしたと云ふ人、又今年の一月の八日頃にペスタロッヂの傳を話した事がありましたが、夫を聞いて自分はどうしても日本の教育の爲に身を捧げたいと云ふ決心をした者もあります。又此の六十四人の中で半數

は地方の高等女學校、師範學校から參つた者でありますが、自分の育つた家庭、或は學校の弊風を慨歎して、本校が特に品性修養に重きを置くと云ふ事を聞いて本校の教育部に來つた者が大部分で、職業の爲、卽ち境遇の必要上教員となる資格を得ん爲に參つたものは、此の六十四人中、僅か三人であります。

此の動機を第一回の入學生に比較して見たならば、非常な違ひがある。最初は職業を目的として來たと云ふ樣な者がどうも十分の一位は有つた樣に記憶致します。併し乍ら本校への入學はさう云ふ資格、職業の爲ではないけれども、虛榮心卽ち大學と云ふ名を慕うて大學卒業生と云ふ名譽を得たい爲に來たのではないかと云ふ批難がありましたが、此の觀察は實際とは大分違つて居ります。如何となれば本校の第一回、第二回の卒業生は大學に入る事を名譽としたのではなく、却つて不名譽を忍び、いろ／＼なる反對攻擊を排除して、自らの意志を以て入つた者が多いのです。如何となれば地方の高等女學校長並びに教員の態度と云ふものは、本校の主義を誤解し、證明書も與へぬ位で隱然天下の人が妨害したのであるが、さういふ迫害にも堪へて這入つたのである。漸く此の頃になつて、人々が本校の眞相を認めて校長あたりも大いに奬勵すると云ふ有樣になつたのであります。

そこで入學者の動機、目的が、帝國大學の門に入らんとする、卽ち競爭試驗を以て、之に勝利を得て進まうと云ふ所の動機に比較して見ると、大差があるやうに考へらるゝ。併し乍ら是迄試驗を目的として進んだ心の習慣を換へて、眞に己の修養に勉め、寮風とか、校風を作る爲に、全體の爲に、喜んで活動すると云ふ如き品格を備へる迄に、非常に苦しみを味はんければなりませんが、今日迄第一回、第二回、第三回卒業生は其の困難に打ち勝つを得たと云ふ事は、大體から私は責任を以て、諸君に御報告する事を得ると自ら信ずるのであります。

第一、材料

本校が斯くの如き目的を以て、卽ち個人の品性修養に勉めしむるのであるが、併し乍ら之は只個人では無く國民として、社會の一員として家庭の主婦としての個人である。過日も申した樣に吾々の目的は自己中心に非ずして、全體中心である。此の本校の目的に叶ふ處の材料を選擇し、排列し、相互の關係を結び付けたのであります。

是に就いても大學としては今少し專門にならねばならぬ、餘り多方面である、專門ならば今少し狹くあるべきであると批評せらるゝ事もあるけれども、本校の目的とする所は帝國大學、

或は世界にある所の女子大學の材料に等しからしめんとしたのではなく、本校の目的に叶ふ樣に、其の目的に達するに必要なる知識を與へると云ふのが、本校の今日迄取り來つた方針であります。只今日我が國の教育に最も缺けて居る材料を、我が大學に編入して見まして、五ケ年間には如何なる經驗をしたかと云ふ事を、一言申したいのであります。

夫は今日の教育は餘りに抽象的である、主觀的である、書物から與へる或は講義を以て教へる知識に偏し過ぎて居る爲に、實地に疎くなり、實際には慣れず、常識には乏しくなつて來るといふ弊がありますから、本校には成る可く一方に偏しない樣に、實地より天然物より實際の境遇より、材料を採らしむる樣に致したいと云ふ方針を取つたことであります。是は當初より立てた方針でありますが、此の度起しました教育部、豊明幼稚園、並びに豊明小學校には、Nature study（自然物研究）と云ふ教育法を採用し、又 Manual training（手工教育）と云ふ語を以て表はす教育法を加味する事と致しました。

私が此の必要を大いに感じましたのは、今より十二三年前、アメリカに於て、丁度其の頃に崩しのありました、紐育のテイチヤース・カレージ（師範大學）、其の他の大學に行はれて居る所の教育法を見て大いに感ずる點がありました。何故然るかと云ふと、第一に私自身が幼少の時から受けた教育の大部分は、自然に負ふ所が多く、常に自然を友として遊び、自然を敵として戰ひ、山に入り、川に棹さし、海に泳いで、自分の欲する儘に行動して育つた事が、自分の人格を作る上に非常に有益でありました。又自分の方針を立つる上に大關係を有する事を悟りました。後にギリシヤの教育を調ぶるに當つて、如何に彼等が天然を愛したるか、如何に彼等が天然を見たか、如何にして此の天然を愛する事が希臘の神話となつたか、其の神話が如何に發達して希臘の文學美術となつたか、獨り文學や美術のみならず、今日の科學、哲學の起りも、希臘に發して居る。斯くの如き思想の發達は、希臘人が天然を愛すると云ふ事から起つて居る事を深く感じました。故に本校の教育は成る可く自然と遠ざからぬ樣にし、其の材料にも自然物を加へると云ふ方針を取るに至らしめたのであります。

其の他實物教育をなすに、本校の寮舍生活が與つて力あつた事は、特に申さねばならぬ事である。我が校の寮生は只今八百人程居りますが、それは二三十人宛集まつて一家を成し、家々は又寄つて一村落を成して居る。例へば高田村とか、華山村とか、豊明村、校内村とか云ふ如きものであります。其の中には銀行、商店、牧畜部も有る、購買會もある。凡ての家庭と國家

と社會と云ふ樣なものを此の學校の組織の中に置きまして、萬事、實際から學ばしむるのであります。商業部を置きましたのは、今から二年前であります。其の頃は一ヶ月の賣上高が七百圓計りでありましたが、只今は千七八百圓である。成程千三百人の得意を持つて居るから、商賣をするのもいと易いと思はるゝかも知れませぬが、此の周圍には六軒計りの商店が競爭して居るから、安ければ生徒は直ぐに他に行くのである。又他にも行つて比較して見ることを奬勵してあるので、周圍の商店よりも安くなければ、我が校の商業部は賣れぬのである。初めは高いと云ふ評判が大分ありましたが、此の頃は何處の店よりも一番安いのである。同値段でも實業部のものは、其の品質が良いと云ふ事が分りました。安い物を仕入れると云ふ事も、大部研究を要する事で、夫も實地商業をする事によつて、競爭と云ふものはどう云ふものであるか、商賣と云ふものはどんなものであるか、社會は如何に組織されて居るか、人の好みと云ふものは、如何なるものかと云ふ事を學ぶことを得たのであります。

銀行部も始めは一ヶ月二千五百圓計りの預金を扱つて居りましたが、只今は一萬七千圓計りの預金に進んで居る。此の銀行部に於て金を取り扱ふ事によつて、是迄すたつて居つた利子が生まれるのみならず、金を持つて居ると取られたり、失つたりする事が、月に五十圓、六十圓と云ふ樣な事もありましたが、今日は皆切手で取引をしますから、さう云ふ心配も無くなりましたのみならず、經濟學の實地經驗をも得る事が出來るのであります。其の他牛を五匹計り生徒が飼うて居りまして、乳も生徒が搾ります。又菓子も作ります。實業部で利益を得ることは三百圓計りと云ふ事であります。是は數に現はれたる經驗でありますが、猶其の他、時があつたならば、本校寮舍の生活に就いて委しく申したいが、時が許しませんので、殘念に思ひます。とにかく之は本校の特色とする寮舍生活に就いて、寮監、寮生よりの報告を分類して得た所の確なる事實であります。到底本を讀んでも得られぬ、講義を聞くのみでも得られぬ知識を、實際生活の上から得て居ると云ふ事は實に尊い經驗であると考へるのであります。

それからもう一つは天然實物と云ふ材料を以て教授せん爲に、本校の高等女學校は、是迄の學級別の組織を改めて學科別と致しました。其の一ヶ年の經驗を調査して教員から出た報告と、生徒自ら答へたものとを御參考に供したい、實は學科別にする事は未だ經驗もない事であるから、果して有効のものであらうか否か、或は弊風の件はざるかと云ふ事を心配せらるゝ方

もありましたが、其の結果を調査する爲に、教員及び生徒から出ました報告を材料として申しますれば御參考に資する事が出來ませう。

先づ教員側からのを讀みますと

1、標本、機械等の、其の教室に在る爲に、必要に應じて使用する事を得、實驗上非常に便利なる事。

2、生徒をして自由に實驗せしむる事を得る爲に、觀察力、思考力等を養はしむる上に、甚だ有益なるのみならず、殊に理化學、動植物の設置整ひたる爲に、非常に便利なり。

3、自發的研究力を發展せしむる上に有効なりとす。

4、各教場に入る毎に、生徒の心意狀態を新たにし、注意力を集注せしむることを得。

5、修身、國語、其の他の各科に適當なる書籍を備へられし爲に、隨意選擇して、最も適當なる物を讀む事により、大いに讀書力を養はしめし事。

6、各教室の設けられし爲、生徒各自、大いに責任を重んじ整頓せし事。

7、各教室に、非常に趣味を加ふる事を得たり。

生徒の側よりは

1、凡ての事が自動的に行はれ、甚だ便利なり。

2、標本を示さるゝ爲に、銘々も標本を集むる習慣を得たり。

3、教室によりて學科に趣味を持つ事を得、趣味多くなりたる爲に、自然、裝飾に注意するに至れり。

4、整理に注意する樣になれり。

5、時間を守る習慣を得たり。

6、參考品の備へられたる爲に、勉强を容易にする事を得るに至れり。

是は極く大體の報告でありますが、實際から學ばしめ、研究させ、觀察させ、天然を愛せしむると云ふ所の材料は、確に教育に有効なるものであると云ふ事を經驗致したのであります。此の實際に接せしめ、實物に當らしめたと云ふ事が、大いに此の品性陶冶に、卽ち此の理想實現に有益であつた。生徒各自の判斷力を養ひ常識を養ふ上に最も大切なものであつて、空想にあらずして確實なる知識を養ひ、眞面目なる品性を築き上ぐるに與つて力ありと申さねばなりません。

併しながら本校が五年の間、毎年幾らかづゝの進歩を見て、今日に至らしめたのは、全く實物教授によつたからであると云ふならば、大變觀察を誤るのであるから、もう一つ申さねばならぬ事は、人間と云ふものは決して興味なくしては學問をする

事は出來ぬものである。理想なくしては活動の出來ぬものである。物と力とを分つ事は出來ぬ。物あれば力あり、力あれば物のある事は申す迄もない。實現があるならば、また實踐躬行があるならば、必ず理想があるのである。又學生はとかく理想に走るから、注意して常識を養はねばならぬと云ふ說がありますが、之は尤もである。併し乍ら實際人間は、燃ゆるが如き熱心なく、理想なくして、實地にのみよるに於ては、決して品性の出來るものではありません。

私は今日の學生に常識がない、人格が出來ぬと云ふは、實際に遠ざかつて居るのみならず、今日の青年男女には實行を導く所の理想がない、確信がないからであると思ふ。今日男女の學生の實際に疎く人格の低い一原因は、理想を輕蔑して確信を遠ざくる氣味があるからです、之が今日の教育に於ける大缺點である。獨り個人の修養に關してのみならず、國家でも、世界でも、同じ事である。此の世界は運動して居りますが、是には一つの力がある。彼のロシヤと戰うて勝つたのは、國民の力により、此の力を出さしめたのは全く時代の精神である。昔、スパルタが非常なる勢力を現はして、アゼンスに勝ち、アメリカの南北戰爭に於て、北軍が大勝利を得た。斯くの如き勝利は唯に物質的のみではない、其の國民を動かす大いなる精神があつたからであります。古へのスパルタ人には確に立派なる理想がある、若しも今日アメリカ人から理想を取り除いたならば、物質的進歩も立どころに止まるのは明らかである。

我が學校も同じく理想があるのである。故に此の理想を除けば、忽ち進歩は止み腐敗は始まるのである。愛すべき學生、彼等の胸中には燃ゆるが如き熱情がある。進んで止まぬ勇氣がある。彼等からこの精神を拔き取るならば、殘る或ものは只物質的の校舍である、庭園である。生徒に精神を與へ、理想を與ふる事、之を勉めずして到底眞の教育を施す事は出來ぬといふ事を、私は確信するのであります。此の理想を養ふ爲の材料として、本校では哲學あり、科學あり、文學あり、倫理も教へますけれども、只それだけの材料を以て、彼等に不滅不動の根本の意志を與へる事は出來ぬのであります。然らば最も有力なる精神的の材料とは如何なるものでありませうか。

第二、宗教的要素

一昨年の十月頃から經驗した事で、彼等に確信を與へ、是によつて得たる意志が、品性を作るに至りました。此の相集まつて得たるものが本校の校風であり、今日の我が校の時代の精神、卽ち本校の全體意志である。一言で申せば私は之を宗教と

云ふ。宗教と云ふ言葉には語弊がありまして、ともすれば世間の所謂、宗派と混じ易いのである。本校は斯くの如き意味の信條を奉ぜしむると云ふ事は、斷じて好まない。教育と宗教とは混ずべからざるものである事は最初より稱へた所であります。併し乍ら教育は宗教的生命を得る迄に至らなければならぬと云ふ事は、本校創立の當初からの考である。其の宗教と云ふは佛教にも、クリスト教にも、若しくは孔子を信ずると云ふ事にもあらず、さればとて全然之等に反對するものでもない。本校では個人的宗教と、全體的宗教と云ふものを區別するのである。生徒各自の信仰の自由を許すのである。私は之をして個人的宗教と申します。併し其所に統一すべき一點がある、眞髓があるのです。かう云ふものに決して矛盾のあるべき筈はありません。此の點より推せば、何れの宗派と雖も、決して衝突せざるものである。之は凡ての宗教の永久に滅せざる所の眞髓であります。斯くの如き宗教は人生に必要なものである。斯くの如き理想を與へなければ眞の教育は出來ぬといふ事は、私の初めから天下に公言した所であります。

本校を創立せんとしたその初めに於て、廣岡さんも私の曾て著しました「女子教育」と云ふ本を三度讀んで御賛成になりました。其の中には德育の項に、宗教心を養はしむる事、宗教教育とは如何なるものか、と云ふ事も申してあります。大隈伯爵も此の書を讀んで御賛成下さり、十年一日の如く御助力下されたのである。西園寺侯も、澁澤男も、森村さんも、三井さんも、久保田さんも、凡て本校の發起人、賛成者となれる人々には、皆この書を呈して主義に於て一致して載きたいと申したのである。本校に於て宗教的生命を得しむる事迄に育てつつある事は、決してコソ〳〵とやつて居るのではない、眞理と認めた所を公然行うて居るのである。宗教的生命即ち理想の養成、之が今日の教育に最も缺けた點である。宗教學校もありますが、之もだめであると思ひます。クリスト教も、佛教も、昔のものは役に立たぬ。全く時代の精神に後れて居るので、斯くの如き宗教が日進の世の中に幾らの力を加ふる事が出來ませうか、將來國家有爲の民とならんとする青年男女の理想を滿足せしむる事が出來ませうか、彼等に確信を與ふるに足りませうか、是は本校が大いに感ずる所あつて之に代るべき宗教の命を與ふる事に務め、既に一昨年から試みた經驗でありますが、若し本校の宗教と云ふ事に就いて、誤解しておいでの方もあらうかと、此の席で私の主義と經驗とを、諸君に御披露して置きたいと存じます。併し乍ら御不審の點がありますならば、御遠慮なくお尋ねになつて戴きたいのであります。

第三、方法

と云ふ事に就いて申したいけれども、時がありませんから省きます。然し是を一言で申せば、本校教育の方法は、自動的の構成發表と云ふ事、卽ち爲す事によつて學ばしむるのであります。故に萬事を生徒の自動的活動に任せたのであります。

要するに本校教育の主義方針は、第一、材料としてはあらゆる天然實物に接せしめ、實際の境遇を作つて、廣く知識を宇内に求むる習慣を養はしむる事、第二、宗教的要素を本として、宗教心を滿足せしめ、生徒に高尙なる理想を與ふる事、第三、方法としては、自動、卽ち自らすると云ふ事に最も適當なる材料を與へ、自らする事に由つて、得たる理想を實現させるのであります。故に凡て本校の活動は、生徒の自動によつて校風が出來、品性が養はれたことは確に吾々經驗の立證する所である。併し乍ら未だ日も淺くして、吾々の理想の萬分の一も實現することが出來ませんし、又これ迄失敗も多かつたのでありますが、吾々は其の失敗によつて益々事物を學ぶのである。其の學ぶ事によつて益々理想を向上し、且つ之を實現する事に依つて、益々品性を養ひ、今後限り無く進まんことを期するのであります。願くば御心付きの事は充分御教示を願ひたいのであります。

（「家庭週報」第五十九號）明治三十九年四月

理想の實現に就いて

この時間は、兼ねて理想の實現に就いて話す積りなりしも、單に抽象的の言葉を以て道理を說明せんよりは、實際の實例による方、一層分り易かるべく、殊に人の經驗は生きたる標本なるを以て感動を與ふる事大ならんと信ず。されば今日は生きたる理想の實現といふ尊き經驗を紹介して一層有益なる時間を過さんと欲す。卽ち恰も來校せられたる豊明會員の森村、大倉兩氏を始め、村井氏を殊に理想の實現といふ方面より紹介せんとす。この諸氏は自らの名を出す事は、實際喜ばれぬ所なり。我が實業界に名望高く、兼ねて社會一般よりも尊敬せられつゝある澁澤男爵は、余も實業に志したる始めより、己を富まし、子孫を富まさんと云ふ事は考へず、國家の商業を盛んにし、日本の富を增さんことを計り、今もなほ國家社會に貢獻しつゝある事、敢へて人後に讓らずとの自信あれど、只一人誠に敬服にたゆる人あり。これ森村氏なりと。この一言を以ても、森村氏の自己の名譽の爲ならず、眞に國家の前途を慮り、專心一意、我

が國に捧ぐる所あらんとしつゝある事は、何人も認むる所なるべし。而してこゝに諸氏の名を公にして、其の經驗を紹介するも、個人の爲に其の德を稱ふるにあらずして、人々に生きたる手本を示して、修養を計らしめんとの目的に外ならず。かゝる目的を有するに於ては、人はおろか、自らの經驗を公にするとも敢へて差支へなかるべきなり。

我が女子大學が五年の間にかく迄、成長發達したるに就いては、種々なる理想の實現せられたる事は明らかなり。然らば何人の理想の實現せられたるかと云へば、決して一、二人のものにあらずして、多勢の人の意志集まり、其の意志の價値のあらはれたるなり。

今朝森村、大倉兩氏に遇ひ、頻りに氏の經驗の追懷さるゝと共に、逆りて自らの過去にも思ひ至り、遠き昔、夢の如く、描かれし理想のこゝに實現せられつゝある事を、寧ろ不思議に感じたり。余の志を立てゝ鄕關を辭したるは、十三歲の時にして、十六歲にして師範に入り、六ケ月計りにして、我が教育の宿弊をいたく悟り、その革新を思ふこと頻りなりき。十八歲の時我が國の前途を慮りて、女子教育の最も忽せにすべからざるを感じ、後米國に遊び實地觀察して非常に感ずる所あり。朧げなりし教育の方針、女子教育の主義も、世界の文化に照らして一層明らかとなるに至れり。然れども我が其の理想は到底五十年、百年の間には行はるべしとも考へざりき。先づ國家の富力を左右する我が國の實業家を始め、社會一般の人、口には忠君愛國を稱ふれども其の働きの動機はわが子孫の爲、我が家族の爲と云ふに過ぎず。富を作るとも、國家有用の資に投ぜんことは考へず、子孫を惰弱にし、不道德にすることをも思はずして、徒らに私欲のみ逞うす。これを歐米の富豪に比するに非常の相違にして、彼等は國家、社會の爲に富を積み、財を作り喜びてこれを社會全體の爲に投ず。なほ其の一般の教育にしても、親より教育をうけて、人類的に進みたる知識を早く我が物にし、其の上に新しき品性、知識を加へて、社會に貢献せんとするにより、世は非常の勢を以て進歩す。斯くの如き社會に於ては內外共に完備したる教育機關の備はるは當然なり。我が國にこの理想を實現せんとするは、木に攀ぢて魚を求むる類、到底企て及ばぬ事とせり。圖らざりき此處に森村組の會員は、其の貿易事業をなすは、我が家の爲子孫の爲にあらずして、國家の爲、全體の爲、捧げんとせらるゝ所にして、近く其の實現はこの教育館にあらはれ圖書館にあらはれたるなり。卽ちこれ等の設備に投ぜられたる大金は金にあらずして其の心を出されたるなり、國家將來の爲、命ある教育、殊に女子教育のいかに大

切なるべきかを慮り、其の實現を計られたるなり。この森村、大倉、村井諸氏孰れも十二三歳の時志を立てゝ家を離れ以後獨立自營の尊き精神を以て、抱く理想を盾に今日迄奪闘を續けられたり。人に使はるゝ時代より早く既に爲す事々に理想を抱き、其の理想實現の爲に最良を盡されたり。例へば掃除一つにも、意味なくして手を働かすにあらず、如何にもして其處を最も綺麗にせんとの心より忠實、熱心を以て事に當れりといふ、幼時より職務に忠實熱心なるの點は諸氏の皆一到する所にして、且つ其の自然に與へられたる境遇に於ても相似たる點多きは奇とすべし。而して十二三歳の當時、立てたる志は、今は成功の緒につき、理想に於て一致する團體、豊明會によりて、其の志は永遠に繼續せられんとす。

この豊明會は我が女子大學の理想と一致して、常に多大の同情を寄せられつゝあり。これ女子大學の成長發達に資し、延いて我が國女子の進歩に影響すること大なるは勿論、この現象は己の有する富も知識も社會全體の爲に捧ぐべきことの實例を示し、必ずや我が美はしき國風作らん。顧れば豊明會員始め、余の理想を立つる始めは、其の實現の方法渾沌たるものなりしにも拘らず今や互に其の理想を知り助けつ、助けられつゝ意外に早き、實現を見るに至れり。精神一到何事か成らざらんとの古人の言は眞に經驗の結論なるを覺ゆ。

（「家庭週報」第六十號）明治三十九年五月

文華の根元

祝地久節

海軍大勝利記念祝賀會の翌日、平和の新天地に於て　皇后陛下御誕辰の祝賀式を舉行する事は我々一同の喜びに堪へぬ所である。本校に於ては常に此の佳節に、新入生の爲に我々が永久忘る可らざる記憶と、重き責任とを感ずる事柄を紹介するのを例として居る。今朝も此の例に倣ひ、一言其の事に關して記憶を新たにし、今日の祝辭に代へたいと思ふ。

本校が始めて世に生まれたのは、今より五年前、卽ち卅四年四月廿日で、此の日は最も記念すべき日である。西園寺侯爵は或年の卒業式に於て、女子大學校の開校は、東洋の歴史に新紀元を開いたのであると述べられたが、斯かる詞は唯侯爵が無意味に云はれたのでなく、眞に侯爵の肺肝から出たのであるといふ事は、侯爵が本校の創立以來、非常に公務の御繁忙な時にも、又御病中にも變る事なく、本校のために盡して居らるゝ事に依つて分るのである。又此の詞は侯爵一人の獨斷ではなく、

我が國社會の現狀を見て、其の輿論を代表して述べられたものといふ事が出來る。今其の事實を擧ぐれば、我が國の政治界、實業界、教育界に於て、其の社會の牛耳を執り國家の運命を左右して居る有力なる人々が、此の學校の教務委員、或は財務委員となつて力を盡されつゝあるのは、唯一の私立學校を助くると云ふ考ではなくして、眞に國家の其をなす教育の爲を思うて力を致さるゝのである。本校の創立は實に我が社會に注目されたのみならず、世界の耳目に觸れ紐育の一新聞は本校創立に就いて一論文を掲げた事もあつた。其の上本校開校の事は日ならずして天聽に達し、畏くも　皇后陛下には皇后宮大夫香川子爵、侍從職幹事岩倉公爵を召され、本校の主義方針と現狀とを委しく聞し召され、我が國女子の高等教育に深き御同情を寄せさせ給うて、同年九月廿五日　陛下の思召を以て、本校へ金二千圓御下賜の御沙汰を蒙つたのである。　陛下の此の御奬勵は我が校教職員生徒一同は勿論の事、廣く我が國の娘達の心にも感動を與へて、大いに我が女子教育の氣運を挽回する事が出來た。至仁なる　國母陛下の思召は實に本校の精神に大いなる御感化を垂れさせ給ふたのである。我々が始めて　皇后陛下の御誕辰を祝し奉つた時は、只今の高等女學校の裁縫室と、音樂室とを合併して式場にあて、如何に　陛下が我が國教育の爲に御心を注がせられ、女子の發達を促し給ふ爲に、如何に好模範を示させ給せ給ふかに就いて深く感激したのであつた。本校が今日第六回の地久節を此の新講堂に迎へるまでに至つた其の跡を顧れば、實に感銘すべき歴史が多いのであつて、本校今日の隆盛も、畢竟　陛下の深き思召と、其の御感化を垂れさせ給ふた事によると察せらるゝのである。

第二回の地久節を舊講堂に於て擧行してより、世の風雲益々急になり、遂に日露の戰は開始せられて、我が國は愈々世界に注目せらるゝ事となつた。恰も麻生學監は歐米視察の爲に校を辭して、米國に、歐羅巴に、世界の女子教育の現狀を調ぶる爲に出發せられ、到る處に我が校を紹介せられた。そこで諸外國人が本邦の教育を視察するには、必ず我が校を訪ひ、研究的に種々の事を調べて行く有樣に至つたのである。

我々が世界の文明を研究せんと考ふるに當つては、常に先づ其の國の女子を調べて見る。國の文明の程度は女子の進歩の程度によつて計り得る事は、社會學者も、政治家も、又教育家も、皆信ずる所である。されば我々が外國の有樣を調査するにも、我が國社會の改良、教育の研究を試みるにも、必ず先づ女子を研究する。故に婦人問題は最も社會の力を集注する要點となつて居るのであつて、我々は米の女性、獨佛英等あらゆる國

の女性を研究する事を望み、是を學ぶ事の必要なるを認むるのである。然らば日本を研究せんと欲する外國人が、我が國の女子教育に眼を注ぐのは當然の事ではないか。先頃から我が國の女子教育を視察せむ爲に、外國の人類學者、新聞記者、軍人等が來訪されたが、其の人々の眼に我が國の女子は如何に映じたで有らうか。女子の學校を見、女子の團體を見て、遂に如何なる結論を下すであらうか。曾て來校せられた某外國夫人及び紳士は我が校の生徒を見て、日本婦人が僅かの間に驚くばかり進歩した事を稱へられたが是は、果して其の通りに外國人の眼に映じたか、否かは疑問である。半ばは、禮義のために缺點を云はず、唯以前と比較して其の進歩を褒めた迄と思はれる。又彼等が豫想したよりも進歩して居つた所から、驚いたといふ迄であらう。外國人は我が國一般の婦人を見て、如何なる感を起したであらうか。私は先日愛國婦人會の總會に招待せられたが、其の時外國人も多少見えて居つた。この愛國婦人會は五十萬の會員を有し、今年の總會には二萬五千人の會衆があつたが、其の數を見て、外國人は日本婦人の價値を定めらるゝであらうか。又我が女子大學に來り、其の活動態度或は其の顏を見て今迄度々呈した賛辭の如き觀察を以て、日本婦人の價値を定むるであらうか、否決して斯かる皮相の見を以て定むる事は出來ない。樹木の善惡は實によつて知るべし、日本の婦人が如何なる實を結んだかを知らないで、其の價値を定むる事は出來ないのである。私は昨日海軍の戰捷記念會に招かれた。豫て本校生徒が運動會其の他の場合によく責任を重んじて其の目的とする所の活動が出來、又世間でも其の眞面目なる事、熱心なる事を褒める者が澤山ありますが、併し私は海軍の餘興を見て、或點に於ては到底未だ及ぶ所でない事を感じた。團體運動の自由なる事、學術の研究と、其の應用及び練習と云ふ事が如何に進歩して居るか、私は我が國に於て最も進んだのは海軍であると感じ、夫に就いて、益々社會の他の部分の不完全である事を考へざるを得なかつたのである。又海軍と云ふ如き公の仕事は斯く完全であるが、夫等の人の家庭、人格等に就いて考へる時は、實に歎ずべき事が多いと思ふ。是は何故であるか、我が國の婦人が進まないと云ふ事、卽ち婦人の知識が乏しく、精神の鈍い爲である事を私は深く感じた。國の表面は立派に出來たが、之は男子の領分である。公に顯はれざる、卽ち國の生命の基をなす婦人の領分、それを司る婦人は今日如何なる有樣にあるか、何うも私は滿足し得ないのである。外國人が態々日本の女子を見に來て何を見るか。學校の數、建築物、學課目(科)、及び表面にあらはれたる活動のみを見て判斷を下さうとするのではない。

婦人の感化力、婦人の支配する家庭の有様、卽ち國の基をなす婦人の眞の力、及び其の價値を十分に調べざれば、滿足しないのである。其の實を見ざれば、何うしても其の木はわからない。其の實を得るには必ず健全なる木が入用で其の木が成長するには、必ず根が深く這入つて吸收する所の必要なる滋養分、我々の所謂生命が必要である。其の婦人の生命は如何に育ちつゝあるか、又婦人の位置は社會に於て如何に高まりしかをよく見なければ、我が國の文化の程度も定められないのである。

我が國に於て女子の高等教育を代表して居る我が女子大學校は、既に世界に名高くなり、從つて世界の人の注目する所となつたが、もし種々の障害に壓迫せられて其の實伴はず、之より以上に進歩する事が出來なかつたならば世界の物笑ひとなり、我が國家の體面を傷くる事となりて、畏くも本校に深く御心を寄せさせ給へる　國母陛下の御恩德に對し奉り、我が國の娘達婦人は實に恐懼に堪へないのみならず、我が國婦人全體の發達を止むる事となる。否我が國の文明を阻害し、我が國の運命を危くするのである。斯く云へば餘り悲觀に傾き過ぎるといふ評もあらうが、唯感情でなく、眞に我が國の現狀を調ぶるならば、又自分等の責任の大なる事を感ずるならば、今日の儘では實に安心が出來ないのである。本校が世界に名高くなつたとか、財團法人になつたとか、櫻楓會が成立つて、會員が增したとかいふ事で滿足して、今日の地久節を迎ふる事が出來るであらうか。實に其の目的其の名、其の希望に對して考へて見ると、我々の實力は乏しく、我々の生命は薄弱であり、其の結果も未だ充分ではないのである。

今や世界は平和の天地となり萬物は將に發展しつゝある。我が校運は益々進み、平和の喜びに謳歌すべき時であるが、私はまだ一つ滿足の出來ぬ所がある。もう一つ深く入らねばならぬ、もう一つ達すべき點があると考へるのである。卽ち我が校は或程度迄は進み得たが今一歩先に進んで永久發展して行く事の出來る力を得ねばならぬ、又永遠不朽の生命に達せねばならぬ、此の力を得其の生命に達するには、我々は實に生みの苦勞をせねばならぬ。私の經驗によると常に其の生命が生まれんとする時には、必ず非常の困難と、誘惑とが起つて來て、力盡き、矢折れ、到底目的を達する事が出來ないと云ふやうな逆境に陷るのである。然し此の場合に臨んでは進むより外道はない、倒れる迄進んで始めて廣き天地に逍遙する事が出來、眞の生命が得られるのである。

何れの國の歷史を見ても、文明に赴くには一大原因がある。其の根本の原因に到らずして、實を結ばうといふ事は到底出來

ないのである。然らば其の根本の生命とは何であるか、それは今申す事は時が許さぬけれども、併し　國母陛下の御誕辰に當つて、深く其の思召を考へ、國家社會から要求されて居る其の必要に赴くべき使命を果し、又世界各國から注目されて居る時に當り、如何にして我々は責任を完ふすべきかを考へて貰ひたい、此の責任を完ふする程の力があるか、我々は第二維新と云ふ事を申して居るが、果して此の大任を負ふに足る實力が有るか、實力なくして之を云ふのは大言壯語である、私共には果して此の使命を全ふするに足るべき團體の生命が出來て居るのであらうか、今日の急務は此の實を得るに在る、此の生命を作つて實を結ばしむるに在るのである。此の根無くしては實を結ぶ事が出來ない。私は此の佳辰に當つて愈々責任の重大なる事を感ずるのみならず、是を全ふするには如何にすべきであるかと云ふ深い問題を、御研究になることを切望するのである。

（「家庭週報」第六十四號）明治三十九年五月

女子高等教育に對する意見（其の一）

本日は女子教育に關係ある諸君をかく多勢、お迎へする事が出來まして誠に光榮に存じます。殊に總理大臣西園寺侯爵閣下、文部大臣牧野伸顯閣下の御出席下さいます事は我々の深く喜ぶ所であります。然しこの御兩君は、本日は只毎月會會員の資格を以て臨まるゝのみであると云ふ事を、どなたも御承知おき願ひたいのであります。扨て私は一言、本日此の會を催すに至つた所以を述べて開會の辭に致したいと考へますが、其の所以を述ぶるに當り、何故この毎月會が主となつて都下の女學校長諸君をお招きしたかといふ理由を述べなければなりません。又嘗て毎月會は世間に發表致しませんでしたから、この會の性質に就いても御紹介する必要があらうと思ひます。然し其の目的經歷等を委しく申す暇はありませんから、只本日の會を催すに關係ある事柄だけを簡單に述ぶる積りであります。

毎月會の目的の一つは、一般の教育に關する問題を研究するにありますけれども、就中、女子高等教育に關する問題を研究致しまして、その得た考を此の女子大學に應用して、其の結果を見るといふ事であります。今一つの遠大なる目的は一言ではなか〳〵申す事が出來ませんが、我が國家、社會を組織する凡ての機關の調和統一を計り、社會全體を支配すべき中樞點を養成したいと考へるのであります。之が我が國に於て最も必要であつて、且つ最も缺けて居る點であると感じます。未だ芽生えではありますが、將來之を發達せしめて、所謂眞の團體（ソサ

イテー）卽ち社會生命の根元を養ひたいと云ふやうな目的をも含んで居ります。然るに我が國の現狀を見るに陸海軍を除くの外、教育、宗教、商工業等、凡ての大切なる國家の機關が眞の有機體となる事を得ず、極めて有機的生命に乏しいと云ふ事は、諸君の何れも感ずる所であらうと思ひます。無論陸海軍と雖も未だ完全と云ふ譯にはゆかぬと云ふ事は、永く當局の指導者として、苦心經營せられたる山縣侯、桂伯、兩公の證明せらるゝ所であります。桂伯の御意見によりますと、我が陸海軍は山縣侯等の御盡力によつて、漸く十二支の時計となりましたので、其の後次第に研究改善の結果今日では大いに精巧のものとはなつたが、之を最も進歩せる近世の時計に比すれば、未だ誇る事は出來ないのであります。況や其の陸海軍に遙か後れて居るものゝ現狀は推して知るべしであります。

我が國の一致團結心の乏しいのは何に原因するのでありませうか。或は島國に蟄居した島國根性の餘弊であると云ふ人もあり、又は封建の餘習であると云ひ、到底我が國民は世界の大勢なる一致團結はなし能はぬ所であるとの說もあります。然し之は皮相の觀で、我が國は萬世一系の天皇を戴き、忠君愛國の觀念に富み、人種言語を一にし、宗教等の軋轢も少き國で、決して有機體をなすに必要な性格を備へぬのではない。只之が出來ないのは全體を見る明を缺いて居るからで、一朝世界の大勢を見る目が出來たならば、恰も日露戰爭の當時に於けるが如く、一致協力の實を擧ぐる事が出來るのである。卽ち全體を見て有機的の國家となるには、未だ知識が乏しいのと之を導く指導者が出來ぬ事とに歸因するものと考へられます。この每月會は社會に常に見る如く區々たる事に分離衝突する事なく、どうか一つの目的主義の爲に一致團結して凡ての發展を計りたいと考へます。殊に社會の主導者たるべき教育界が一致團結するのは目下の急務であると感じて居ります。卽ち昨今戰後教育の方針につき、種々の議論興り、女子高等教育の如きは、非常に識者の注意を惹く樣になつて參りました。此の好時機に際し教育家諸君と互に經驗を話し合ひ、將來の我が國教育の爲に一致協同する基礎を作りたいといふ希望から、實は諸君の御足勞を願つたのであります。

何故にかゝる會をわが每月會が發起人となつて催したかと申しますと、本會は女子高等教育の問題を研究して、本校に實驗しつゝあるものですから、かゝる際に經驗談を語り合うて、諸君の御注意を戴きたいといふ必要が含まつて居ったからであります。

私は御免を蒙りまして、一言私の實驗しつゝある模樣を述べ

て、此の問題を解決する御參考に供し御批評を願ひ度いと存じます。

扨て今日はもはや女子高等教育も理想の時代は過ぎ去り實現の時代となりまして、未だ日淺きに拘らず、幾分か明治の女子教育を現はすことが出來ました。而して眞の女子教育の結果は五十年先でなければ見られますまいが、現今の女子教育問題を解決するに必要なる材料となるべき結果だけは今日既に現はれて居ります。然るに今日の女子教育を論ずるものを見まするに、識者と雖も、眞に女子を解せず、只書物の上で調べた材料を以て、或は歐米にある事實を以て、若しくは一人の女子に就いて知る所を以て他を推さんとする傾きが多いのであります。大隈伯も或所に於て、一體女子教育の問題を男子のみが勝手なる說をなしてとやかく云ふが、女子自ら研究した所に基かなければ誤りに陷り易いのであると申されました。誠に至言で、男子が一人の女子を知つたからとて之を以て一般を推す事は到底不可能の事で、之のみで我が國女子の眞價を定むる事は出來ないのであります。然るに甚だしきは世人往々靑二才の男子の書生が、空理空想から、時には病的感情から、主觀的に作り出した議論にすら耳を傾けるのである。教育家も亦この薄弱なる論據の上に說を立てんとして居ります。

識者すら分らぬこの問題が、果して未だ一家を營んだ經驗無き書生に分るものでありませうか、實に我が國の輿論は、かゝるものに動かさるゝほど薄弱なものであります。今日は空論に耽る時では無い、實現すべき時である。我々は事實を調査して此處に問題を集め、之を根據として將來の教育の方針を定むる時であらうと思ひます。私は男子であるけれども、苟も女子教育の任に當るものは、普通一般の人より多く女子を知り、多くの經驗を持つて居ります。故に我々女子教育家の經驗こそ、最も價値あるもので、殊に御婦人自らの經驗を聞くのは、最も必要の事であらうと考へます。どうぞ御列席の諸君には御腹藏無く、意見を吐露して、充分御相談を遂げ、將來の輿論を導く事に一致協力願ひたいのであります。然し我々女子教育に關したもののみでは、一方に偏する恐れがありますので、各方面の先輩諸君より充分に御教示を願ひたいのであります。先づ隗より始めよでありますから、私自身の經驗をつまんでお話し致しませうと存じます。

今日の女子高等教育に關しての主なる問題を分類すれば二つとなります。第一は女子に高等教育を授け、餘りに高等の知識を與ふる時は、女子の本分を完ふせしむるに害ありと稱ふる者、卽ち良妻賢母を作るには、高等教育は有害無益であると云

ふのであります。其の理由を尋ねますに高等の知識を有すると女子に最も大切なる柔順、優美、謙遜を缺き、自ら高慢、生意氣になる。又女子に獨立自營の精神起り、結婚する事を好まぬ樣になり、獨身者の數を增加し、遂に國家の運命を危くする大事を惹起すと云ふ說である。第二の說は、女子高等教育に、前述の如き弊は無いとしても、女子の本分は良妻賢母であるから、之に高等教育を與ふるのは、不必要であると云ふのであります。余はこの議論に對して、余の理想とする所は述べませぬ。只自らの經驗によりて得たる事實を報告して、いかにこの二說が皮相なる根據なき立論であるかを證明致したいのであります。私は十八歳の時大阪に梅花女學校を起し、以來今日迄二十餘年女子教育に身を委ねて居ります。この梅花女學校は今は微々たるものではありますが、設立當時、既に百餘名の生徒を收容し、最も盛んな時は五百名計りも居りました。今日尙二百五十名計りの生徒がありまして、年々卒業生を出して居ります。次ぎに新潟に新潟女學校を起し之も三年計り居りました。次ぎに起しましたのが、今より五年前で卽ち女子大學であります。設立するや否や、八百名計りの生徒が集まりまして、今日では殆ど千四百人近く居ります。而して卒業生は四百名計りあり、其の他修學の半ばで結婚の爲に退學した者が餘程あるので、之等は殆ど卒業生と認めても差支へないのであります。私が三十年間教育した數は隨分多いのでありますが、之等の人々を見ますと、卒業後も非常に向上心が出來、生涯凡ての事に就いて改善して進む主義は有して居る。また之等教育を受けた者は果して獨身生活を好む樣になるのでありませうか。事實は全く之に相反して、多數は結婚するのである。三十年間に結婚しなかつた者は、梅花女學校に二人新潟女學校に二人である。梅花女學校の一人は、卒業後米國の大學に入り、歸朝後母校の爲に働いて先頃死にましたが性來瘦瘠等があつて弱かつたのであります。それ迄の命を保ち、世に貢獻する事が出來たのは全く教育のお影であります。今一人は岡山の山陽女學校に働いて居りまして、かの人が死んだ後母校の校長が是非代りとして働く樣に歸れと勸めましたが、岡山でも極く必要の者となつて離さなかつたのであります。新潟の二人は共にこの女子大學に居りますが、一人は高等師範を卒業し大阪に五年間教師をして居つたが、本校の設立せられた後は、こゝの教諭になつたのである。今一人は本校の家政部を卒業し、後寮監として、料理の教員として勤めて居ります。この人なども生れつき、極めて身體が弱い方であつて、今日世の爲人の爲、働きつゝ、自分にも幸福を得、社會にも貢獻して、意味ある生涯を築きつゝあるの

は、教育をうけたればこそであります。全體に就いて見るのに一人でも高等教育をうけた爲、獨身生活を欲するに至つた事を聞かないのであります。本校の卒業生三百八十名計りの中既に百五十人計り結婚したのであります。尤も第一回、第二回等は高等教育をうけんと欲して居つた者が一時に集まつて來たのでありますから、比較的年長けた者があつて結婚せずに、生涯或事の爲に犧牲的の生活をする目的の者もありますが、之等とても教育をうけた爲に家を持つのを好まなくなつたのでは無く、種々複雜な事情があるのであります。私はもとより女子の獨身生活を欲する者では無いが、人情もかまはず凡ての事情を犧牲として迄結婚して、反つて惡結果を來す事を嘉するものではない。場合によつては獨身生活を送つてよいのであります。又女が學問すると生意氣になる、高慢になるといふ事も論より證據である。さきにお話した新潟女學校を卒業して後高等師範、或は本校の教育を受け、今なほ本校の教育に從事して居る者の如きは私の最も久しく知れる者でありますが、次第〳〵に立派なる婦人となり、謙遜なる人となつて、なほ諸生と共に勉强して居るのであります。之等の人に對して誰一人惡感情を抱く者は無いのであります。其の他本校の卒業生等を見ても、始めには隨分角もあり癖のある人もありましても、三年間に驚く計り、矯めらるゝのであります。其の身體から云うても、知識から云うても、働きから見ても、發達が著しいのであります。而して生意氣、不從順になる事等は思ひもよらぬ事で、却つて困難に堪へ、境遇に適應する事が出來る者は高等の教育をうけた者に多い事は、經驗上明らかなことで、未だ嘗て、教育過ぎて弊害の起つた試しは聞かないのであります。一度逆境に陷つた時之を救ひ得ず、もしくは家庭に入つてそこに風波の絶えぬのは、未だ知識が足らなかつたからであります。修養が成熟しなかつたからである。

第二の問題である良妻賢母となるには、高等の教育は無用の長物であるといふ說は、私の經驗上、少しも理由を認めません。私の教へた生徒だけに就いて見ましても、今日迄墮落したものは一人もありません。尤も種々の惡癖を持つて居る者はあつたが、それは以前から持つて居つたものを學校に入つたから見出したのであります。それも皆學校を出づる前には悔悟したのであります。また今日迄教育をうけないものと、どちらが良妻賢母として認めらるゝかといふと、無論教育をうけた者にあるのです。例をあぐれば實に百千にも渡りますが、近頃起つた事で是を代表すべき一例をあげて見ますと、新潟女學校に姉妹そろうて入學した者があつたが、妹は十二歳の時家に連れ歸ら

れ姉一人教育を完ふしたのであります。長じてこの二人は同じ逆境にあひ、二人とも夫は肺病に罹つて子供を殘して先立たれたのであります。然るに妹は性質は姉よりもよかつたが夫の病に感染したのみならず、其の後教育をうくるには年は長けたし致しまして、さきに希望といふもの更になく、元氣消沈して、終に死んだのであります。姉は夫の沒後、また他に緣付きましたが、二度目の夫もやはり肺病で死に、さきの夫とこの度の夫と各々一人づゝの子供を殘されたのであります。然し教育のあつた爲病にも感染せず、一生を教育に委ねて二人の子供をも養ひ、世の爲にも働いて居るのであります。また同じく梅花女學校に居つた者で車曳きの女がありました。この女は卒業後藩の家老の妻となりましたが、その立派な夫と趣味も合ひよい伴侶ともなる事が出來て、幸福に天職を盡して居ります。之に反して私の知人に妻は無教育でよろしいとて教育のない者を娶つた者がありましたが、後この人が次第に立身して知事となりました。然るにこの妻君は到底知事の夫を助け、家を營む事が出來ませんで誠にあはれな境遇となりました。斯くの如く私は未だ教育を與へて後悔した例を聞かぬのであります。世間では何と云はうが、自らの經驗によつて得た主義は動かすに足らぬのであります。然し余のこの經驗のみでは狹く且つ獨斷的に陷る弊があるので、明治二十三年米國に至つて、女子教育を調べ、また一昨年學監を歐米に派遣して廣く調査しましたが、益々我々の考が違はなかつた事を證明するのみであります。

教育は女子であるから與ふべきものではないといふ理由はない。女子も男子と同じく人間である以上、生まれてから死ぬる迄、生涯發展しゆく事の必要である事には誰も異論はあるまいと存じます。それで、もはや世界中の輿論が今日は女子高等教育を與ふべきか否かの問題では無く、如何にして教育すべきかの問題であります。歐米では女子に男子と同じ教育を授け、職業を與へますが、我が國では女子の爲に女子大學を作つたのであります。米國のスタンレーホールの卒ゐて居るペタゴヂカル、セミナリーは一論文を草して我が女子大學も大いに日本のそれに學ぶべしと主張し、英國の雜誌も頻りに我々の主義の誤らぬ事を稱へて居ります。

新興國なる日本に於て、社會の一半をなす女子に一定の限りをつけてそれ以上進みうべからずとするのは極めて不似合な陳腐の議論である。かゝる議論は元來如何なる處に論據を置いて云ふのでありませうか。然し自分一身の見聞や、經驗では狹いので、いづこいかなる處に未だ知らぬ所があるまいものでもありませぬ。就いては充分諸君の御經驗御意見を伺ひたいのであ

ります。且つ始めて我が國に女子の高等教育を授くるこの女子大學は重大なる責任を負うて居るので、其の盛衰は我が國一般の女子教育に影響するのみならず、將來の國家の運命に關するものであります。此の校設立當時の如きは女子は小學教育で足れりとして、高等女學校の教育すら世間では餘程反對が多かつたにも拘らず、今や一般に高學女學校の教育を必要と認むる程、著しく女子教育の標準は高まりました。もし本校にして失敗し、蹉跌したならば、必ず凡ての普通教育にも影響を及ぼして、其の發達を妨ぐるのであります。日本女子大學は決して我々のみの學校ではない、日本の學校であります。故に我々教育家たるものは、先づ自らの經驗を交換して、その上に理想を築き、淺薄なる輿論に動かさるゝ事なく一致協力して、益々其の振興に務めたいと考へます。願はくば先輩諸君並びに女子教育に關係ある諸君より、御批評を仰ぎ、御經驗を伺ひたいのであります。

（「家庭週報」第六十七號・日本女子大學校每月會）

明治三十九年七月

文藝に對する本校の主義

日本女子大學校に於ける文藝會の歴史に就いて、私はまづ一言述べたいのであります。本校創立の當時、卽ち今より五年前は、未だ文藝會と名づくべきものは無く、只僅かに各寮舍で土曜日等に互に親睦する爲に、又は互に娯樂の間によき感化を與ふる爲に、音樂會、活人畫會を催しまして、或は歴史的のものを、或は創始したものを試みました。其の音樂會、活人畫會が、週を積み年を重ぬるに從つて、次第に進步して複雜のものとなり、終に今日ある文藝會となつたのであります。

扨てこの文藝會は果して教育上、如何なる影響を及ぼすものでありませうか。今日世にある文藝は、隨分社會に惡感化を及ぼし、風規を亂して居り、又文學の如きも、多くは不健全な思想に陷るものが流行して居ります。さればとて之等を全然禁壓する事が出來ませうか。否、禁壓すれば禁壓するほど、反動として惡感化を及ぼすのみならず、元來文學、文藝等いふものは決して弊害あるもののみではなく、もしこれを行ふの宜しきを得たならば、却つて風規を正し、思想を養ひ、國家の文明を來す爲に貢獻する事は著しいのであります。されば本校に於ては始めより積極的態度を以て、寧ろ有益、高尚なる文藝を樂しましめて、大いに教育に資せんと務めたので、偶々消極的態度を以て禁壓する事があつても、それは積極の目的を完全に貫かん

が爲に必要な仕方であるからです。

又本校は文藝、文學等に對して決して教師の命令、學校の規則を以て束縛することはなく、生徒自身の良心に訴へ、自ら顧み、自ら思慮をめぐらして、善きものに親しみ、惡しものに遠ざかるといふ所謂、各自の選擇力を養はしむる事に務めて居ります。されば寮舍等に於ては、新聞雜誌の如きにも充分注意を拂ひ、若しも吾々の想像に害を與へ、思想を不潔にするものであると認めた時には之を斥くるに躊躇いたさないのであります。併し之は寮生全體の自動的に判斷し選擇するに任するので、決して規則或は教職員の權威を以て無理に斥けしむるのではありません。而して本校は彼等學生に有害なる文學、文藝に遠ざかるのみならず、常に之等を改善して進ましむるのを主義を與ふる事に務めます。それで屢々催さるゝ文藝會等に於て發表せらるゝ文學、文藝等を見まするに、未だ極めて幼稚ではありますが、其の抱く理想を或は家庭の内に、或は學校の中に、或は實業界等に現はして、社會人心の改善、進歩に資せんとしつゝあります。併しそれだけでは人間の精神は發達するものではありませぬ。常に積極的態度を保ち得て、燃ゆるが如き向上心を以て熱心、希望を以て喜び、樂しんで事をすることが大切であります。人間に娯樂の大切であることは天性の然らしむるので、その證據としては、幼稚園、小學校の兒童は何を最も喜ぶかといふと遊戯であります。この遊戯は獨り兒童にのみ必要であるのみならず吾々にも否老人にも必要であります。かの萬世にわたりて有名なる哲學者ソクラテスは、いかにも嚴格一方の人であつたかの如く想像さるゝが、それは、全くの違ひで、白髮の老人になつても、なほ子供の樣な無邪氣な樂しみをしたのである。卽ち大道に立つて宇宙の眞理、人生の歸趣を滔々として演說し終つた後、家に歸つては、手をあげ足を躍らしつゝ、歌ひ、舞ふさまはさながら三才の兒童の戯々として喜び樂しむが如きであつたさうであります。この樂しみは、何れの家庭にも、學校にも、病院にも、監獄にも必要であります。私が嘗て米國に居つた時には屢々白痴院の宴會に招かれました。始めは涎を垂れ鼻を出した幾百の白痴も教育せられた結果、音樂もする事が出來演藝もする事が出來る樣になり、文藝會等には代る〳〵壇上に上つて得意の技を振ふので、實に愛と喜びと、樂しみとは、堂に充ち〳〵て、全體を支配し、無言の感化を及ぼして居ることは大なるものであると感じました。又或時監獄等の招きに應じて、恐ろしき犯罪者等も居る前で、一場の演說を試みた時の如きも、彼等は日本のそれと異り、拍手喝采して己が感情をあらはし、始めと終りには囚人自らピヤノを彈

じ、ヴアヰオリンをひき、喜び樂しみの情をあらはす餘裕を充分に與へて、愛の間に感化しつゝあるのであります。實に樂しみを欲するのは、人間の天性でありますので、この特徴を遺憾なく發揮せしむる事は、教育上忽せにすべからざる事であります。然るに現今社會にある文學、文藝を見まするに、意志弱き青年をして或は厭世に傾かしめ、墮落に陷れ易きものが多く、勢ひ禁壓を加へなければならないと云ふのは誠に歎はしい次第であります。然しこれ等を禁壓するは、何か必ずこれに代るべきものを要するので、家庭と云はず、學校といはず、社會といはず、積極的文學、文藝を起す事は目下の急務であります。

本校に於ては音樂會、活人畫會から、次第にすゝんで斯くの如き文藝會を催すに至りました。幼稚なる人々の手によつて自ら爲されたものであるから、幼稚なのは當然であります。卽ち演藝の理想から、之を組立つる事から、技術から、背景から凡て生徒がしたので、私などは今朝迄、何があるのであるかは少しも知りませんでした。卽ち凡て手本によらず、命令に束縛せられずして、自動的に發表構成せしむるので、これで、始めて學生各自の選擇力をも養はしめ、改善、進歩して終に立派なる物を作り出さるゝのであります。これは本校教育の主義であつて、一時は時を多く費して、進歩の見えぬ樣であるが、永久進歩してやまぬ仕方であります。

（「家庭週報」第六十八號・櫻楓會主催の文藝會）

明治三十九年七月

此の休み

人の一生は大なる旅行であつて、其の前途に向ふや、須臾も計畫を怠るべきではありませぬ。今や學生諸子は、一と月乃至二た月の休暇を得て、或は故鄕の父母の許に、或は山水秀麗の地に遊ぶべく、自由なる時を與へられたのであります。この自由なる時は如何に用ゆべきでありませうか。休暇とは云へこれまた生涯の旅行の一部分でありますから決して忽せにすべきではありませぬ。充分に計畫をたて、出來得るだけ有益に過さねばならぬのであります。それで學生は多くは常に講義を聞き、讀書、思考に時を費すものであるから先づ暑中休暇の如きを利用して、日頃學んだ處を應用し、實驗し、若しくは日頃の缺を補ふ爲に勞働し、自然の天地に接して、趣味を養ひ、研究の精神を鼓舞する事が必要であります。勿論之は學校の種類、或は學期の傾向に依つて、其の奬勵を異にすべきであります。例へば我が女子大學の如きは、此の學期に於て一新紀元を迎へ教育

部の開始、幼稚園、小學校の開校を始め、卒業生の組織になる櫻楓會に於ては來年四月に開かるべき慈善市（豊明圖書館に圖書を寄附する爲に）の豫習として、或は文藝會を催し、或は手工を講習する等の爲に大分時を取りました。卽ち此の學期の傾向は實現に重きを置きましたので、自然讀書、思考よりも實際の事に多く力を入れたのであります。故にこの暑中休暇に先だつては、一般に、觀察、讀書、思考の三者を奬勵して、生命ある精神的生活を送ることに努力せしむる樣に致したいのであります。殊に觀察、讀書を缺いて、思考にのみ耽る時は、却つて思想偏して病的となり、神經質となるのであります。卽ちいかほど思考力はあつても、少しもこれに材料を與ふる無くば、到底何物をも作り出すことは出來ないのであります。我々は宇內の現象社會の有樣、若しくは人心を觀察し、研究し、或は古來の學者の觀察し、研究し、思考した思想に接して、常に思考の材料は豊富にしなくてはなりませぬ。またいかに材料は豊富であつても、思考力無くば、其の材料は塵塚の塵と選ばぬのである。畢竟我々は思考する爲に讀書し、觀察するのである。この三者が偏せざる樣に行はれなければ、決して立派なる人格は出來ぬのである。立派なる人格が出來なければ立派なる家庭も、社會も、國家も出來ぬのは今更、此處に述ぶる迄もない。

この觀察、讀書、思考の三者を成就するには、能き境遇を得る事が必要である。本校が四年前當時の三年生の手によつて營まれ、本年迄既に三回ほど本校寮舍內の一部に試みられつゝ來つた夏季寮を、本年は特に輕井澤に移したのも、其の境遇を選ぶより出でたるに外ならぬであります。卽ち空氣は淸し、自然の景色には富み、閑靜な處であるから、實に觀察、讀書思考の三者を營むには好適な場所である。

（「家庭週報」第七十號）明治三十九年七月

山間の夏期寮より

信州及び上州の地、山又山、交通最も不便なるあたりより諸子が萬障を排して此所に會し、種々の經驗を交換せられしは、予の最も喜ばしく感ずる所なり。

元來此の信州の地は、明治維新の昔より教育に盡す事厚かりしとは、予の屢々聞く所にして、現に有力なる教育家も續々輩出せられ、加ふるに本校學生の如きも、創立の當初より東京を除きては信州より來る者最も多しとす。故に吾々は女子教育も亦盛んなるべしと信じたるに、今、諸子の報告によるに圖らざりき僻村の地、未だ文化の餘澤に潤はず、動もすれば反對の傾

向無きにしもあらずとは。併し乍ら歴史の示す所に徴せば、是或は諸子が皮相の觀察ならずや。凡そ何れの所を問はず、苟くも其の鄕黨の爲に盡さむと欲する者は、須らく其の地の人情風俗を察し、此の國人の教育は如何にすべきか、又其の將來は如何に教育すべきかを研究せざる可らず。諸子が櫻楓會の精神を體して其の主義を貫徹せむには、少くとも一縣の必要に應ずる迄も自ら任じて立たざるべからず。諸子個人としては微弱なるが如きも團體は存す、而して其の力は今後益々發達せむ。即ち目下女子教育につきて多少の反對は免かれずとも、斯かる潮流は最早永續すべきに非ずとは、予が今日より豫言し得る所にして、此は日本全國に於ける教育の趨勢に鑑みて、立證する事容易なりとす。

抑も我が國の教育は、世界全體の潮流を汲みたるものなり。嚮きに本校毎月會の發起によりて朝野の名士、殊に最も熱心なる教育家諸氏を招待し、女子高等教育に對する意見を叩きしに、曰く「女子教育は今や高等女學校のみにては、到底時の要求に應ずべくも有らず。ゆく〳〵は帝國大學の門戸も、女子の爲に開かざる可からず」と、或は曰く「女子大學も今後續々設立すべき必要あり」と、是に由りて是を見るも、略々全體の意見を察せらるゝなり。また聞く京阪地方の識者も大いに其の意見を新たにせられ、是非とも關西に女子大學を起さゞる可からずと主張せらるゝ方々ありと。斯くの如く吾々の心づかざる間にも、社會の機運は駸々乎として進みつゝあるに非ずや。諸子は地方に歸る毎に自ら進める爲に、他と伴ひ難きを感ずべく、從つて如何に是を調和して、世に遲れたる人々の惰眠を覺まし、向上進歩せしむべきかを憂ふるならん。併し乍ら諸子にして、卒業後萬一夫以上に進む事能はざらむか、思ふに諸子の生命は長からざるべし。故に諸子は如何にして、人々を進ましめ、又如何にせば、自ら大勢に伴ふ事を得べきかと云ふ事は、二大問題なるべく、是を充分解釋して、適當なる處置を爲す事能はずば、諸子は到底遲れざるを得ず。此を以て一時は如何なる反對ありとも、是を世界の潮流に比すれば、實に大海の一粟も啻ならざるなり。即ち諸子は今後益々奮勵努力して自他の進歩發達を計り、以て世の必要に應ぜざる可からず。今日の諸子は假令微力なりとも、虛を捨て、實を旨として、我が日本の教育界に一道の光明を與へ、社會を覺醒する事を得ば、邦家の將來に貢献する所あるや必せり。此を以て第二の女子大學を起す事も、刻下の急務なりとす。故に一方には益々信ずる所を遂行して其の擴張を計ると同時に、又一方には益々改良を施し、設備を完全にして、眞の人物を養成し、愈々其の實を擧げざる可

からず。然らば今日は最も大切なる時機にして、此の責任は全く諸子の雙肩に在り、從來は男子の力に依る事多かりしも、今や女子も自ら立ちて、是に加はるにあらざれば、我が國家社會を如何せん。乃ち先づ櫻楓會が團體を組織して第二のものを興す事、又是を益々完備せしめむと盡力せらるゝは、國家百年の大計の爲最も喜ぶべき事なりとす。予は諸子の責任の重大なる事より、櫻楓會の目的とする所遼遠なる事、更に進みて我が日本帝國の將來を思へば、全體の爲に畫策し、又着々其の理想を實現すべき事目前に羅列し、殆ど寢食を安んぜざるもの有り。而して今日は文化の大勢凡て科學的、社會的に進めるを以て、是に伴ふ經濟も亦大切なり。故に櫻楓會は自ら卒先して有爲の人材を作り、其の基本財産をも自ら備へ、女子の力を以て社會國家の急務に應ぜざる可からず。此の一大目的を達する爲に全會一致協同する事は、會員の團結力を強固ならしむる上に、又最も必要なりとす。故に吾々は須らく五十年百年の經綸を立て、先づ今後五年間に着手すべき事を定め、其の實現に勉めざる可からず、而して此の責任を全ふする者は櫻楓會員たる諸子をおきて、又何所にか求むべき。予は諸子が全體の爲に充分思考し研究して、其の全體中心を發見し、是を各個人の目的として修養を積む事に依り、茲に始めて眞の生命に觸れ、以て益々進歩發達せられん事を希望す。

（「家庭週報」第七十三號・輕井澤に於ける櫻楓會支部會）

明治三十九年八月

三泉寮の開寮兼閉寮式に於て

今日は正賓として三井氏仝令夫人、正賓と寮舍との中間に立たれ兩方の關係を保たるゝ廣岡夫人及び女子大學と同時に生れたる婦女新聞の福島君を迎へ得たるは、われ／＼の尤も喜びとする所なり、當寮の現在につきてはさきに三年生の報告もありたれば、余は三泉寮の由來及び將來に就きて說く必要あり。

三泉寮の由來　其の名の由て起る所、及び事實を述べんとする當りては、勢ひ三井氏の事を云はざるべからず、三井氏は不言實行を旨とせられ、常に喋々する事を喜こばれざるも、今日は全體の事を述ぶる爲に、三井氏個人の事にも渡らざるを得ず、さて三泉の名稱は、三井といふ三といふ事をもとれり、泉は千古涸れざる其の恩澤を想起すべく、全會一致して命名せるが圖らず三井氏の雅號と暗合せしも亦奇といふべし、こは文字上の事なれども、この名稱は更らに深き意味を顯はさるるものなり。

予は從來種々の意見を發表する時に於て、屢々三階段に分つ事多し、此の三こといふ數は、尤も深き意味を有し、又尤も重んぜらるゝものにして如何なる野蠻の邊土にも三つ迄の數は稱へられ、又宗教上にも三位一體といふ事あり、吾が國に於ても三柱の神あり、人の心的作用にも知情意の三つを稱へらるゝが故に三つは殆と完全といふが如き意味を含む。加ふるに三井家の姓の頭字にもあれば其好意になれる寮には、尤もふさはしき名なり、又泉といふは吾々の生命を養ふ所の缺く可らざる要素の水、吾れ〳〵を活かしむる處の渴水を顯はすものにして、水泉、井の如きは古來尤も深き眞理を顯はす所の記號として、用ゐられたり、予は此れを三つに分ちて

第一健康の泉
第二智識の泉
第三心靈の泉

とす。予が輕井澤に來りて此の三つの泉の水を飲みて殆んど復活されたるかの、經驗を得たるより以來これを一般の人にも得させまほしと希ひしが、これやがて此の寮成立の一動機となれるなり。

第一健康の泉

此の輕井澤は、予の生命を肉體の危險より、救ひ出だしたる所なり。元來、予の生命は、すでに今日あらざりしものなり、怪我とはいへど既に一度無くしたるものが、天より再び借されたるを以て暫くこれを借れるのみ、故に何か是れを要する事あれば、喜びて捧ぐべきものなりき。而して其の借りたる命も將さに終りに近づかむとする時に於て、此の輕井澤の地により今すこし活き延びよと救はれたるかの感あるを以て、予はこれを健康の泉とは稱するなり。予の肉體の生命にも亦三階段あり。第一回の命は予がこの世の中に生れいでゝベビーと稱する第一の時代なり、此の時代に於て既にわが生命は亡き數に入らむとせり、卽ち二歲の時漸う這ひ出でし頃自宅の池に落ちて死すべかりしをやう〳〵に救はれ辛じて蘇生し、以後祖母の元に養はれしも衰弱殊に甚だしく、到底成長の見込みはなかりし由なるが、天祐が、はた灸治の効驗か漸う〳〵にして回復する事を得たり、故に予はその後の生命は全く自己のものとは思惟し能はざるなり。其後予は屢々健康を損し、殊に新潟にありし頃は已が意見を發表せん事に急なりし爲め、嚴冬の長夜演說を續け、遂に恪血するの止むなきに至れり。次にかの渡米の折の如きも、心窃に生還を期せざりしが居る事二年にして、非常なる熱病にかゝり四十度の熱に惱まさるゝ事二ケ月餘なりき。然るに

ダートマス大學總理タッカー博士は、時の社會學の教授なりしが夫人と共に非常なる親切を以て骨肉も及よばざる介抱を與へられたり。故に氏の夫妻は予の再生の恩人なりといふに憚ざるなり。其後三年は餘程の注意を續けしが、歸朝後十二三年を經て、愈よ繁忙の生涯に入り、遂に甚だしく健康を害し、某ドクトルの如きは肺炎カタルなりと診斷し、某國手は神經衰弱なりと診察せられしかば、予は意を決し靜養を旨とし、鎌倉に、箱根に、或は塔の澤に轉地せしも、毫も効驗なきものゝ如くなりき、遂に三井氏のすゝめによりて、輕井澤に二週間靜養せしが漸次に輕快に赴き、肉體の生命は遂に漸う救ひ得るに至りたりき。こは三回目の危險なるが、輕井澤に到りし爲めに生き殘りたるを以て、予の如き腦の弱き者の爲には、全く復活の恩惠ある泉なる事を信ずるなり。

第二智識の泉

智識の土臺は感覺にして、自然を研究する事が其の根本なりとす、而して其の目的を達する爲めに、此の地の如きは類牢(たぐひまれ)なる事をいはむとす。予の知識も亦三階段あり。第一は防州の泉山(いづみやま)なり。泉山は當地小諸布引山に酷似せり。布引山の麓には千曲川還流せるが、泉山の下には吉敷川ありて日夜淙々の音を斷たず、而してこの泉山は予の自然の家庭、自然の學校、又は自然の會堂ともいふべき、予の知識思考科學の根底なり。エマソン曰く「凡て科學は同一の目的を有す。卽ち萬有の性質を發見するにあり」と、古への教育は汝自身を知れよといふ事を說きしかど、今日に到りては自然を學べと奬勵するを基とせり。而して予の爲めに此の凡ての知識の土臺を與へたるものは實に彼の巍峩たる泉山なりとす。十七八歳より廿歳に亘れる最も知力發展の時機に於ける第二階段の境遇は如何、當時居を大坂に移し居しを以て、夏毎に程近き有馬山に入りて川を渡り、橋をかけ、家を造り、外國人に接し、あらゆる方面に知識の材源を養ひたり。第三階段は實にこの輕井澤なり。自然研究及び手工教育といふ事を、教育の一要素として入れざるべからぬを考へ、高等女學校改革案教育部幼稚園の創設を考へしも、全く此の地の賜物なり。故に予の知識は此の山によりて養はれたる事多きを以て、山を稱し、殊にこの輕井澤の山間を稱して知識の泉とはなすなり。

第三心靈の泉

無限の泉、宗教的生命を汲みて湛へし、これにも亦三つの階段あり。予の宗教心は七歳の時より漸く深く印象せられたり。

こは一方母を失ひし所爲もあれど、一は母を葬りたる泉山の山寺の光景肅然として予に宗教心を起さしめたるなりき、余は幼少の時より極めて疑ひ深き性質なりしを以て母の死後地獄極樂といふ事を思はざるを得ず。而してこれを佛者に聽けば法談を說かれ、漢學者に聞けば天を教へらる。予は斷じて其の宗教を信ずる事態はざりき。併し第一に予の頭腦を動かしたるものは又泉山なりとす。

第二に哲學的科學的なる予の頭腦は、單純なる基督教に合點する事を得ず、其の大問題を提げてアメリカに赴き一大感動を受けて自分の天職は飽く迄も女子教育にある事を考へ、此に始めて眞の宗教的生命に觸れしはかのマウント、ホーリヨークなり、此所は有名なるメリーランオンを、起たしめて女子教育の根源をなしたる所なり。異鄕に孤客たりし予は、冬日山皚々たるを見て、一種いふべからぬ靈感（インスピレーション）を受けたるとともに、かの女の偉業を思ひ、殊に女子教育に就て甚だ得る事多かりき。

第三には予が諸子に宗教問題を說くや、宇宙の震動（バイブレーション）に觸れざるべからぬ事を云ひしが、予をして此の感を起さしめたるは此の山間の賜物なりき、一昨年の夏、予、二度こゝに來りて世界的宗教の根源を感得し、殆ど全く復活せられし如く感じたり、輕井澤の地、予は救主なるを信じて疑はざるなり。

健康を回復せしめたる泉、知識を開發せられたる泉、精神的生命に觸れて世界的活動を開始せしめられたる泉、此の地の恩澤何ぞそれ豐富なるや。

斯くいへばわが爲に寮を開きたるかの樣に聞ゆれども決して然らず、一昨年の經驗より昨年に到り愈々固くこれを確め、只自身のみこれを感ずるに止まらずして、世間一般の人に味はゝせたく、種々に熟考する所ありき、三井氏の所有地のみにても、十萬坪あるを以て、經濟の方面にも教育の方面にも考へて、こを用ゐては如何と、其の意見を三井氏に披瀝せしに、その萌芽の如き計畫は遂に三井氏の手によりて實現せられ其後早くも氏は余が名前を以てこの寮の建築に着手せられたり。此所に於て別莊内十萬坪の地はこれを開きて一般の人に福利を與へんとし、遂にこの三泉寮は成立するに到りしなり。

此の三つの泉より湧き出づる所の力は現社會の爲、又將來の國民を養ふ爲に、愈々自ら其の神聖を保ちて、今後東洋に、否、世界に起らむとする宗教的生命の、此の地にも泉源となりて流出せむ事を予は切に希望する所なり、

然れども、近時眞に修養、衛生、を希ひて避暑せんとする者、漸次大磯鎌倉の俗地を去りて、輕井澤の如き地に到るを喜ぶに至りき、然れば吾人は何所までも自ら守り、吾々の所謂宇

宙の生命の震動（バイブレーション）に觸れて、人類的世界的の統一點に歸着せしめん事を、予は此の寮の開寮式に臨み、將來に多大なる希望を持して、此の寮が永久社會の爲め尤も有益なる泉源たらむ事を祝するものなり。

（「家庭週報」第七十五號）明治三十九年八月

頃日見る婦人の特性

予は頃日女性に就きて新たに得たりと信ずるものあり。そは從來理想としては描きしも實際社會には見る事能はざるかを疑へるものにして、即ち女性の内に最も豊かに與へられたりといふ愛情—同情—親切に就いてなり。

女性の愛を如何に感じ、又夫が如何に顯るゝかと云ふ事は、常に吾々が書物にて讀み、又世界の歴史の示す所なるが、西洋の書籍によれば、婦人は天使に比すべしと云ひ、又有名なる社會學者コントの如きは、女性は恰も神の如しと迄も讃へたり。コントの所謂宗教は、愛即ち犧牲の精神に基づくものにして其の高尚なる愛を有する者は是を神に比すべく、從つて宗教は婦人に依つて成立するものなりとせり。然るに支那にては、女子と小人とは養ひ難しと云ふ詞あり。ソクレテイースの如きも婦人の爲には、いたく心を苦しめたるを思へば、女性は果して如何なる者か、此は一の疑問たらざるを得ざりしなり。

予が女子教育に身を捧げし以來、予の經驗せし所によれば、女性の心は綿密なれど、しかも猜疑の念深きものなりき。子弟を愛する心は有れども唯己と云ふ事の爲に支配せられ、己の爲に要求し、己の天地に跼蹐するを以て、全體と共に結合し、人と共に事を爲すが如きは望むべくもあらず、同情の涙は有れども、姑息なり、虚飾なり、一時的なり。其の時々の感情によりて動かされ、喜怒哀樂も常なくして、誠に賴むに足らざるもの、併し社會の要素は家庭にして、家庭は婦人の王國なり。故に先づ其の根本より匡正せずは、社會のあらゆる病原は到底其の跡を斷つべくも有らず、其の善に惡に最も力ある女性の憐むべき缺點は、全く無智に歸因するものなれば、一層嚴重に是を教育し斯かる傾向を矯めざる可らずと信ずるや、即ち予は其の教育の方針を改め、大いに理性を發展し全體を統一する力を養はしむるが爲に、修身の如きも單に學説に依る事なく實踐躬行を旨とし、しかも種々の學理をも參考せしむる事とせり。

然るに三十年間女子教育に從事し來れる今日、從來予が婦人を目せし經驗と、全く異る特性の現はれ來りしは何ぞや。

曰く、從來の愛は本能的のものなりき。此は動物にも有り

て、子孫を保護せむとする心より出づるなり。婦人は子供をもつ者なれば、自ら慈愛の心深きは當然なるも、此の本能的の愛有るが爲に、利己に、姑息に、虚僞に、嫉妬に陷り易く、しかも一時的に熱情に偏するを免れず。斯くの如きは唯情にのみ動ける愛の弊なるも、教育の結果は必ずやこの愛は擴大せられて、全體と調和統一せる所の最も善、且つ美なるものと成れり。此は全く理性の力の發達せし爲に、全體を統一して是と融合せる所の一人なる事を自覺し、玆に初めて宗教的の愛、卽ち全體の中心に從ひ、全體の意志に合體し、其の一部として、人を見、己を認め、以て其の全體の爲に、身を捧ぐる事を得たるによるなり。此に於て始めて宗教は婦人によりて成立すべく、斯くの如きは男子の遠く及ばざる事を明らかに見得るに至れり。

此の姑息ならず、虚僞ならず、一時的ならざる愛、卽ち全體の爲、人の爲に喜びて仕ふる所の全身愛に滿ちたる不朽の生命、無限の力、是有るが爲に、如何なる事をも成就し、如何なる困難にも打ち勝つ事を得べく、是卽ち女性が如何なる人をも感化し、如何なる弊風をも改善し得る所以にして、其の無限の力を得むと欲する者は、先づ此の宗教的生命に觸れて、宇宙全體と融合する所なかる可からざるなり。

詩聖ゲーテは云へり Live resolutely in the whol' in the good, and in the beautiful. とはげに美しの詞ならずや、全體の間に調和して偏せざる愛、是卽ち善なり、美なり。人生の幸福、最高の理想、是をおきて又何處にか求むべき。斯くの如きは吾々人間の本心に、等しく存する要求にして、是を滿足せしむるは、又最も美なる事なりとす。而して是を解せざるは理性の力の缺乏に基くものにして、女子が是を解するに至りしはまた教育の賜なりといふべし。斯くの如く磨けば、金剛石に勝るこの美はしき女子の特性あるを認め得たるは人の爲、喜ぶべき音信なりといふを憚らざるなり。

（「家庭週報」第七十四號）明治三十九年八月

最近の福音

現今青年男女の意氣は如何

ゲーテは曰うた「一國の運命は廿五才以下の青年の輿論の上にかゝれり」と、換言すれば、一國の運命は其の國青年男女の確信如何によりて定まるものなりといふのである。然るに現今我が國社會が、青年男女に對して放つて居る嘆聲は何である

か、曰く煩悶悲觀、厭世の子、腐敗、墮落は其の極に達したといふではないか。少しでも社會にしかく映ずる以上、或は其の事實は實際青年男女の上に存するかも知れぬ。果して然らば我が國の前途之より大いに憂ふべきものはないのである。

然れどもかゝる重大なる問題を徒らに聲高く發いて、敢へて其の救濟の術を講ぜざる者は、我が新日本の國辱を表はさんとする者であつて、又國家人類の至寶とも見るべき青年男女を殺す者である。此の頃英國に於て、日本の青年男女の墮落、腐敗を救はんが爲には、我等宣教の職にある者が其の方法を考究しなければならぬ。而して之等青年學生のために適當な寄宿舍を設置する事は目下の急務であるというて、人々より金圓を詐取したものがあつたといふことである。又先日米國の有力なる一新聞記者は私を訪ねて、種々教育上の意見を問ふ所があつたが、或問題に就いて曰ふには「日本は活氣滿々たる新進國と思うて居つたが、豈はからんや、其の最も盛んなるべき青年男女の意氣が著しく銷沈して居るといふ輿論のあるは、また何事であるか」と、私は之に答へていうたのである、「之實に皮相の觀であつて、社會が針小棒大に傳へた結果に外ならぬのである。無論青年男女には煩悶しつゝある者もあらう、また自殺した者もあつた、然しながらそれ決して我が國にのみ特別に認むべきことではなく、又現今のみの特別の現象でもない。斯樣な事は東西古今を通じて屢々聞く所ではないか。殊に前世紀の遺物なる古き宗教の信仰個條を以て廿世紀の青年男女の頭腦を束縛せんとする歐米に於て、青年の煩悶を免れざる事は、私も亦見聞した所である」と、この答は余が日頃の意見であつて、青年の煩悶を以て、或は多少の自殺を以て、社會がかく迄に悲觀して居るのを却つて怪まざるを得ぬのである。未だ悲觀するはよし、其の原因をも尋ねず、其の救濟の術をも講ぜずして、徒らに攻擊を恣にするは慘酷である。

然しながら飜つて、今日の青年男女の意氣は如何と問ふならば、遂に薄志弱行の詞を以て答へるの外はないのである。此の傾向を研究するに當つては先づ暑中休暇、正月の休み或は一時の試驗勉强を以て卒業證書を握り、社會に打ち出した二三年後の者を調ぶる時は、最もよく其の傾向を知る事が出來る。見よ彼等青年は休暇を以て、遊隋、安逸、娛樂に耽る時とのみ考へて居るから、正月や盆などいふ時は日頃の嚴肅を破つて、踊り、唱ひ、戯るゝを怪まざる風習である。又大磯に鎌倉に、或は輕井澤等の避暑地に往つて、貴き時と、金とを費し、却つて惡習を購ひつゝあるを見るのである。これ彼等は未だ休暇の意味を解せず、閑暇の用ゐ方を知らないからである。休暇は休養

し、心身の疲勞を快復せしめんが爲に、日頃と稍々其の趣きを異にすべきであるけれども、又一つの働きに就くべきものであることを知らないのである。かくて彼等は心身を勞働しないから、閑居して不善をなすの譬にもれず、私情の僕となり、私慾の奴となり、思想は沈澱し身體は隋弱となり、遂に精神的に死し、經濟的に死なざるを得ないのである。またかの試驗勉强を以て卒業證書を握り、社會に打ち出た青年は常に廣き門を求めて止まず、勞せずして貪らん事を欲し、戰はずして昇らん事を希ふ。故に一つの困難に遇へば忽ちに辟易し、一つの失敗を招けば立處に悲觀する。其の目的は富貴名譽に過ぎずして、之に達せんとしては他人を羨望し、或は權謀術數を逞しうするのである。之は獨り學生ばかりではない。此の頃の電車値上げに反對運動を試み、不法にも投石して檢擧せられた者は、多く廿歳前後の青年である。彼等の中には學生も多少あるであらうけれども、多くは丁稚、職工等、社會政治の眞相を辨へないもの等の惡戯である。彼等は遊びて食はん事を欲するのであるから、勤勞を喜ばない。不平を鳴らし遊隋を事とし、己が職業を顧みず、社會の秩序を紊す樣な事を敢へてして光陰を空しうする。これから各階級を通じての青年の弊風は、何に原因して居るか、又如何にしてこれを救濟する事が出來るかは次ぎに求むべき問題である。

青年の弊風を救ふの福音

この青年の弊風は、勿論、家庭、社會に基するのであるけれども、先づ家庭社會の潮流を作るべき學校は大いに其の責を問はなければならないのである。而してこれ決して文部省の訓令、或は學校の規則を以て、矯正し、救濟し得べきものではないのである。今日學校教育の弊は未だ青年男女に確信を與ふるに足らず、不撓不屈の精神を與ふる福音に接せしめざるにある。

何をか今日の福音と稱すべきか。かのカーライルの云うた働きの福音がそれである。十九世紀以前の社會人心の傾向は「汝自身を知れ」といふ事であつた。それから十九世紀の傾向はエマーソンの曰へる如く「萬有を學ぶ」事であつて、最近の福音は「汝の爲すべき仕事を見出して之を實行せよ」といふ事である。卽ち實行し活動するといふことが、眞に吾人の人生を導く燈臺であつて、活動せんには先づ己の仕事を見出さなければならぬ。己の仕事を見出すには萬有卽ち人世をも、宇宙をも學ばなければならぬ、まして汝自身を知らなければならぬのである。

今日我が國の青年男女は如何、實行卽ち心身を勞働する事

に、大きな福音の存する事を知らないのである。さうして徒らに讀書し、瞑想して不健全なる理想を夢み、大言壯語を弄して以て學べりと誇るのである。ために卽つて學問が刄となりて精神的に、經濟的に、否遂に生理的に迄も其の身を殺すに至るのである。この危險極まる狀態から青年を救ふ福音は「汝の働きを知り、而して之を實行せよ」といふ事を信ずるにある。これは獨り青年男女に與へられた福音ではなくして、老年者にも病者にも、同じく與へられた福音である。人生は到底活動である。奮鬪である。この徑路を誤らずして向上する者こそ最も運命の寵兒たるのである。近くこの二ケ月の暑中休暇に於て最も多忙な時日を送つたものは、最も心身健全に、益々新しき希望に充たされつゝ新學期を迎へたであらう。もしも此處に不潔なる想像を描き、不良なる風習を齎した者あらば、それは必ず空虛なる頭腦に宿つたバチルスである、惡魔である。過日三井家の令息が確氷山中に天幕を張らうとして居つた時、一米國人が來り訪うて、徐ろに其の手を擴げ「この大なる我が手を見よ、我等はこの手に銃を提げて南北戰爭に戰うた。斧を執つて草深き米國の原野を開拓した。女子も亦よく之を助けて衣食住を整へ、或は第二の國民を養成したのである。ために我が米國民は男女共に大きな手を有つて居る。此の手は實に吾人の勞働を證明する、實に榮譽ある表彰である」というた。誠に意味深長なる言と云ふべきであつて、此の一語は以て今日の米國の隆盛なる國運を致した原因の那邊に存するかを知ることが出來る。之に反して亡國の民を見よ。この頃韓國に旅行をした一櫻楓會員の觀察を聞くに、國內を凡そ百八十哩も旅行したけれども一人の勞働せるものを見なかつたといふ事である。卽ち女は內房に籠り、男子は遊隋を尊び、學生は又役人たらんがために學ぶ。役人たらん事を望むは、畢竟賄賂を貪らんためで、彼等は只榮耀榮華の生活を送ることを喜ぶの外ないのである。彼等の長所はたゞ權謀術數である。一人として眞面目に殖產の道を講じ、或は國家の進運に貢獻せんとする者無きは、誠に亡國の民たるの當然を思はしむるものであるといふ。これは獨り韓國のみではなく、淸國民の如きも亦其の女子は足を小さくし、指の爪を長くして安逸を以て貴しとする風習がある。抑もこの勞働を卑しむことは東洋一般の風習でもあつて、我が國民の如きは早くこの弊風を脫したやうであるけれども、未だ其の頭腦は働きの福音を解するに難いのである。

若しも我々が手を働かす事を好まぬ時は、頭を作ることも、品性健康を築く事も、經驗を得ることも國民を向上せしめ、確實なる人類となす事も、不可能である。手の教育をせずして、

品性の教育をなす事は、到底望んで得られぬことである。然しながら手を働かす事はやがて知力を働かす事である。勞働の意味には頭の働きをも共に含む、卽ち思考力なくしては「汝の仕事を知り而してこれを實行せよ」との福音を實行する事が出來ないのである。此の働きと云ふ事によつて始めて力も、健康も品性も、築かるゝを得べきものである。働く事は己を支配する唯一の法である。勿論過度の勞働は罪であつて、徒勞は亦避くべきものであるから一つの大きな目的を以て働くべきである。さうすれば必ず煩悶少なく、不平は去り墮落の淵より遠ざかることが出來る。私は今日の青年の弊風は畢竟閑暇の致す事なるを信じ、それは勞働の福音によつて必ず救濟し得べきものなる事をもまた信ずるものである。

勞働の福音は獨り血氣盛んなる青年の爲のみならず、性來頭腦、身體の弱い人も臆病なる性質の者も、之によつて健全となりまた希望、勇氣に滿つる事が出來る。我々がもし不治の病に罹り或は臨終に際した時、如何にして其の病に克ち、死の針より逃れて苦痛を去ることが出來るか。勞働＝之唯一の福音である。

余の生涯に於て、最も強い感化を與へられた人は、澤山保羅である。彼は常にいうた「余は疊の上にては死なず、戰場で死なむ、人生の戰場に倒るゝまで戰はん」と。之は只口に云ひし所ではなく、彼の生涯は終生實に奮鬪的であつた。卽ち十幾年、只一方の肺を殘すのみで生息を續け、病床に横はりつゝ、一言を發すれば凡そ三十分位咳が出て息がはづみ、いかにも苦しげであつたけれども、其の發する言は實に健康の人を奮起せしむるに足り、其の容貌態度は實に青年もなほ耻しきまでに活氣に滿ちて居つた。されば彼に接して、一人として未だ不平を聞いた者はなく、皆其の活氣を受け、新さき光を得て歸るを常として居つたのである。病革るや各友人に宛てゝ記念品の用意をなし、別れの手紙を認めて悠然として眠るが如く瞑目した。彼はかくて終生病の中にありながら而も心身の勞働を忘れなかつたのである。其の勞働は無上の福音として、彼を病に克たしめ死に克たしめたのではないか。またかの詩人ハイネは、巴里のアテツクとて物置同樣の二階といはんより寧ろ屋根裏とも云ふべき處に住んで八年間、半身不髓の病で病床の中に生息して居つた。彼は曰ふ、「今や我には目もなく、耳も無く、肉も無く、力も無く、只殘れるものは聲のみである」と。しかもこの聲を以て、見舞に來る友人等に向つて其の詩人たり、哲學者たり、又諧謔家たる所の特色を發揮したといふのである。又彼の眼は窓掛を隔てたやうに曇り、且つ眼瞼の緊張は衰へて、指を

以て僅かに之を開けば、朧げに物を認める事が出來るといふ有様であつたが、彼はかくても尚筆と原稿紙とを執つて自分の死後よるべなき妻の爲に、はた人類一般のために彼の豊かに美しき思想を餘念もなく書き續けつゝあつたのである。斯かる境遇の中に於てなほ且つ勇氣を與へたものは卽ち彼の活動的精神である。その活動的精神は我々に天職を見出さしめ、如何に病身臆病の人にも犯すべからざる勇気を與へるのである。私は活氣盛んなる青年を救ふにも、死に襲はれつゝある者にも、この福音は必要であると信ずる。今日の我が國學生の意氣銷沈を救ふ良藥は活動である。積極的の活動である。換言すれば自動である。

働きの福音を見出す方法

今や人々のために最も働くに心地よき秋は來た。この時に於て最も大切なる事は「汝の働きを知り而して之を實行せよ」といふ事である。何によりて働きを學ぶべきかと云ふに之には方法がある。畢竟見出した働きを實行する事によつて、明らかに理解し得べきものであつて、何事も必要によつて學ぶ事が出來るのである。これは例を以て説明すれば容易に理解することが出來る。

北亞米利加に住んで居つた人が、南亞米利加に來て、地理、風土を始め、種々研究する處があつたが、南米は北米に比して、氣候が溫暖であつて、四時花を絶たず、且つ花の中には豊かに蜜を蓄へて居る。然るに蜜蜂はこの蜜を採つて運ばうともせず、蜜に飽きては花に眠るのである。之を見た彼は若し北米の勤勉な蜜蜂を移住せしめたならば、必ず多大の利益を納め得らるゝであらうと思ひ、やがて北米の蜜蜂を持ち來り、其の花園中に放つた處が、初めの程は、其の小さき羽根を終日左右して南米の蜂に勝ること數倍の蜜を採集した。けれども夏去り秋逝きて、冬來るもなほ花園の花は絶えないために、蜜蜂は蓄へずともよいと思ふたものか、終にまた蜜に飽きては花に眠る南米の蜂と、選ぶ所がないやうになつた。彼は實に必要より働くといふ眞理を、この蜜蜂の上に見出して止んだといふことである。人の世の中に於ても、金持は三代續かずというて居る。彼等富豪の徒は多く働くの必要を見出す事が出來ず、或は僅かに働いても、それは只虚榮に過ぎないのであるから、彼等の品性を築くことは出來ないのみか遂に財産をも失ふに至るのである。

日露の戰爭によつて我が國は廿億の國債、外債を負うた。これ誠に我國として不相應な負債といはなければならぬ。然るに大國民と云ふ榮譽ある位置を占めて、以て世界の競爭場裡に立

つに當りて、國民はこの國家の現狀を觀察する事が出來ず、其の國民の運命を負ふべき青年の意氣は銷沈し、甚しきは朝鮮人と等しい行動出で、又は投石して市民安寧を破る如き輩も出るといふのは默許する事が出來ないのである。之等隋弱の輩にも、無賴の徒にも、速かに、勞働の福音を傳へて、之を救濟すべき事は目下の急務である。神聖なる勞働は、必ずや彼等をして、健全なる心身を築かしむるに至るであらう。この秋は農夫の刈り入れに忙しいやうに、學生も亦多忙な時である。文藝會をも運動會をもしなければならぬ。實驗も、研究も、讀書も、修養もしなければならないのである。これ誠に學生の爲に喜ぶべき好時期であつて、勞働の福音は將に其の頭上に響きつゝあるを見るのである。

明治三十九年九月

天與の健康に還れ

個人的體育の必要

某歴史家は、人として完全なる肉體を持てるものは皆無であると曰ふた。實に此處に一團の人あるに對ひ、頭痛に惱む者、內臟弱き者、脊髓病に犯されたる者、咽喉惡き者、扁桃線あるもの乃至は脚氣、神經痛、リユーマチ等の如き病氣を患うた者はなきやと問ひたりとせば如何。恐らくはこれら何等かの病の經驗をもつて居らぬ者は稀であらう。然しながら元來人は、健康なるべきが自然であつて、身體の虛弱なのは畢竟、自然の軌道を外れた狀態に外ならぬのである。然らばこの障害物を全滅して、自然の軌道に復し、天與の健康を全ふせしむるものは何であるか、これ卽ち體育である。

健康の大切なは今更いふまでもない、これなくては知育も、德育も、全ふする事が出來ないであらう。否萬事失敗に歸するのである。卽ち關係する學校も、主宰する家庭も、生存する社會も健康なくては何うして其の經營を全ふする事が出來るか。獨り不健康は人生の目的の貫徹を妨ぐるのみか實に罪惡であると云はれて居る。之近世の心理學、哲學等に於て心身の關係を論じ、一原論、若しくは併行論を信ずる者が多いと同時に、我々の身體が如何に其の影響を及ぼすものであるかを知る時は、身體の病氣は獨り身體の上のみに止まらないで、精神の上にも亦病的の働きを來して、罪惡を犯すに至ることは明らかなのである。此に於て體育の價値は、自ら定まるものといふべきである。

扨て斯樣に重要な體育の價値を全からしめやうとならば、先

づ其の目的を問はなければならない、私は體育の目的を以て、第一健康、第二技術、第三休養の三條に置かうと思ふ。然しながらこれは一にして三、三にして一である。故に其の目的を簡明にして、實行を便ならしむるために孰れの一條を選んで實行するとも、他の二ケ條は自ら其の目的を達せらるゝのである。こゝに先づ健康といふ目的を達せんとならば、如何にすべきであるか。

先づ健康を得るの方法に就いて考究しなければならぬ。如何なる體育の大家であるとも、萬人に等しく健康を與へる事の出來る體育の方法を編む事は、不可能の事であらう。殊に健康は獨り遊戯、體操等のみによつて得らるべきものではなくして、衣食住にもまた大なる關係を有するのである。さうして此の衣食住は、個人〳〵によつて、其の要求の異なるべきは明らかである。故に何人にも適する遊戯、體操を取り、何人にも適する衣食住を選ぶには、個人的體育による外はない。勿論團體的體育の必要なるは、論を俟たぬことであるけれども、從來人々に餘り多くの注意を拂はれなかつた個人的體育は、人たる人に終生缺くべからざるものであつて、同時にまた如何なる人、如何なる境遇に於ても、必ずつとめ得らるべき體育方法である。

この個人的體育は、教師も自己、生徒も自己であるからして、各自に研究しつゝ經驗を積むことの出來る所謂自動的體育である。もし人が天與の健康に歸らん事を欲して、先づ各自の病氣の原因を尋ぬるならば如何。

病氣の原因には精神上より來るものと、肉體上より來るものとの二種がある。しかし一歩を進めて云ふならば、病氣の原因は凡て精神から來るものであると云ふ事が出來る。卽ち人を憎む事、嫉む事、怨む事、不平、不滿、心配は必ずや罪惡、或は病氣といふ子を生むに至るのである。然らば精神の調和は、之等を全滅する事の出來る藥餌である。精神の調和とは畢竟知と、情とを、意志によつて統一することに外ならぬのである。精神の調和が身體の調和を齎らし、全精神、全身體、調和合體するに至つて、此處に天與の健康に歸る事が出來るのである。然らば個人的體育の方法は何うすればよいか、一言以てこれを云へば、身體の需要を充たす事と精神の需要を充たす事とを務むるにある。例へば不眠症に犯された者ありとすれば、自ら其の原因を尋ねて、熟睡を齎らすに足る凡ての方法を講ずるのである。卽ち血液の不循環も睡眠を妨ぐべく、空氣の流通惡しきも、寢床の不完全なるも、亦大なる妨害を與ふるものであらう。更に精神の狀態は大なる原因をなすであらう。さうして凡て之等に適當の處置を加へ、方法を講ずるは、其の當人自身で

なければ不可能の事であらう。

然れども個人の經驗、卽ち實驗は往々獨斷的に走る弊があるからして、この個人の實驗の結果を集めて、全體に通ずる原則を見出だし、其の原則を應用して、團體的體育をも完全に其の目的を達せしめ、更に又個人に顧み、團體に及ぼし、兩々相須つて天與の健康を全ふする事が出來るのである。

明治三十九年十月

自愛と他愛及び愛國心と博愛心

教育の原動力として、最も大切なるものは、學生の興味である、向上心である、好奇心である。所謂何事をなすにも、熱心にする、非常なる精神に滿ちて、物を研究し、構成するといふ事が心要である。之れが卽ち學生を動かす原動力であり、學生の力を發展させる所の動機、學生の常識を養ひ、研究力を發達せしむる所の力である。此の心要なる興味を養はしむる爲めに、本校では、諸子を自動的に活動させ、全體の爲めに一致協力する所の力を固くさせるのであつて、是れ等の境遇は、社會學、心理學、教育學、倫理學等の最も興味ある實驗場となるのである。之れ等の學問は、只書物で讀むのみならず、實際に行ふことが大切である。卽ち、學問は、學生自身の自動によつてするより外はない。運動會、文藝會、バザー等に依つて、銘々の精神を社會に發表するといふ樣な時に於ては、最もよく、此の自動の精神が養はれるのであつて、自動的になさしむることに依つて、始めて、非常なる興味は起るのである。海陸軍が非常に發展したのは、僅かに十年程の間に、二度迄も、大なる戰爭を、實際にしたからで、實地に當つての研究は、最も興味があつて、有効なるものである。

學校に於て運動會、文藝會、バザーの如く、社會に關係した事を、時々行ふことに依つて生ずる、生徒銘名の修養研究上の利害得失はどうであるかと考へて見ると、一定されて居る日課の仕事のみを只忠實にして居るよりも、確かに其の結果は良好なるものでなければならぬ、之れは今日迄の經驗に依つても、明かな事である。實例を擧ぐれば、運動會とか、文藝會とか、バザーとか云ふことゝ、本校の教育とを、私はどう云ふ風に、結び付けて、導きつゝあるか。私の受持ちである實踐倫理と、夫れ等との關係に就て云へば、先學期一年生には、有機體と云ふ事を申しました。之れは時を用ゆる上にも、全體の調和を計る上にも、大切な事で、運動會、文藝會、バザーに應用することが出來るのである。此の學期になつてからは、自己に對する

本務の一つである個人的體育に就て、說いて居る。之れは運動會をする上に是非體育を研究する必要があり、そして運動會の目的を達する上に、自分の時間を有益に使ふには、どう云ふ風に時を用ゐれば善いかと云ふ事である。諸子の之等の場合に受持つ役目は種々異つて居やうが、こう云ふ催しをするのは、皆學科の應用である。そして、全體で纏めたところの精神を發表するのは、一の技術である。凡ての知識を統一する所の活きた學問である。知識が統一せられるから、思想が擴大せられ、興味が出來るから、非常なる勇氣が出て、著しく進歩するのである。斯くの如くにして、最も善い所の有機體を作ると健康も善くなり、時も餘裕が出來て、眞の力が養成せらるゝのである。又第三學年と二學年とには、美と云ふことを說いて居る。美は眞から起るものであるから、眞善美の理想から說き及ぼしたのである。此の美の理想とは何であるかと云へば、卽ち理想の實現で、本校に云ふ所の宗教的生命である。第四回生の最も勉むべき點は、自愛と他愛との關係を最も善くして、理想を實現することで、夫れは卽ち、我れ／＼の目的である。此の理想を實現する爲めに、運動會、文藝會、バザー等の境遇をかりる事は、誠に必要なことである。此の學年には文藝會、運動會、バザー等をする事は、本校教育の目的を最も有効に實現せんが爲めである。

此の自愛說と、他愛說の二つは、正反對の樣であるが、決してそうではない。極端なる自愛說と、極端なる他愛說とは正反對のものであるが、完全なる自愛說と完全なる他愛說とは、つまり一つに歸するものである。此の調和を期するのが、我れ我れの云ふ善であり、又美であるので、我れ／＼の云ふ理想の實現とは、此の二つの情の最もよく調和した處の狀態を云ふのである。而して玆にも一つ考へて置いて貰いたい事は、愛國心と、博愛心との關係である。愛國心とは、自愛心であろうか、他愛心であろうか。日露戰爭の爲めに、生命を捧げたる軍人等は、決して名譽心の爲めではない、眞に自分達が身を捧げねば、國家は滅ぶると云ふ考へから、異境に尸を曝らすに至つたのである。又國家社會の爲めに、財產を捧げた者がある。之れは利己心であらうか。

人には、己の幸福を願ひ、己の人格を高め樣とする自我心があるが、其本はやはり、自我保存と云ふ本能から來るのである。又人を愛し、他を利すると云ふ事も、我れ／＼の本能の中にあるが、之れが既に調和發達して、同情的、社會的情操となるのであつて、我れ／＼は、人の幸福を見て喜び、人の不幸を見て悲み、人の危險を見て、惻隱の心があり、又は惡い行をし

て、之れを恥づる廉恥心がある。又自分の行に對して、多くの人が賞讃すれば、愉快を感ずる所の自重心等もある。人を思ふ情、己れを愛する情、何れも我れ〳〵の本能の中にあるので、時々此の二方面の情は衝突する、茲に於て、戰爭が起つたり、人の行ひに醜美の差を生じたりするのである。

そこで私は、今解し易い樣に、自と、他とを各二つに區別して申します。我れを分けて、部分我卽小我と、全體我卽ち大我又理想我とする。此の大我卽ち理想我は自愛と他愛とを調和統一して、完全に働いて居る我れである。

他を二つに分けると、一つは、自分以外の個人、又はある學校とか、ある社會とか云ふ個人的團體である。他の一つは全體である、人類全體である。又之れを宇宙とも、神とも云ふ、我れ我れは、親であるから、友人であるからと云つて愛することもあるが、併し又、人類の一員として、其の親、或は朋友を愛し、又自分を愛すると云ふことがある。是れ卽ち全體の一部として、合體して居る所の他に對する愛であつて、最も偉大なる愛は是れでなければならぬ。茲に於て、自我を愛することも、他を愛することも、一つになるので、益々自分を修養し、向上して行こうと云ふのは、全體の進歩を計るからである。此の自我を愛することゝ、他を愛することゝの調和が、卽ち美の理想の實現である。

此の己を愛すると云ふ事が、一歩擴大せられて家を愛することになる。己れを愛すると云ふのは、己れの意志を保存すると云ふ事で、子孫を愛することゝなり、一家を愛することゝなり、國家を愛し、國民を保存すると云ふ事になるのである。日本人が、外國で排斥せられたと云ふ事を聞いて、我が國民として憤慨しないものはない。之れは卽ち愛國心であつて、愛國心は卽ち、國民的本能であり、國を保存すると云ふ感情である。夫れで、愛國心は、我が版圖を擴張せよ、我が天國を建設せよ、我が國威を發揚せよ、我が國利を增進せよ、と叫ぶのであつて、之れを帝國主義といふ。アメリカは、以前は、モンロー主義を取つて居つた、帝國主義は、大なる自愛であるけれども、アメリカのツラスト、日本人排斥は、愛他心と調和の出來ぬ極端な自愛說である。米國の大統領及び紳士には、博愛心に滿ちて居る人もあるが、併しアメリカの一部に崩した、かの思想は、健全なるものとは云はれないのである。極端なる利己心が個人の修養の上に害のある樣に、極端なる愛國心は、國家として甚だ弊害のあるものである。故に、我れ〳〵の云ふ愛國心は、もつと擴大したものでなければならぬ、我れ〳〵の抱懷する愛國心は、世界的平和を目的とし、敵國に對する正義、人類

全體の共同に由りて得る運命を目的とする、卽ち世界全體の發達、人類全體の勝利を目的とするのである。換言すれば、世界の文明、人類の安寧を期するのである。

抑も、此の愛國心といふものは、母の我が子を思ふ如き、本能的愛情の擴大せられて、出來た所の國民的自我心とも云ふべきものである、故に、子に對して、最も深き愛を持つ所の婦人は、又國を思ふ事も切である。故に婦人が蒲柳の身を以て、國難に赴いたと云ふ樣なことは、各國の歷史に屢々見る處であつて、殊に我が國の、忠君愛國の精神は、母親に依て傳へられたと云つても善い位である。國家の爲めに、或は、人類全體の爲に、進んで一身を犧牲にすると云ふ精神は、男子よりも、婦人の方が、もう一層强く、一層自然的のもので、之れが愈々發達して、博愛心となり、宗教心となるのである。故に、哲學者の中には、女子は神である。實に宗教の眞髓は、女子の心に基して居ると迄に、云つた者も多くある。故に婦人は今日の時勢に鑑みて、世界の平和に、最も必要なる自愛と他愛との、調和を計るべき、責任を負ふて居る事を、自覺せねばならぬ。玆に於て、最も深き關係を有する諸子の責任はどうであるか、今日諸子は如何なる理想を發表すべきものであらうかと云ふ事を深く考へて御覽にならねばならぬ。故に私は此の運動會に於ても、諸子の心にある愛國心と、博愛心が如何に發表されつゝあるかと云ふ事に、最も深き注意を拂ふて居る、諸子は最も些細なる事と思ふかも知れぬが、諸子が二つの團體に分れて、競走遊戲を試みると云ふ樣な時に、健全なる愛國心、健全なる博愛心を養ふべきであるから、最も公明正大なる判斷力を以てして、我れ我れの愛國心、我れ／＼の博愛心を最も善く發表して、益我が校の博愛心と、愛國心とを教育することに勉めねばならぬ。殊に此の度は、多くの外國人、並びに淸國の提學使も見える筈で、其の中には隨分學者もあり、教育家もあつて、皆立派なる人達である、斯かる外國人に對して、諸子は如何なる精神を發表すべきであらうか、願はくは、我れ／＼は萬國の平和を期するものであると云ふ覺悟を以て事に當り、例へば、例年の樣に、各國國旗を以て裝飾するならば、露國の國旗をも、同じ樣に加へる樣にして、裝飾に、接待に、凡ての方面に盡して貰ひたいと思ふ。

又文藝會に於ても、我れ／＼の大なる愛國心、博愛心を現はして、最も大なる美の理想を實現しなければならぬ、我れ／＼は、世界の文明の爲めに、東洋の教育の爲めに、大なる使命を感じ萬難を排して、本校を創立したのである。故に我れ／＼は、初めから、愛國心を培養することに勉めて居つたのである

が、其の精神が畏くも　皇后陛下の御耳に達して、非常なる御同情を蒙り、創立の當初に於ては、　皇后陛下の特別の思召を以て、御下賜金を辱ふ致した以來、本校も段々、基礎が固まつて來り、其實を擧ぐる事に勉めて居つた所が、此の度の秋季文藝會には、高輪宮、麻布宮に在します、内親王殿下御四方並びに各宮妃殿下方の御臨場を辱ふすることゝなつたのである。昔から我國に於ては、宮中が殆んど我が國家の腦髓である、全體を支配する所の精神であつた。丁度こう云ふ時に於て、斯くの如き光榮に、浴するに至つたのは、深き意味のあることゝ思ふ。我れ／＼は我が國家に對し、東洋に對し、又世界の各國に對して、如何なる責任があるかを充分に考へ、夫れを藝術に依つて現さねばならぬと思ふ。此の際諸子は、深く考へられて、着實に準備をなさることは、丁度我れ／＼の理想の實現として、最も大切なことである。此の次に來ることは、來春のバザーであるが、之れも我れ／＼の愛國心、博愛心を養ふ上に、最も大切にして且つ甚適當なる境遇であるから、是れをよく教育に結びつけて、本校教育の資料とし、早くから充分に準備して、各方面の効果を全うし得る樣にせねばならぬ。此の事に就ては種々申したい事があるが、此の方は開催までに、未だ時もあるから、追々御話する積である。

現在に就て、我れ／＼は斯の如き教育の方針を取つて居るのであるが、之れは決して、一時的の事ではなく、今後の我れ我れの働きに、大なる關係を有するのである。私は日露戰爭時に、之れは只干戈の戰爭のみでない、文野の戰爭である、智識の戰爭である、天然との戰爭である、今後五十年も、百年も、連續すべき戰爭を開始したのであると云ふことを申したことがあるが、今日世界の形勢を見ると、決して平和ではない、我が國は決して安全な地位に居るものではない、人種的、宗教的の偏見は、未だ悉く取り去られぬ。彼れ等の利己的野心は決して薄らいだのではない、これ等凡てのものと戰て、勝利を得るに足る處の實力を、我が國は未だ得たと云ふ事は出來ぬ。然し我れ我れ日本國民は、平和の戰ひを續け、商工業に、教育に、宗教に、文學に、美術に依て、世界の爲めになす所があらねばならぬ。スパルタは、女子と雖、非常に尚武の勢に滿ちて居つたといふけれども、遂に滅亡を免れなかつた、ローマの盛大な時は、長くはなかつたが、其の文物は今日も尚生命がある。此の世界に武力のみを以て立つことは許さないのである。我れ／＼の第二の維新といふことは、革命ではない、干戈の戰爭でもない、實に婦人の天性である處の、平和の戰爭である、人の心の中に衝突して居る所の、自愛心、他愛心との調和を計ることで

ある。之れは實に大きなことであるが決して私が主觀的に拵へた空想ではない、現今の世界の大勢を洞察して、深く我が國の前途を思ひ、世界の將來を慮るならば、何人と雖、實に斯く思はざるを得ないであらう。

日本が強いと云ふ事は、少しは世界の人々に認められた樣ではあるが、桑港や其の他の歐洲大陸に起つて居る、種々の潮流に由つて見ると、未だ日本を友として認めて居るとは申されぬ。人種的偏見は、到底我々の想像し能はざる迄、未だ人心を支配して居る、此關係を充分わかる樣にするには、時を要するから委しく云ひませんが、つまり我國民が、兵力の戰爭に勝利を占め、此の利己と他愛の情を調和して、世界的宗教を信じ、如何なる文明國人にも劣らない所の、最も高尚なる道德心を以て、立つに非ざれば、日本は眞に世界的文明國の列に加はることが出來ない、若しも、日本にそれが出來ないならば、東洋は遂に救はれぬのである。東洋といふ地球の半面が暗黑であつたならば、世界の人類に幸福を來すことは出來ないのである、此の大使命を自覺して起ち、之れを完うし得るものは誰れであらうか、櫻楓會はその一員として當に立て、此處に赴かねばならぬ、諸子は小さな自愛を脫し、眞に健全なる他愛と一致する所の自愛を以て事に臨み、此の暗黑なる精神界に一縷の光明を齎さねばならぬ。櫻楓會は、我れ〳〵の教育の根本であり、又社會の教育を助ける所の方法であると、私は信ずる。願はくば、諸子は、今日の時代の大勢を考へ、時の象徵をお感じになつて、銘々の方針を定め、全力を擧げて、一事一事を全うせらるゝ事が必要である、諸子は今や區々たる事に拘泥せず、度量を大にして、全體の爲めに起たねばならぬ時なのである。

（「講演集」第一）明治三十九年十月

愛國心と博愛心

建國二千有餘年の國史は、萬世一系の比類なき光榮を傳へて、此處にまた外世界に向つて隆々たる國威を發揚し、內、更に興國の新氣運洋々として盈滿せるの秋、謹みて天長の佳辰を壽ぎ奉るを得るは、國民たる者の歡喜措く能はざる所なり。伏して惟るに、僅々四十の歲月に滿たずして帝國の今日の發展を致したるもの、偏に叡聖文武なる我が、皇帝陛下の稜威に因るものにして、國民の固有の美德なる愛國心は此に於てか一層の培養を遂げられたりと云ふべし。

愛國心！　母が子を愛する情より發達し、國家の國民に於ける恰も親子の親愛の如く、國家は國民の恥辱を憤り、其の不利

益を保護し、或は其が前途の繁榮を祈りて止まざるが如き、國民も亦國家の急に赴くや、死も尙鴻毛の輕きに於て顧みざるが如き、所謂國民的自我心之なり。

抑もこの國民的自我心、卽ち愛國心は、今日文明社會の理想とせる世界的、宇內的なる博愛心と相反するものなるべきか、否か。愛國心は常に叫んで曰く、我が國民を膨脹せよ、我が範圍を擴張せよ、我が帝國を建設せよ、而して我が國威を發揚せよ、我が國利を增進せよと。之外國より見れば、皆他國の侵略に過ぎざるやの感なき能はざるなり。然らば全く愛國心と博愛心とは相容れざるものなるべきか。此處に兩者の關係に就いて、正鵠なる判斷を下すに先だち、愛國心卽ち自愛と、博愛心卽ち他愛とを、稍仔細に問はんと欲す。

自愛に二種あり。部分我卽ち卑しき我——小我の愛と、全體我卽ち大我——理想我の愛となり。己の爲に己を愛するは部分我にして、全體に合する個人を愛するは全體我なり。この全體我は完全なる他愛と區別なく、殆ど自愛と他愛との調和統一にして、美しく働ける我なり。

更に他愛を分ちて、他の個人又は他の個人的團體を愛すると、全體卽ち人類、宇宙或は神を愛するとの二種とす。もし他愛に於ても、他の個人又は他の個人的團體を愛するに至らば、不完全なる自愛と何の選ぶ所なきなり。されば極端なる愛國心は、不完全なる他愛にして、之自我が人々の發達を傷くるが如く、國家の進運に害あるべきことは明らかな所なり。然れども完全なる他愛は決して、自愛を外にしては行はれぬものにして、畢竟完全なる他愛も亦自愛の擴大せられたるものに過ぎざるなり。

この自愛及び他愛の精神は、人々の本能にして必ず人は己を愛し、國を愛すると同時に他人を愛するの情を自然に備ふるものなりとす。然れどもこの本能に任せたるもの多くは、不完全なる自愛或は他愛にして、常にこの兩者の關係に注意せざれば、往々其の軌道を逸するの恐れあるなり。畢竟世界に戰爭起り、平和來り、人心に醜美の情を釀すもこの兩者の關係に外ならざるなり。

既に世界の舞臺に雄飛せんとする我が日本の愛國心は、決して偏狹なるべきものにあらずして常に世界的平和を目的とし、他國に對する正義を保ち、人類の安寧勝利を希望せざるべからざるなり。これまた我が日本帝國をして、不朽の基礎を築かしむる原因なりと云はざるべからざるなり。卽ち劍戟によつて購ひ得たる赫々たる光輝は永久に保つをうべきものなるべきか。天刑によつて覺醒せる國民は不斷の勇氣に生くるをうべきもの

なるか。否、時の徴候を見れば決して之等の力はなほ依頼するに足らざるものなり。

即ち、今や我が國日露の戰局を結びて、僅かに二歳の歳月を經ずと雖も、決して泰平の秋にはあらざるなり。余はかの日露開戰の當時この戰は一時的のものにあらずして、實に五十年を要すべく、日露の戰にあらずして世界の戰なり、獨り干戈の戰にあらずして、文野の戰、商業の戰、知識の戰、天然の戰なり、との意見を發表せり。今や世界の大勢を窺へばこは敢へて不當の言にあらざるを知らるゝなり。見よ我が國は戰勝後一等國の班に列し、歐米の列强と併馳せりと雖も到底彼等列强は人種的、宗教的偏見を打破すること能はずして、今や其の猜疑の眼を瞠れり。或は日本人排斥運動を試み、或は我が貿易に妨害を加ふるが如き事を、頻々として行ふに至れり。之人道に反するの敵を、武勇を以て打ち懲らしめたりと雖も、世界の平和を來す事は勿論、其の反省を促す事すら不可能なることを證するものなり。また近く米國桑港に於ける震災の如きも、多くの迷信的信徒は天刑として畏怖せりと雖も、果して彼等國民は其の非を全然悔悟するに至りしか。事實は全く相反して、益々彼等は其の主義を逞しくしたるにあらずや。近く可憐の我が就學兒童を排斥したるが如きは、人道より云ふも、宗教より云ふも、實に背逆の至りと云ふべきなり。これを以て見るも、天刑もなほ人間に高尚なる宗教心、博愛心を授くることの力なき事を證するに足れり。

更に歴史を徴するも、かのスパルタの武力は遂に其の國の滅亡をさへ救ふこと能はざりき。ローマも世界を征服せる武力を逞しうせりと雖も、その勢力は永續すること能はざりき。却つてアテンスの文明、ローマの學問法律は今日と雖も、なほ世界の人心を支配しつゝあるにあらずや。之武力、或は天刑の如きものに依頼するのみに於ては到底永久の平和を致すこと能はざるを證するなり。

然らば何を以てか永久の平和を致す事を得べき。之他ならず學問に於て、教育に於て、道德に於て、宗教に於て最後の勝利をえしむるにあり。換言すれば精神的戰爭に於て、永久の平和を購ふにあり。かくて國民の愛國心と博愛心との調和統一を計るをえて、始めて社會人心の度量を廣め、平和の中に全體の進歩を促すをうるに至るべきなり。

既に愛國心は母が子に對する犧牲の精神に其の起源を發す。之愛國心は女子が男子よりも遙かに强く、且つ自然的に保持する所以なり。殊に我が國民の愛國心は其の母の生めるものなる事は歴史の明らかに語る所なり。此に於てか愛國心と博愛心及

び宗教心との調和統一を計り、東洋、否世界の平和を來らしむるは、實に我が國婦人に授けられたる天職なりと云はざるべからざるなり。今や我が國の家庭は既に感化力を失ひ、我が國の宮寺は、其の勢力地に墜ち、しかも我が教育界精神界を根本より養はんとするの團體をも見出す能はざるなり。然して我が日本たるや東洋の運命を擔ひて、世界の競爭場裏に馳驅せんとするに當り、國家の基礎を堅うして、上は我が皇室を安め奉り、下は國民の平和を謳歌せしむるを得ると否とは實に女子の天職に須つもの多きを見ずや。女子たるもの幸に自重自奮せずして可ならんや。

（「家庭週報」第八十一號・天長節祝賀式）

明治三十九年十一月

本文藝會の結論

明治卅九年十一月廿六日は、我が日本女子大學校の史上に特筆大書して、記念すべき光榮ある一日なり。畏くも常宮、周宮、富美宮、泰宮の四内親王殿下を始め奉り、閑院宮、東伏見宮、山階宮の各妃殿下、北白川宮武子女王、擴子女王の兩姫宮の宮方に於かせられては、本校の文藝會に成らせられ、御氣色、殊に麗はしく、生徒等の未熟なる文藝どもをみそなはし、特に本校長に拜謁仰せつけられ、優渥なる御諚を賜はり、御土産として高輪の兩宮、麻布の兩宮、各金壹百圓宛御下賜給はり、其の他の宮家よりは、御菓子料として金拾五圓宛御下賜給へる事どもは、一同の恐懼措く能はざる所なり。殊に本日は畏くも　皇后陛下の御許しを得て、柳原典侍を始め、宮中女官方の臨まるゝに逢へるは、併せて一同の深く謝する所なり。この光榮は獨り我が校の上に止まらずして實に本邦女子教育に、否、我が婦人界の進歩發達に多大の影響を及ぼすべき事は疑ひもなき所なりといふべし。

抑も學生の風紀問題と共に、文藝に就いても是非の論難喧しき時に當り、本校が未熟なる文藝を公にして高貴の方々を始め奉り、或は教育者に或は批評家に訴へて、敢へて其の結果を危まざりしは、聊か本校が文藝に對して、抱持する主義の存するありしを以てなり。先づ本校は文藝の弊害に陷らざらんが爲、如何なる確信を抱きて、この擧に出でたりしか、如何なる目的を貫かんが爲に、この文藝を行ふの必要を認むるに至りしか、更にこの文藝會によつて、教育上如何なる効果を及ぼすに至れるか等は、本文藝會の結論として此處に述ぶるの必要ありと信ずるなり。

先づ本校は文藝の弊害に陷らざらんが爲
如何なる確信を抱きてこの擧に出でたるか

と云ふ所謂文藝の消極の目的に就いて問はざるべからざるなり。我が校の文藝會は未だ幼且つ拙なりと雖も、また全然世間に行はるゝ演劇、或は外國の各學校に行はるゝドラマの類とも、其の選を異にすべきものなり。さればとて勿論、本校の文藝が唯一と云ふにはあらずして世間の演劇殊に外國のドラマの如きも、教育上の價値尠からずと雖も、之等はまた弊害の件ふを保し難し。この弊害を全く除かんと欲して蓋し本校は文藝會に就いての主義を先づ明らかにするの必要を認めたるなり。即ち演劇或はドラマと本會の文藝會とは、少くとも左の諸件に於て異るべきものとす。

(イ) 演劇及びドラマに於ては、其の筋多くの男女間の關係を表出するを以て、從つて男女の演劇者の登場するを例とすると雖も、本文藝會に於ては斯くの如き筋書を嚴禁するのみならず、男子に扮裝する事は一切これを許さざるなり。

(ロ)演劇、ドラマに於ては、善人なりとも最もよく惡人を現はす事を得、老年なりとも、最も若く扮する事を得る等、凡て自由自在に化裝するを以て巧妙と爲すと雖も、本文藝會に於ては、成る可く自然を尊び、鬘、化粧等は之を禁ず。

(ハ)演劇、ドラマ等に於ては、觀客の感情を著しく感動せしむる事に努力すと雖も、本文藝會に於ては其の個人性を失ふ事を禁ず。偶々全體の目的を達せんが爲、惡人を出すことありとも、其は必ず悔悟すべき性を有すべきこと。

(ニ)演劇、ドラマは衣裝、道具に凝るも、本文藝に於ては之を禁じ、華美、贅澤に陷る事を戒め、成る可く有り合せの物を融通して用ふる事。

(ホ)演劇、ドラマは多く模倣に出づ。即ち歴史的のもの、或は然らずとも作者は全然別の者にして、敢へて演技者の主義を現はしたるものにあらざるはもとよりなり。此の點に於て本校の文藝會は最も他と異るものあるなり　即ち筋書きの作者も登場者も一つの理想を現はさんとし、凡て自動的に一つの目的を構成發表したるものなり。

(ヘ)演劇、ドラマに於ては、其の技術の指導を先輩に須つべしと雖も、我が文藝會のものは、全然生徒の發明なり、獨立なり。

(ト)本校の文藝は獨り登場者のみが文藝を演ずるにあらずして、全校生徒、一齊に文藝を演ずるなり。即ち幕蔭に働く衣裝掛も、道具掛も、其の他料理掛も、接待も、皆、一つの理想の

爲に喜んで犧牲の働きを敢へて營むを以て、往々他に見るが如く、不健全なる感情の校風を傷くる事なく、却つて其の精神は文藝に高尚なる一種の力を與へて、其の弊風を救ふの効、尠からざるべきなり。

(チ)本文藝會場は神聖に保つべき事。

(リ)終りに其の消極的目的を完ふせんが爲に一言せんとす。もし文藝より起る弊風を恐れて、全然之を禁壓すべきか、其の反動は益々弊風を劇しからしむべし。卽ち人生には娯樂必要なり。娯樂を欲する事は人の本性にして、決して抑制する事能はざるものなり。此に於てか積極的文藝を起して、文藝の弊風を救ふと共に、人生の一大要求に應ずべきにあらずや。

本校の文藝は如何なる目的を有せるか

之卽ち文藝の積極的目的とも稱すべし。文藝は倫理教育の爲、換言すれば教育の目的を完全に達する爲に缺くべからざる要素なり。

生徒等が日々の學業は、確信を得る爲、主義をつくる爲、理想を構成する爲にして、之等は畢竟實現して、以て己の人格を養ふに外ならず。我等は科學によりて知識の關係を調べ、哲學により之を統一して理想をつくり、實現するに至り、知行の二者を以て人生の目的を貫徹し得べきが如く考へらるゝも、實際にありては之等二者の中間にありて、其の働きを完からしむるものは、實に文藝の力なり。

然らば文藝も亦實利の爲に行ふべきかとの疑ひもあるべしと雖も、こは此處に論ずる限りにあらず。世人往々文藝等に力を費すは、有益なる時間と勞力とを無にする如く考ふるは、また人生の一大要素を疎かにしたるものなりといふべし。

文藝の紀元はもと遊戯にあり。女兒が餘念も無く飯事して遊び、男兒が嬉々として戰事をまねるは、みな一種の文藝なり。のみならず、狗兒が互に戯れ合ひ、小鳥の枝にさへづるも、亦文藝にして、生物は凡て文藝を營む本能ありといふべし。元來本能は何が爲に人生に必要なるかは哲學上の問題に讓るべしと雖も、獨逸の文豪シルレルが「遊戯は生物の勢力過剩より發する活動なり」と云へるが如く、活力盛んなる兒童と青年とは、遊戯の本能最も强きはもとよりにして、之兒童及び青年時代に於てのみならず、人は生涯を通じてその本能を失はざるものなり。

彼の有名なる兒童教育者フレーベルは「遊戯は人生の雛形なり、兒童の遊戯は凡て後來生活の萠芽なり」との信念に基きて、其の教育法を編成せり。宣なる哉女兒が遊戯に飯事を行ふ

は、やがて成長の後一家の主婦となつて、庖厨を司る自然の準備となり、男兒が戰事して戲れるは、實に將來世界の競爭場裡に立つて、奪闘するの準備とはなるなり。獨り兒童の遊戲が將來實社會に活動するの準備をなすのみならず、人の知識をやがて實行に導くものは、遊戲の力なり、文藝の力なり。卽ち人の思想、感情より發したるものが夢想となり先づ幾度か遊戲となりて其の準備を整へ、而して後に實行にあらはるゝなり。例へば發明家が一物を完成するに至る迄には、幾度か其の理想を夢想しては之を繪に描がき、玩具に作る等、所謂遊戲して以て、其の關聯を工夫し、終に天晴實物を作り出すをうるなり。またかの日露戰爭の勝利は何に歸因すべきか。また一種の文藝の力に須つべきなり。卽ち我が陸海軍は實戰をなすに先だちて陸に海に演習卽ち想像の戰を行ひ、互に敵味方となり、攻めつ、攻められつ、追ひつ、追はれつして、膽を練り、手腕を鍛へ此處に其の準備を完ふして、整々堂々實戰を迎ふるに至れるなり、本校の文藝もこれ等と同じく彼生徒等の理想を先づ遊戲に現はしたるなり。其の筋書に見ゆるが如く、文藝の材は多く彼等學生の最も興味をもてる櫻楓會（日本女子大學卒業生の組織せるもの）にとり、其の五十年間又は百年間の計畫を模倣して遊べるなり。されば觀覽者には或は其の感興をひく事少かりしならんも、彼等の爲には多大の娯樂なり。而して之一方に於ては、眞に櫻楓會の理想を發揮する爲に、缺くべからざる準備をなすものなりと云ふべし。

なほ文藝が知行の間にありて、人生の一大要素をなす爲に必要なるのみならず、凡て人の思想感情より發したる夢想を表出する事は、娯樂となると共に、心身の休養を計り其の健康を增進せしむる爲に、或は其の精力を養ふ爲に必要缺くべからざるなり。而してこの文藝あるが爲に、人生に趣味あり、調和の美ありて、以て人々は其の目的に向つて邁進するを得る熱烈なる生命を喚起せしむるに至るべきことは何人も經驗する所なるべし。

然れどももと之娯樂なり。本校に於ては、從來只學業の餘暇に行はしむるに止まれり。否、單に必然となるべき娯樂を一定の主義のもとに導きたる結果、今日に及びたるに外ならざるなり。

最後に本文藝會が教育上如何なる結果を及ぼすに至れるかに就いて述べんと欲す。

我が文藝會は果して世間の誤解を招き、害毒を流すに至りしか。否、寧ろ其の結果反對にして各方

面の人々より多大の賛成の意を表せられたる事は、何人も爭ふべからざる事實なり。而して其の技術の未熟なるにも拘らず「一種の感動にうたれたり」との詞をさへ致せるものも尠からざりしは、畢竟其の精神の溢れたるものとも見るべきなり。

右は單に外にあらはれたる結果なり。然れども内にうけたる感化力は、更に多大の効果を認むるものにして、一言以て之を云へば、所謂、教育の目的を達したるなり。先づ小にしては禮儀を學び、言葉遣ひを正し、衣服裝飾を端正ならしめ、文筆を修練せしめたる事等、數ふるに遑あらずと雖も、今更の如く文藝の必要を感じたる事は、卽ち、

(一)著しく創作力の發達したる事なり。

筋書も自ら研究して成り、其の技術も自ら工夫したるものにして、學業の餘暇しかも僅かの日子を以て兎にも角にも之を公にするの自信を有せるものを作成するを得たるは、平生の課業に於て學んで得べからざる所なるべし。我が國民も亦教育の方法によりては、決して歐米人にも劣らぬ發明力を養ふに至るべし。此に於てか、大いに意を強うさるゝものありき。

(二)自由(我が儘にあらず)の如何に教育にとりて、大切なるものなるかを認むるに足る。もし萬一この文藝會に教師より束縛を加へ、或は能動的に活動せしむるに於ては、生徒等は或は思想に制限を加へられ、或は依賴心を生じて、創作力はかく迄發達せざりしならん。

(三)自修は文藝會によりて著しく發達せり。如何なる匿れたる仕事にも、困難なる役割にも、甘んじて服し、擧校一致、たゞこの遊戯を遺憾なく行はしめんとの一心あるのみ。疎きものも親しみ、眠れるものも醒め、嫉む者もなく、呟く者もなく、喜び勇みて遊戯する不知不識の中に、生徒等の品性は次第に鍛錬せられたる事は明らかなる所なるべし。

之を要するに文藝は文藝それ自身に弊害あるものにはあらずして、其の方法宜しきを得るに於ては必要缺くべからざる人生の一大要素となり、教育上多大の効果を及ぼすべきものなるべしと信ず。而して本校は其の確信の下に從來試み來りし文藝を、此處に公にするに及び、計らざる光榮に遇ふの喜びと共に、文藝の結果に就いても、また幾分の參考を得るに至ることを信ずるなり。

(「家庭週報」第八十四號)明治三十九年十二月

兒童教化の原動力

去十一月三日文部大臣は、再び小學校教員數十名を選奬して

其効績を表彰せられました。此等の諸氏が多年小學校の教育に從事し勵精其職に盡され、或は德望感化の點に於て、或は管理教授の點に於て、全國多數の教員に傑出せる効績を擧げられたることは、國民教育の爲めに祝すべきことであります。

小學校教員が薄給に安んじ、名利を犧牲にして子弟教養の任に當らるゝのを見て、余は深き同情と尊敬を表するものである。然るに小學校教員の位地が往々世人に輕視せらるゝ弊あるを見、教員自身も亦其職務を價値なきものゝ樣に考へ、動もすれば他の方面に轉せんとしつゝあるのを見て、余は每に慨嘆にたへぬのである。しかし教育家の本領よりして考ふるときは、世の毀譽褒貶には毫も心を動かすことある可らずで、併も自らの職務は國家前途の興亡にかゝわる重大なるものであることを考ふれば、身を献げて働くの價値あることを……（二行分不明）……服務年限の義務に餘義なくせられて其日を其日をと被傭根性でやつていくと云ふ樣なことでは情けない話である。そも〳〵小學校の教育は所謂第二の國民を作るのであるから、單に各學科を教授細目に依つて教へてゆくと云ふに止つては役に立たぬ。始終活ける社會と家庭との連絡を圖つて時勢に後るゝことのないように力めねばならぬ。眼を國家の前途に注いで、社會の趨勢を心の中に置いて教化せねばならぬ。かくするには或は其町村の德望ある人や、或は商工業に從事せる人や、農業をやつとる人や、或は政治家でも文學者でも社會各方面のリーダーたるべき人々を時々學校へ招きて、其實驗に基ける說話を聞かせ、または父母を會して家庭との統一を圖り、學校家庭社會の精神が常に融和流通して兒童教化の原動力となつてゆくやうにせねばならぬ。教育家の側より云へば、學校を中心として社會をも家庭をも教化啓發して、共に〳〵進んで行くやうにやらねばならぬ。此の如く理想を有つて働くならば、心中常に愉快にして熱心も自ら生じ、工夫も自から生じて來る。從つてこゝに偉大なる感化力を生じて、一鄕一村を導く源泉となつてくる。一と度此境に達すれば、小學校教員の職分は最早自ら侮り自ら卑しむには及ばない。其人の尊敬は求めずして來るやうになる。位地も求めずして高まつて來るのである。簡單に御話して甚だ抽象的になりましたが、願くば全國の小學校教員諸氏に此抱負を有つて貰らいたいのである。

（「日本教育」第貳拾號）明治四十年一月

新年の希望

余は所用あつて、今年の正月は旅中に之を迎へたのである

が、元日は恰度鎌倉に居つた。而して近年にない喜ばしい現象を見て、心私かに滿足したのである。それは卽ち避寒地等の新年は、極めて遊興の盛んなるを常とするにも拘らず、今年は市中に泥醉の人を見ず、又絃歌の聲を耳にすることもなく、極めて靜肅の中に、而も活氣あるを見受けたのである。これ實に日露戰爭によつて、國民の氣を引きしめた結果の、今に良習慣を殘して居るものあるを知ることが出來る。二日には歸京したのであるが、我が寮舍に殘つて居る寮生の模樣を知るに及び、更にまた滿足を與へられた。卽ちこの二週間の冬期休暇を徒費するものなく、年末に於ては一年の結着を附くるがために、年始に於ては一年の計畫を立つるがために、何れも極めて靜肅の中に、力の限り務めつゝあることを知つたのである。而してこれら國民の用意の結果、如何なる動機を得て今年の發展を試みようとするか、之何人も知らんと欲する所であらう。

力のあらん限りを出し、知識の出でん限りを盡しても、猶滿足の結果を見る事が稀であるとは多くの人の云はるゝ言葉である。然るに、もしこの常套の語を破つて、何人も一旦計畫を立つれば、必ず何物か滿足するに足る結果を見なければ止まないといふ習慣を養はんとするには、如何にすればよいか。これ人々が一年中の計畫を立つると共に、熟慮すべきものなる事を、新年に於て特に希望しようと思ふのである。

一體物の構成發表といふ事は、實際に於ては非常に困難なものであつて、もしこれを困難でないとなす者あらば、其の人は未だ構成發表を試みた事なき人といつて宜しい。然しながら世には時々非凡なる天才といふものが現れる。かかる天才は如何にも容易に事をなし遂ぐるが如く見える。例へばかのカントの如きは、僅な時日の間に、よく後世幾億の人をして仰がしむるに足る大部の著書を成した。之を一頁、二頁を、數日書き澁る者の目から見る時は、人の天賦の才能にはかくばかりの相違があるものかと疑はしむるのである。勿論世には天才があり、この天才は教育によつて附與することの出來ないものであることも、また事實である。然し人は各々皆一種の天才を有するものであつて、其の種類こそ異なれ、又大小の差こそあれ、何人も必ず何物か一つの潛伏力を有するものである。而して一旦其の力の發揮するや、恰度暗憺たる室內に瓦斯の光の輝くが如く、或は土中深く埋もれたる種子の、春に遇うて萠芽を發するが如く、一瀉千里の勢を以て人格を作り、學識を修め、事業を經營することが出來て、必ず其の希望する彼岸に到着し、完全なる結果を見るに至ることが出來るものである。

この非常なる力は何處に求めることが出來るか、自然に待つ

べきものか、他人によるべきものか、皆非である。たゞ我が心の奥に求むべきものであつて、其の原動力となるべきものは、實に Concentration（適當なる譯語はないけれども、暫く精力集注と云つて置かう）による。この Concentration 卽ち精力集注は一つの技術であつて、只言葉を以て理解するとも、實際自分の經驗によらなければ、我が有となす事が出來ないものである。私は幼時常に「若し父親の學識を其の儘讓り受くることが出來たならば幸福であらう。」と考へて居つたが、固より之は到底望んで出來ない事である。然るにそれにも拘らず、今日の學生は、一般教師、先輩の學識を、手を拱いて讓り受けんことを望んで居るから、眞の知識を得ることが出來ないのである。眞に學識を得ようとならば、何故それを我が有とするの法を講じないのであるか。それ精力集注を實驗するに於て、始めて驚くべき力を發し、凡ての知識を同化して、己の人格學識を作ることの出來るものなる事は、恰もレンズによつて、散漫せる微弱なる光線を集注して焦點を作り、其の焦點から發する火に薪炭を加へて、如何なる烈火をも發することが出來るのと同一である。我々が精力集注を試みんとならば、先づ凡ての障害物を破壞し、凡ての關係を統一して、心に焦點を作ることを努めなければならぬ。この努力は、意志、卽ち知識と感情との一つに結合したものによつて得られるのである。斯くの如く意志によつて精力集注をする時は、各々人の特性は發揮されて此處に卽ち天才が表れる。換言すれば、天才とは、かの西哲の言の如く、努力の力强きものを云ふのである。

然るにこの精力集注は、現時の我が國民に於て最も短とする所である。我々は如何にしてこの力を養ふことが出來るか。

第一、內に其の源を求むべきことである——其の源といふは卽ち心に起る Interest である。Interest も亦適當の譯語がないが、利益とか興味とかいふので、畢竟必要である、要求である。この要求は實に人に非常なるインテレストを起さしめて精力集注をなさしめるものである。例へば彼の日露戰爭の際の、我が國民の一致協力は、畢竟國民が敵を亡ぼして以て、我が國家我が主義を生存せしめようとする、生存の興味に起因するものである。

第二、四圍の境遇——外部の刺戟によつて暗示を得ることである。恰も平穩なる海上に一波高くあがれるが如く、時に吾等の胸中に高い波動の起る事は、精力集注の爲に大切な事である。これ境遇に順應せんとする興味というてもよいのである。

第三、內に發するものと、外に起るものとの關係をつくる我等の意志——精力集注を欲するものは、以上の三要素に留意すべ

きである。我が理想、我が主義、我が意志のコンセンツレートする時は、前述の三要素が關係よろしきを得た時である。

さて我等は明治四十年を迎へて、如何なる事に精力を集中すべきか。

一、知識、品性を養はんがため——即ち己の身體の爲に、己の腦力の爲に、己の心靈の爲に、之を健全又完全にしようとして精力集注をせねばならぬ。之内に起れる必要であり、興味である。

二、物質的境遇と精神的境遇——即ち萬有と、精神との關係である。例へば今年は日蝕も、月蝕もあらう、天文學に興味をもつ者はこの自然の時期を利用して、學習すべき事を忘れてはならぬ。其の他凡ての社會の出來事によつて何物かを印象すると同時に何物かを發表しなければならぬ。

三、其の目的を達せしむる意志——の修養を怠つてはならぬ。而して自分の修養と外部に向つての活動とが一致して、眞の人格、學識は養はれ、家庭、國家、社會、人類に對する本務は集注すべく、更にかゝる人々の一家、一國は集注して、そこに偉大なる國力の發展はあらはれ、以て社會人類に貢献することが出來るのである。

過ぐる明治廿七八年に於て、我が國家は日清戰爭に國力を集注した。明治卅七八年は、世界的戰爭に集注した。而して今四十年に於ては、如何なることに集注しようとするのであるか。其の集中點を見出すことが出來なければ、各自の方針を定めることが出來ない。方針なき活動は、片々たるもので無効である。

四十にして惑はずといふことがある。國家も四十年間の經驗を積んで、漸くこの發展を見るに至つた。然しながら更に異なる行路に、困難は横はつて居る。而してこの難關を越え得るや、否やは、全く國家の存亡に關するものである。この難關といふは、即ち商工業の戰爭、經濟的戰鬪のことである。是我が日本に於ける明治四十年の四圍の境遇とも見るべきものであつて、この境遇は實に我々の戰後の方針につき、教育の方針に就いて大問題を描くものゝ心には、非常なる刺戟を與へ、玆に内部のものと、外部のものとは一致して、集注點を考へしめたのである。

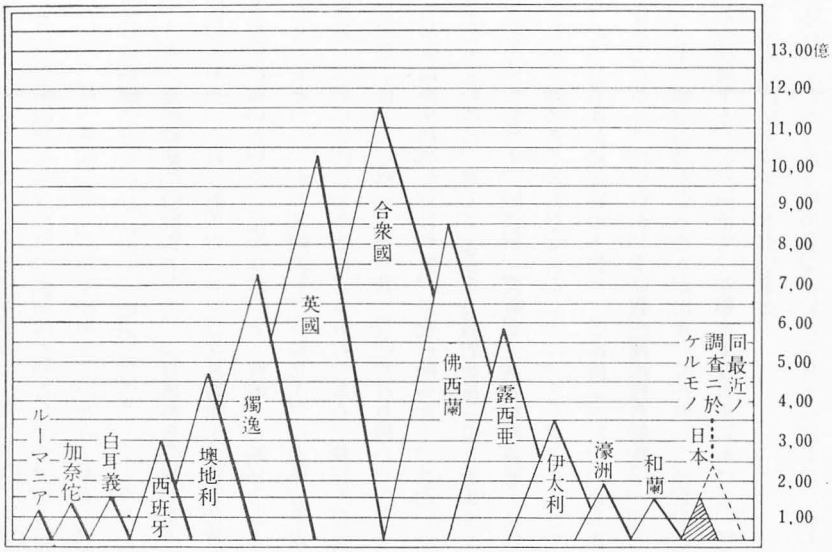
經濟と云へば、精神上に於けるものゝやうに大切なる事でないと考へるものもあらうけれど、經濟は國家の身體なのであるから、國家は其の健全を俟つて、始めて健全なる精神を養ふことが出來るのである。「武士は食はねど高楊子」といふ我が古來の思想の遺傳は、金錢を重んずるの念に乏しいけれども、今

後わが國力の發展を致さうとするの武器は、實に國家の經濟である。往年國防費を募つた時の金圓は大砲となつて、かの日露戰爭に於ては、難攻不落の旅順を陷落せしめたのである。又今年二日の新聞によつて見れば、米國の富豪ロツクフエラー氏は、シカゴ大學に新年の贈物として、三百萬弗を寄附したといふ快報がある。これで同氏のシカゴ大學に寄附した總額は實に二千萬弗に近いといふ。是等は教育と、經濟との關係を語るに足るものであつて、かの米國に於ける私立大學の大勢力を致した原因も、其の經濟の力多きによるものである。教育も亦經濟の力の伴ふにあらざれば、到底其の發達を計り難いのである。例へば教師が生活難に追はれて、研究の時もなく、書物を買ふの餘裕もない時は、果して完全なる教育を施すことが出來やうか、又學校に於ても、圖書館、實驗室、其の他諸設備の完備を見ずして、効果ある教育を施さんことは、望み得べきことであらうか。見よ我が教育界の不振は、我が國家の富力の乏しきによることが多いではないか。幸ひ我が國は經濟的戰爭の初陣に於て、先づ輸出超過を見ることが出來、其の他にも亦世界的商工業の勃興することが出來て、昨年末より本年にかけて、經濟界は空前の活動を現すことが出來た。

既に云ふたやうに今後の戰爭に於ける日本の武器は、卽ち富であつて、田地、鑛山等、富力を生み出す所にある。而してそれを使用する軍人は國民である。國民が經濟を運用するの力によつて、其の精鋭と、否とは、判別せられるのである。然らば日本の今後の武器とも見るべき富力、及び軍人とも見るべき、この富力を應用する國民を以て、世界列强に比較すれば何うであるか。

玆に富力の比較表を挿入したが、我が富力は最近の統計によれば、凡そ百八十億であつてこの表を調製したる當時、卽ち今より十年前は、凡そ百億で、之を米國の富力に比すれば、實に其の十三分の一に相當して居るではないか。而して現今の富力なる百八十億といふのは、凡て國民の不動產を加へたものである。然るに日露戰爭によつて、負はなければならぬやうになつた負債は金圓を以て算して實に廿億である。其の上今年の議會に提出せらるべき豫算を見るに歲入は四億であつて、歲出は實に六億の多きを示して居る。世界列國の富力に抵抗するに、この微弱な富力を以て而もこの多額の負債を荷ひ、多事多端なる戰後の我が國に處するに、國民は果して如何なる覺悟を必要とすべきであるか。節儉も勿論必要であるけれども、其の樣な消極的態度のみでは得不可能である。國民はよく社會に於ける現象を看破して、國家社會と、自己との關係よろしきを得るこ

列國富力比較表　（一千八百九十八年の調査）



と、卽ち精力集注といふことが大切である。夫故に國民一般をして、よく商工業の戰に耐ゆることの出來る人に教育しなければならぬ。今後日本は商工業的知識品性を備へた國民によつて、よく其の强敵に向つて勝を制し、國力の發展をなすことが出來るのである。然るに從來の教育は、却つてこれら戰士の勇を挫くとも、力づくる事をなし得なかつたのである。彼の試驗制度を見よ、嚴しからしめた結果、每年數萬の青年は、失意の極、多くは厭世、悲觀に陷り、墮落、放蕩の淵に沈むのである。國家が國民の意氣銷沈を慨嘆するが如きは、寧ろ源の獨りを淸めざるの迂を難じなければならぬ。今に於て其の弊風を改めなければ、五十年或は百年の後をも待たずして世界の競爭場裡に、到底起つ事が出來ぬやうな敗北を招くことは明らかである。一年の計は元旦にあり。戰の勝利は先づ初陣に於て之を卜することが出來る。明治四十年!!　これ經濟的戰爭の難關に向ふの初陣である。人々は先づ自己と、社會の現象との關係をつけ、次に國民と國民との一致協力を計り、日露戰爭當時にも勝る國力の集注をなすべきである。

（「家庭週報」第八十八號）明治四十年一月

從順の意義

多事多端なる戰後第二の新年は、未だ羊の如く悠長なるべからずして、時を惜しみ、力を磨きて、各自其の本分に向つて奮鬪せざるべからず。然れども羊に一つの習ふべき美德を有す。之卽ち從順なり。世人の從順と稱ふるものは、往々卑屈に屬すべきもの多きを見ては、此處に無告の羊の爲に辯護せんと欲するのみならず、從順を美德に數ふる人類の爲に特に注意せざるべからざるなり。

從順とは如何なるものなるか、之に答へて、幼にしては父母に從ひ、嫁しては夫に從ひ、老いては子に從ふが如く、凡て己の一身をあげて他人に服する事なりと云はん。然り、從順は己の本務に服する事にして、親に對して爲さねばならぬ事に服し、夫に對して爲すべき本務をなし子に對して盡すべき義務に服從し、或は君主、國家の命令を遵奉するが如く、孝、貞、愛、忠等、自他の關係の理想的なるものを含む言葉なり。之等の關係は靜止せるものにあらずして常に働けり。その働きをさして所謂 Serve（奉仕）と云ふ。奉仕せんが爲には己の生命をも喜びて犧牲に供するなるべし。然らば君主國家に奉仕し、わが親に奉仕し、他人に奉仕するとは如何なる事なるか、之卽ち人の安寧幸福を祈り、人の要求に應じ、人の希望を叶ふる事にあり。例へば古言にも「身體八膚之を父母に受く、敢へて毀傷せざるは孝の始めなり」とあるが如く、父母は先づ子女の身體の健康なれかしと要求し、希望するが故に、其の要求其の希望を滿たすは子としての本務なり、卽ち孝なり。余嘗て米國に於て寒村に住まへる一老嫗に遇へり。この老嫗は八十を越え、立派に世に立てる子女を多くもてるも、なほ之等にたよらずして、末女と共に此處に住めるなりき。余はこの老嫗に向ひ、「世の中に何が一番嬉しきか」と問へる時「子女が各々立派に出世して、國家の爲に盡せる事より樂しき事はなし」と。然らばこの老嫗は子女に對して、身を立て、道を行へよと希望するものにして、之に服從し能ふの子は從順なり。多くの親はかゝる高尙なるものにあらずとも、子女に對し何物をか要求する所あらん。而してこの要求に應ずる事能はざるは、畢竟其の力の足らざるによる。卽ち不從順は實力の不足より來るものにして、從順はよく適合するの力を有し、自他の關係を理想的に結合するの力ある者の能ふ所なり。此に於て、我等は四圍の境遇をして自らに適應せしむるのみならず、自らも亦外界のものに向つて順應せざるべからず。

この從順の德を養ふには、先づ第一に意志の力によりて、己を統御する事大切なり。卽ち我の中にある意志に、身體の凡ての組織を從はしむるにあり。換言すれば己が手、足、神經、肺、胃、心臟、神經に伴うて起る感情等を、凡て意志に從はしむるものなり。意志とは己が全體の統一したるものにして、畢竟、親の意志と子の意志とが合體し、或は夫婦、兄弟、姉妹、人類の意志が一つとなりて出來たるこの意志に、己が身體の從ふに至りて、始めて從順となるを得べきなり。例へば學生が文藝會、運動會等に於て、文藝、運動をよくするに至れるは身體が意志の力に從ふをうるを以て、云ふべき事を云ひ、爲すべき事をなしうるなり。これ全く教育の効果によりて從順の德を養成する事を得たるなり。斯くの如く從順は奴隷根性と全く異なるものにして、從順は意志を以て同意して從ふと雖も、奴隷根性は實力なきを以て、餘儀なく從ふに至るを云ふ。

第二に從順は無智にては能はず。我が國婦人は往々從順といふ意味を、奴隷が主人に從ふ如く、又は君主專制の下にある民が君に從ふ事の如く考へて、己もまた奴隷の如く、專制政府の國民の如く盲從すと雖も、一方より見ればこは決して從順ならざるなり。

如何にして從順ならざるか、無智なるが爲なり。親となり、主人となり、夫となり、先生となりて、我が愛する者が己が理想を解せず、希望に同情せず、また智力足らざるが爲判斷を誤るが如く、恰も己が感情融和せず、意志疏通せざる時は、云ひ知れぬ不愉快を感じ其の關係を敗るの基となるものなり。この頑固或は、我が儘なる性質は學問の爲に增長せしめられたるにあらずして、未だ學問足らぬ爲、卽ち知識の少きが爲に適應し能はざるなり。

第三に從順の德は力によりて養はるゝなり。女子をして獨立自營せしむるの力を與ふるは女德を缺くものなりとの說あれども、之極めて皮相の觀なり。今日女子の不從順なりとの說は、女子に力なく、從つて獨立心乏しく、依賴心のみ獨り增長せるによる。卽ち何もかも夫に向つて要求するのみにして、自ら夫に奉仕する實力、品性なきを以てなり。女子にして萬一の場合には起つて自ら支ふるの實力と品性あるに於ては、却つて夫、親の希望を充たし、國家、人類の要求に應じうる從順のものとなる事をうべきなり。

要するに從順は第一に意志により、第二に知識により、第三に力によりて養はるべきものにして、最も大なる人は、最も從順なる事を得べきものとす。

（「家庭週報」第八十七號）明治四十年一月

日本女子大學校
第二期擴張發表式上に於て

今日は本校の、第二期の計畫を報告致しまする爲に、本校の評議員の御出席を願うて、これより開會を致します。此の會は、我が國の女子教育の凱旋祝賀會と云ふ如きものであらうか。或は開戰の報告會と云ふ如きものであらうか。無論これは第二の種類に屬するものであらうと思ふ。故に其の報告の中には、隨分苦戰をして、負傷者を出したとか、又は戰死者を出したとか云ふ如きこともあるべきであらうかと思ふ。恰も此の第二期の計畫を成就して、こゝに其の報告會を開くに際し、我が國の婦人の先導をなして、遂に戰場に倒れられた奥村五百子氏の訃音に接したのである。故に我々は今日喜ばしき祝賀會とも云ふべき此の席に於て、始めに一言奥村女史に關して、弔詞を述ぶべきかと感ずるのであります。此の中に記憶して居らるゝ方もありませうが、奥村さんは、廣岡淺子さんと度々此の學校に御出でになつて、恰も自分の子を思ふが如く、自分の娘を誡むるが如く、熱誠を以て、あなた方を誡められた事がある。殊に我々が、最後に御面會をした時は、理化室に於て、第三回卒業生に向つて、廣岡氏と共に、非常なる熱烈なる語を以て、言々涙を揮つて、あなた方が起たねばならぬ、我々の志を繼いでくれなければならぬと、懇々二時間程御話になつた事があります。實に此の奥村女史は、我が國の婦人を醒まさんとして、聲のかるゝ迄、叫びつゝ全國を廻り、遂に吐血に及ばれたが、それにも撓まず命を賭して奮闘されたのである。最後に止むなく病床に臥しても、なほ國を憂ひて止まず、其の神經を燒き盡すに至る迄、我が國の爲、我が國婦人を醒まさん爲に絶叫して倒れて後止まれたのである。其の終りに臨んで昨年の卒業生に如何なる事を殘されたか。「私は學問がない、知識が乏しい、爲に意の如く我が國の爲に盡す事が出來ないと、大いに自分の力の足らぬ事を考へる。あなた方教育ある處の婦人に、起つて自分の志を繼いでもらはねばならぬ」と、懇々云はれた。同じ事を廣岡氏も云はれた。而して奥村氏自身も云はれ、又廣岡氏も注意せられた如く、氏は婦人として、我が國の形式の道德の標準に照したならば、多くの缺點を有せられたのであらう。卽ち「私を眞似てはならぬ」と自ら云はれたのである。併し今日の道德思想は、かくの如く形式なる表面の事柄を以て、其の人の德を定むるものではない。其の生きて居る我々の精神の態度を以て、其の人の人格を見なければならぬ。女史は眞に國家を

思ひ、國の爲に捧げた人、熱誠の爲に名譽も、家庭も思ふ暇がなかつた。實に我が國の爲、人道の爲に身を捧げて盡すと云ふ、熱誠を以て滿たされた。此の精神、此の心の態度が、奥村女史の人格であり、品性である。我々は其の心の態度を實に尊敬するのであります。其の精神をとるべきであります。

何故に奥村氏はあなた方教育ある婦人に向つて、我が子を誡める如く、强い言葉を以て諸子に刺戟を與へ、又頭を下げて、これより起つて下さい、若しも婦人が起たなければ我が國は滅ぶのであると、生涯叫んで倒れられたのであるか。奥村氏は自分に熱心はあり、精神はあるが、學問がない、今日社會に働く知識がない、卽ち知力がない事を思はれた。これは御尤もである。今日我が國の急務たる事を充分に見、前途を憂ひて起たれたが、なほどうしても自分の力の足らぬ事を自覺され、どうかして自分の志を繼いで起たん事を望まれたのである。廣岡氏も繰返し叫ばれた。殆ど狂氣する如くに、子供を折檻する如くに、常識では判斷の出來ない程、此の講堂にて刺戟を與へられた事が度々ある。廣岡氏も力の及ばない事を認め、自分の志を繼いで起たん人を熱望されたのであります。今日はかゝる精神が必要である。只多く注入した知識形式の道德は役に起たない。其の生きたる魂、燃ゆるが如き熱心が必要である。あなた方にかくの如き熱心があるか。至誠があるか。無論、程度に於て差はあるが、私は本校の學生は其の熱心と、至誠とは備へて居るけれども、兩氏が希望された學問、知識はどうであらうか、兩氏の熱望さるゝ如き實力ある婦人であるかどうであるかと云ふ事は、今日奥村氏を弔ふに當り思ひ起さゞるべからざる事である。私の見る處によれば諸子は女史の樣なる熱心、至誠はあり、抱負と、理想はあるが、これを實現する實力、これを實現するに必要なる知識に至つては未だこれを充實するに至らぬ。國家の急務は高聲を以て招くけれども、これに應ずる實力がない。我々の教育は不充分であると云ふ感があると私は察するのである。今日は本校第六年目に入り、卽ち第二期の計畫を企てゝ之を成就して、今日それを報告するの榮を擔うたのでありますが、今日の計畫は我が國の必要に應ずるものなるか、我が國教育の急務に赴くの積極的計畫なるか。又此の學校の大いなる責任使命を全ふするに必要なる第二の設計を立てられたのであらうか。

卽ち第二女子大學を此の五ケ年の間に設立し、又當初よりの企畫たる理化部、音樂部、美術部、醫學部、商業部と云ふ如き者を此處に設立して目的に叶ふ處の擴大をなすの計畫であると云へば、決して然らず、其の必要がないのではない。國家の

急務である。奥村氏が絶叫せられた我が國の危機、急務を思へば、かゝる積極的の計畫が必要である。國家の急務、世界の大勢より見れば第二の計畫は積極的でなければならない。併しながら今これに手をつける事は出來ない。何故然るかと云ふに、人が出來ないのである。實力が伴はないのである。未だ本校或は櫻楓會に於てすら企圖した事業に手をつけられぬ。熱心と至誠とはあるが、これを行ふ實力がない、手腕に乏しいのである。一言以て云へば、國家が望む人間がまだ此の學校から出ないのである。それで今日の急務は人を作るにあり、品性と、知識、實力を備へた婦人を作るにあり、我が國の要求して居る婦人を作るにあるのであります。我々の最大急務から考へても、世界から受けて居る壓迫から見ても世界の大勢、卽ち歐米の婦人の發達と、我が國婦人の有樣とを比較しても、實にかゝる遲々たる進歩、かくの如き力の弱いことで到底これに追付く事はむつかしいと我々は感ずる。それは獨り女子のみならず、日本の教育がかゝる有樣である一方には歐米の教育は駸々乎として進みつゝある。我が國は其の以上に歩を早めなければ到底これに追付く事は出來ないのにも係らず、一方にどうしても歩を進むる事が出來ない障碍が雲の如く叢がつて居る實に非常なる困難である。今それをこゝに數ふる遑はないのでありますが、我が國の習慣、風俗、言語、古來文學にあらはれた思想等を考へても實に進歩を妨げる樣な障碍物が澤山ある。然るに其の障碍物を身に纏ひ、弱き足を以て先に進まんとするのであるから、其の困難は察すべきであります。恰も外國は汽車で進むのに、我々は駕籠で行く有樣である。教育から云うても不便極まるものを以て、かゝる境遇に打ち勝たうとするのである。

かゝる次第でありますから到底今日此の上に擴張しても、効果を擧ぐる事は出來ないから、出來るだけ障害物を除き、出來るだけ便利に、一層有効なる方法に改め、一日も早く前途に向つて進む處の方法を講じなければならぬ場合であります。

そこで第二の計畫としては、これ迄開始されたる各部の設備を完備し、學科の改善、教育法の改良をなし、益々障害物を除き、最も便利なる方法を採用して、一日も早く進まんとするのであります。

第一　學課(科)の組織改良

學科は我々の生命を養ふ食物であり、精神を作る基礎でありますから、選擇に注意せねばならぬ。材料を用ふる教育の方法も便利なるものを發明して進まねばならぬ。本校は創立の當初より傳説や舊慣に束縛されなかつた。一日經驗して、一日改め

て進むのである。同じ事を繰返さないのである。其の方針をとり、三年許りの經驗を以て、家政部、普通豫科、高等女學校に改良を施した。其の時に同じく國文學部にも此の必要を認めた。之は第一、第二の卒業生に由つて學んだのである。併し尚重要なるものなるに由り、其の時に根本の改良が出來なかつた。殊に學監は歐米の教育視察中なれば、其の材料を齎して歸るを待つて、今日迄延引したのである。而して學監歸朝後凡そ一年になる。未だ充分とは行かぬが、漸くにして研究し、又教授と協議し、評議員に相談して議を纏め、改良案を報告するに至つたのであります。これは我々が進む途の障害物を除き、有効なる方法を以て、あなた方をして、一日も早く立派なる人間に仕立て、實力ある婦人としたいと云ふ熱誠から起つたのであります。（改良案は本稿の終りに掲ぐ）

改良の要點

此の度の文學部に就いて最も主なる幹となる學問は人文學である。美術史、哲學史、歴史、文學史も皆この材料となるのである。畢竟此の文學史を、人文學と云ふ中心に統一せしむるのである。即ち學問をなすには統一點が必要である。人文學は文學の統一點であります。人文學は如何なる學問なるか、一言以て説明すれば、人文學とは英語ではカルチユア・ヒストリー（Culture History）である。これはネーチエア・ヒストリー（Nature History）に對するものである。人間はネーチエア（自然）の一部である。即ち動物的性質、換言すれば物質的の方面がある。故に人間を研究するには、此の方面、即ち人間は如何にして出來たるかを云ふ事に就いて研究する必要がある。然れども人間には動物にないものがある。それはカルチユアである。即ち文化、文明、教育、進歩、發明をなすのである。人間が頭腦で物を考へ出して、境遇を開拓する能力はこれである。これを人文學といふ。即ち此の方面の歴史である。

カルチユアと云ふ字は個人にとりては教育であり、或は修養である。社會にとりてはこれを文明と云ふ。此の個人的なるカルチユアが集りて、社會的文明を作るのである。或は又人文史と人道とを同じ意味に用ふる人もある。即ち此の人道と云ふものは他の動物にない處のものである。此の文化と云ふ事は人間に限るのである。これ即ち人間の人間たる所以である。故に人間學と云ふ言葉もある。かゝる意味が總て含まれて居る處の人間の上に感化力を與へ、人智を進めて行く動力を指してカルチユアと云ふので、それは即ち人文史であります。

人文史の起源

人文史はまだ帝國大學の講座にもない我が國には未だ成立たない學問であるが、西洋には既にあり、又かゝる研究が益々盛んに起りつゝあるのであります。かゝる研究は如何なる所から生れたかといふと、卽ち人類の發達する所以である。人類の頭が進化する所以である。人文史は人間の思想の變遷史である。歐洲の近世思想の大變化の源は、伊太利に起りたる文學復興である。此の思想の震動は獨逸に入りて宗教改革となり、佛蘭西に入りて政治的革命となり、學術界に入りては自然研究、卽ち歸納法に由つて、方法を研究する處の研究心となり、其の研究の結果はコペルニカスの地動說となり、ニュートンの引力說、ダーキンの進化論等の學問生れ、其の影響は思想界のみならず、政治、實業、美術等凡て社會の方面に向つて變動を與へた。而して精神的活動のみならず、實業的活動、卽ち電信、蒸汽船、蒸汽車、電話、電氣機械が出來る樣になり、社會に非常なる變遷を來す源となり、其の科學的研究が其の時代精神を作り、歐洲を動かしたのである。此の時代精神卽ち科學的研究の精神は、獨り萬有動物に止らず、此の精神を以て、其の研究の方法と、熱心とを以て、人間を研究すると云ふ事に移つて來た。卽ち文化をした。人間の文化、人間の文明、人間の思想、人間の精神を研究する處の學問が起つて來た。研究すればする程、人間程宇宙に不思議なものはない。其の思想は高尙で奧深いものである。其の人間の思想が集つて出來て居る時代の精神は更に驚くべきの力を有す。これを研究する事は最も必要にして價値ある所以が解せられ、人文史の研究が行はれて來たのである。

人文史の內容及び研究

人文史は如何なる學問であり、如何なる方法によつて研究するものなるか、又研究の目的物は如何なるものなるかと云ふに、例に乏しきを以て、先年大學部生徒が我が國の女德の變遷を研究する爲に文學、美術、政治、教育、制度各方面及び時代の變遷、時代精神を研究したる其の例を引く爲に過日あなた方にそれを寫させた。其の次ぎに私が印象と、發表との關係を說いた。我々の精神は、此の印象から來るものである。其の精神が融合して時代の精神となり、時代精神が發表されたものが、美術、文學、政治、道德、宗教、風俗である。此の時代の精神と、其の精神のあらはれたものを研究するのが人文史である。歷史は事實を擧げ、事實と事實との連絡を擧げたのである。人

文史は事實を蒐集するのみならず、事實と事實との間の有機關係、卽ち、時代精神を研究する、これが其の目的である。而して研究の方法は、文學、美術、音樂、政治等、及びそれ等の歷史にも依らざるべからず。これによりて大抵其の如何なるものかは想像し得るでありませう。然るにこゝに二つの問題が起りませう。其の一つは、「かゝる學問を今日の女子の高等教育に加ふるは早きに失しはしないか、又果してかゝる研究が今日の學生に出來得べきか」、今一つは「かゝる學問をかくの如き方法に由つて研究するの利害得失如何」と云ふにありませう。それは困難には相違ないが、其の基礎となるべき學問は充分に出來て居る。それのみならず、我が國に於て、世界の大勢たる科學の研究法を以て、人文史を研究せねばならぬ時機に達して居る。又其の研究に着手して居る學者もないではない。必要は既に認められて居る。假令困難であるとするも、今後あなた方が美術、文學、政治、宗教、制度等を研究する時に、此の方法によらなければ研究は決して出來ない。又古文學を研究するより起る弊害を除く事はこれより外にないのである。次ぎに起るべき問題は、最も大切である。卽ちかくの如くにして我が古文學を研究する事が、如何なる點に利益を生ずるかといふにある。

第一に從來我が國の缺點、殊に婦人の缺點たる頭腦の停滯を防ぎ、思想の活動を起し、女性の發展を來し、今後必要なる我が國の婦人を作るに最も適當なる方法であると信じます。今こゝに歐米各國の實例を引く時間がないが、前申した本校第一回卒業生が調べたあれ丈の研究ですら、其の思想を新しくする効力があつたのである。それは第一に我が國の女性の變遷、卽ち女子の魂と云ふものが、今日迄如何なる變遷、發達をしたかを調べ之を分ちて春、夏、秋、冬として、再び春となる五時代に分けた。萬物が四圍の境遇の刺戟によりて樣々の變化を來す樣に、人道も時代により大いなる精神活動を始める。卽ち人間の頭腦の震動が起り著しき區劃を與へた實例が我が國に澤山ある。其の上に我が國に於ては思想上の大變化を來した。始めは印度の佛教と、支那の儒教が輸入されて起つた震動であるが、其の波動が種々形を變じて止まなかつたのは、我が國に思想を受くるのみならず、これを同化して思想界に發展を來す力があつたからである。それが時代の文學、制度、風俗に變化を與へ、又變化が事實に發表された所の實際的活動は、又これを精神的活動の上に影響を與へた、かゝる大なる變遷の時代がある。其の上に文學發達の極點に達した時もある。風俗の亂れた時もある。其の反動として戰國時代、武家時代、封建時代、內亂時代となつた。獨り內亂のみならず、著しき外患を受けて居

る。北條氏の時、その大軍を麾にし、豊臣氏が外國に侵略をした事柄もある。卽ち奈良時代、平安時代、武家時代等、時代に變り目があつて、國民の思想を發動し、感化する如き偉大なる思想上の震動がある。我が國の文學をかゝる點より着眼して研究したならば、古文學を讀む爲に、思想固定し、意氣銷沈するの弊を免れ、力の損耗を補ふ事が出來ると思ふ。これは思想上の事である。婦人が進歩せんとならば思想上に震動がなければならぬ。我が國の有樣は落着いて居て微動より外ない。從順等形式に從ふと云ふ消極的の考より起らない。從順を惡いと云ふのではない。けれども今後の國民の母となる活動を起して來るには、其の前に思想に大震動を起し、頭の中の運動に大なる波を起して來なければならぬ。これがなければ今日婦人の上に起る障碍物に勝つ事は出來ないのである。此の思想的活動を起すには、日本文學を讀みたるのみではいけない。これを批評的態度、哲學的態度を以て研究するならば、充分にあなた方の頭に印象を與ふる事が出來る。これが最も大なる利益である。第二に今後の婦人の頭腦が進歩的でなければならぬ。且つ昔の婦人の行ふた模範を調べ、古書に殘れる知識を蓄ふるのみでは到底今後あなた方の頭を開發して行くには足らぬ。殊に我が國の古文學は思想上より考へて非常なる損害がある。始め帝國大學に古文學を入れたのは、西洋の古文學たる希臘、羅馬の文學を研究すると同じ意味で研究し始めたのであるが、希臘の古文學は雄大なる思想に富み、且つ今日の歐米の文明は此の思想と、基督教の思想との兩者に近世の科學的研究の精神がある。我が國の古文學には此の價値はない。併しこれなくては歴史を知る事が出來ぬ。故に廢する事は出來ない。又其の中に立派な思想も美もある。婦人の立派なる行ひの我々に力を與へるものもある。けれども今日の時代精神を以てこれを讀んで同化し、新しく發表する事がなければ、却つて我々に害を與ふ。故に殊に人文史研究の態度を以て臨まねばならぬ。

今一つ大切なるものは今日我々の命である、信仰である、意志である。卽ち全體意志たる時代精神を養ふには、我々が宇宙の精神に合體し、一つのものとなつて生きたる人間とならねばならぬ。多くの人の頭からあらはれたる文學、制度、美術等の有機的關係に由つて出來て居る命を缺いたならば、到底日本は進まないのみならず、婦人が望む所の發展は出來ぬ。其の新しき精神が日本を動かし社會を動かし、時代を動かすのである。此の精神を一つに集むる事が大切である。文學部は積極的にこれを自分のものとし時代の精神を我が國に動かさねばならないのである。

文學部の三要素

第一、語學の力、卽ち讀書力を養ひて世界の精神に接する事が出來、又得たる印象を發表すること。

第二、思考力を養ひ、世界の大勢に接して感動を受けること。

第三、養うた思考力を言語なり又筆によりて發表する。此の三つの要素、これが課目の改良案である。これは今年四月入學する級より實施するのであります。

第二　設備の補充

以上の如く學生をして、新たなる研究的態度に出でしむるには書物ばかりでは出來ぬ、博物館を作り、古來の美術、衣服、其の他人文學に必要なる標本を置かねばならぬ。而して又西洋文明史によりて、西洋に育ちたる文明と、東洋に育ちたる文明とが日本に於て接觸し、これより世界的潮流を出さしむるの抱負を有するを以て、かく境遇に置かねばならぬ。

又科學の方面にては、愈々實驗の必要がある。故に先づ化學教室を建て、追つて生物學、物理學の教室をも建てなければならぬ。

又境遇を有効にする爲に寮舍を建てるのであります。これは西洋風、折衷風、又在來のものも出來る。

第三　資金寄付

此の改革をするには以上の如く設備を要し、又實驗に必要なる材料を要するのである。卽ち十七萬圓の資金を要するのである。本校に今日迄集つた金額は三十四萬圓であります。併しそれは皆建築や地面となつてゐる。今日再び募集するは甚だ困難である。而して本校の爲に盡力せられたる諸氏には既に三回も依賴したのであります。けれども時勢の必要より考ふれば一日も猶豫は出來ぬので協議會を開いたが、纏まる模樣もなかつた。けれども第二次の會を開いた時に大隈伯、澁澤男、森村市左衞門氏、三井三郎助氏、廣岡淺子氏等臨席せられ、何れも同じ考を以て賛成せられ、「是は國家の爲是非共成就させる必要がある。とても充分の事は出來ないが止むを得ない。我々で二萬圓宛引受けませう」と先づ澁澤男が云はるゝや、森村、三井、廣岡諸氏直ちに承諾せられ、立所に八萬圓は出來たのである。なほ九萬圓を集める爲に森村氏は大阪迄行かれたのであります。そこで大阪で住友吉左衞門氏二萬圓、藤田傳三郎氏二萬五千圓、なほ某氏一萬五千圓、某氏二萬圓、大倉孫兵衞氏一萬圓、かゝる僅な人にて出來たるは未曾有の事である。これは如

何なる事を示したものであらうか。實に諸氏が急務を感じ、學校の爲に盡さるゝ至誠なのであります。此の中を割つて現在基金に加へて十萬圓を本校基金とし、餘の十餘萬圓は化學教室、寮舍其の他器機となるのである。

昔の軍は勇氣を以てしました。然し今日は軍艦大砲等の武器を要する如く、歐米と競爭するには武器たる經濟が伴はねばならぬ。十七萬圓にても餘程儉約したのである。而して本校の經濟は昨年迄は收支償ふたが、今年からは七千圓程不足である。これは盛大になり、實質がよくなればなる程資金を要するのである。そして此の學校の精神は獨立であります。自分の事は自分でするのである。外國の大學はセルフサツポートと云うて居る。それも此の精神である。先年森村氏が米國ハーバード大學に行かれた時、生徒はバザーをした。聞けばそれは學校に煉瓦造りの圖書館を建てる爲なので、其の初めカーネギー氏は生徒が之によりて自ら若干の金を集め得たならば、余もそれと同額を寄附せんと約束せられたとのことであります。これは誠に面白い事である。ただ金を寄附するよりも、その方が生徒自身の爲に宜しいのである、と森村氏は歸朝後櫻楓會に於て話された事があつた。あなた方は今櫻楓會員と共にバザーをせんとしつゝある。これはあなた方の精神を發表する爲に非常に宜しい事である。今日の事もそれと同じである。學校は學生のものである。故に人よりして貰ふのみならず、自ら手を下して何か發表する態度に出づるは、必要の事であります。此に於て今回大學部に限り、授業料を五十錢宛上げる事にしましたが、之は却つて生徒自身が學校を我がものとして愛する念を養ふのでありませう。

大學一部の改稱及び組織變更

過去六年の經驗に照らし、時代の要求に應じて、本年四月を以て、本校國文學部を改めて文學部と稱し、其の組織の內容に一大革新を行はんとす。これを要する理由、及び詳細は、前述の談話に讓り、此處には課程表（次頁表參照）を掲げて聊か其の說明を試みんとす。

從來の國文學部は、國文を專攻する事に重きを置き、殆ど其の爲に七時間乃至八時間を充てたが、今回は國語及び國文と英語の時間とを殆ど平行せしめ、文學として和、漢、洋の大要に通ぜしめ、これを文學史によりて系統を附し、文學と他の學課との統一を計る爲に、人文史を課す。人文史は文學部に於ける中心點たるを以て、比較的多くの時間をこれに割きたり。由來手工科（廣義に於ける）としては、僅かに體操を課するのみな

文學部課程表

學年 ＼ 學科目	倫理	心理及教育	歷史		人文史		國文		國語	漢文	英語	體操	料理	音樂	圖畫	授業時間合計
	必須科目												撰修科目			
授業時間	一	一	二	四			三	二	二	二	五	二				二八
第一學年	實踐倫理	倫理學	心理學	本邦史附東洋史（講義及參考書）	西洋史（講義及參考書研究）		國文學史（講義及參考書研究）	文概概論	修辭學作文及作歌							
授業時間	一	一	二	二	二	三	三		一	二	五	二				二七
第二學年	同上	同上	教育學	同上	同上	本邦人文史附東洋人文史	西洋人文史（講義及參考書研究）		同上							
授業時間	一		二			五	五		四	二	五	二				二七
第三學年	同上		兒童研究			同上	同上		同上							
小計	三	二	六	六	六	八	八	二	一〇	四	一五	六				八二
總計	一二		一二		一六			一六		六	一五	六				八二

りしが、今回は撰科として料理、音樂、圖畫の三科の一を撰擇せしむ。之動々もすれば文學を以て只風流韻事に限るものとし、空想をこれ事とするものゝ如くに思惟するのを弊風を改めて、實際的に生命ある文學の發生を促すの一助たらしめんとするに目的を置けるを以て、構成發表の能力を養成するに最も有効なる手工を加へたるなり。約言すれば今日の革新は文學部をして語學、思想、發表の三要素を完備せしむるの方針に出でたるものなり。而して此の新組織は來る四月、入學する級より實施するものとす。

（「第三資金寄附」まで「家庭週報」第九十一號）明治四十年二月

祝紀元節

紀元節といふ祝日に當りまして、我々は最も深く我が國の紀元を記念して、此の隆盛なる明治の日本の存する所以を考究すべき事であらうと思ふ。

我が日本帝國は如何なる理由によりて、東洋に於ける無類の國となつたであらうか。三千年來の歴史を考へて見ると、我が建國の紀元卽ち神武天皇の頃に、此の東京邊に住んで居つた人民は多分今北海道に追はれたアイヌの種族であつたらうと思

ふ。アイヌもそれから今日迄二千五百餘年の歴史を作つたのである。けれども此の本土の日本人に比べて見ると、どうであらうか、到底同日に論ずべきでないのである。其の外東洋には昔から朝鮮、支那、遠くは暹羅、安南、印度と云ふ樣に、一時は隨分盛んになつた國々もあるけれども、夫等と此の日本とは比べものにならないのである。今日我が日本は、世界の潮流の中に入り、生存競爭場裡にたちて、彼等と知力の戰爭をなし、其の外種々文明の戰爭に於て決して彼等の後に立たないと云ふ覺悟を以て、世界の耳目を驚かす程の新活動を我が國民は開始したのである。東洋の一小島たる我が日本がかくの如き力を有するのは如何なる原因によるものであるか。これは我々が紀元節と云ふ樣な時機に於て、最も深く考へて見るべき問題である。多分先日來我々が考へて居る所の續きから、今日は諸子の頭の中にもかやうな問題が必ず起つて居る事であらうと思ふ。そこで其の原因は果して何であらうか。萬世一系の皇統を戴き奉り、今日迄各國に劣らず進歩發達を遂げた所の其の原因は抑も何であらうか。

私は一昨日我が國の精神、國家の精神と云ふ事に就いて、我々に身體と心とがある如く、國にも、國體があると共に國の魂があると云ふ事を申した。これはわかり切つた話の樣であるが、其の國家の魂といふものゝ中に含んで居る所の深い意味は少しく考へないとわからないのである。

我が國の魂は種々のものから成立つて、それが一つとなつて居るのである。卽ち五千萬民族の頭の中に宿つて居る精神が相集つて、國家をなして居るのである。これを日本魂、又は武士道と云ふのである。これが我が國の精神である。魂である。これが我が國を今日迄保護して來り、又我が國を教育して來た所の原因なのである。此の魂のある所が、東洋の各國と異なる所以卽ち朝鮮、支那其の他の國にない所のものである。東洋のうちでも印度には宗教が起つた。けれどもそれは形となり、骸骨となつて仕舞つた。然るに英國にはアングロサキソン魂、米國にはアメリカ魂といふものがある。歐羅巴には歐羅巴魂が存するのである。今日の歐羅巴魂は何であるかといふと其の一要素はクリスト教である。其のクリスト教魂が少し停滯し始めた時、これに活動を與へたものは、かの文藝復興である。卽ち希臘羅甸の思想が加はり來て、それが發達したものが近世の科學的精神である。今日の歐羅巴魂と云ふものは、クリスト教魂、希臘思想、科學的精神と云ふ樣なものが同化して、今日の歐羅巴の精神を動かして居る、これが卽ち歐羅巴魂である。世界何れの國を見ても生命を有し、精神的に死なゝい國家といふもの

は必ず其の國家に魂があり、精神があるのである。

我が日本が東洋に於て今日の如き發展をなし、非常なる勢を以て活動して來たのは、我が國には建國の當時から一の生きたる魂があつたからである。卽ちこれを日本魂と云ふ。

然らば日本魂と云ふものは果して何なるか。いつ頃から出來たものであらうか。諸子は先日我が國女性の發達を研究する爲に第一回卒業生が調べた結果を參考として御考へになつたが、それを見ても我が日本魂は、我が國に儒教が傳はり、佛教が渡來して始めて出來たものでない事が明らかである。併し其の中には儒教、又は佛教から傳はれる精神もあるけれども、それ丈で出來たものでは決してない。其の源は遠く其の以前、神武天皇卽位の時卽ち天皇が我が日本を統一し給ふた時に既に生れて居る魂なのである。それが太古、中古に於て成長したのである。其の魂があつたればこそ、今日東洋に骸骨となり終つた佛教、儒教が今なほ我が日本に生きて居るのである。これは卽ち我が國の始めに於て、生きて活動して居る日本國民を支配し、統一したる魂が存在して居つたからであると信ずるのである。併しそれが唯、存在したものに相違ないと云ふ事は一の假說である。果して我が日本にかゝる魂が存在して居つたものであるか、否かを、玆に研究しなければならぬ。

第一に我が國の日本魂と云ふものは如何なる精神を云ふか、如何なる理想であるか、如何なる要素を以て出來て居るものなるかを、考へて見なければならぬ。

先づ我が日本魂の特徵は勇氣である。我が國の割腹は西洋に名高い話である。私の子供の時に私の先生が酒に醉うて一言言葉をはづした爲に切腹をして、其の兄が介錯をした。これは隨分粗暴であるけれども、我々の子供の時に其の精神はよくわかつて居つた。これを西洋人に話すと非常に驚くのである。かくの如く命を捨てる事を恐れず、矢折れ、刀盡きたらば敵手に罹らず、自ら切腹すると云ふ勇氣は、慥に日本魂の大切なる要素をなして居る。我が國が日淸戰爭に勝ち、露國の大軍に勝つた、これ皆勇氣である。命を惜しまないと云ふ精神である。併し命を惜しまないと云ふことは野蠻人にもある。暴徒にもある。たゞ死を恐れないといふのでは價値はない。日本魂に大切なる要素となれる勇氣は何であるか。そは犧牲である。愛國心である。親に孝に君に忠に國の爲ならば喜んで犧牲となる。親の爲ならば如何なる苦も喜んで堪へ忍ぶ。正義の爲ならば一歩も退かぬ。如何なる困難も辭さぬと云ふ其の勇氣である。蠻勇ではない。至誠より出づる仁愛心より出づる己を捧ぐる精神である。世界各國人もこれを見て、日本人は義の爲ならば決して

命は惜しまない國民であると云うて居る。又我が國民も盡く自覺して居る精神である。此の文化したる勇氣は今より二千五百六十七年前或は三千年前、既に發生して居つたものであらうか。これは人文史に於て當時の美術文學制度等の材料に就いて研究すべき問題である。そこで其の材料の一たる三種の神器、これは當時のアートである。其の他又口碑に殘り、歴史に傳はつて居る事實に由つて慥に其の頃發生して居つたものであると云ふ事を證明する事が出來るのである。

抑も今日の紀元節と云ふは如何なる祝日であるか。卽ちこれは我が國の凱旋祝である。丁度三年前旅順の戰に大勝利を得た時、國民は擧つて盃をあげ、國旗を輝かして祝ふた。又屢々戰捷祝賀式を催した樣に、神武天皇が西國から群臣を率ひて中州に進ませられ、其の途に土賊を征して全勝を得て凱旋し給ひ、都を大和の橿原に定めて卽位せられた日、卽ち神武天皇の御稜威を輝かす記念日である。天皇が九州に於て大志を立て給ふた、これは卽ち其の時の魂である。其の時の天皇の御精神である。それが遂に全國を平定して遂に日本魂となつたのである。

天皇の御聰明に渡らせられ、御勇壯であつたと云ふ事は、かの殺伐なる爭鬪を事とせる中州の邑長等を或は誅し或は服せしめて海内統一の大業を樹てさせられた事に由つて知られるのである。其の爲に御兄弟のうちに討死をせられたお方もある。非常なる御苦戰をなされた事も歴史に殘つて居る。これは實に天皇の御精神である、それを實行遊ばされた御勇氣である。而して其の御志は唯、領地を擴め他を侵略しようとの利己心ではない。御先祖から代々傳はる大なる御志なのである。

謹みて按ずるに天照大神が天孫に三種の神器を賜ふの時、其の仰せに「此の寶鏡を見る事吾を見る如くせよ。豊葦原中國は吾が子孫の王たるべき地なり住いて治むべし。寶祚の隆んなる事天地と共に無窮なるべし」と、こゝに大いなる御志は現れて居るのである。劔は我が國の勇氣である。鏡は至誠である。光である。玉は德である。卽ち一方に偏せず、人間に大切なる要素を具備した圓滿なるものであつた。爾來二千五百有餘年の間、皇統連綿たるは、實に此の御遺志に基くもので、また我が國はかくあるべきものといふ信仰が嚴として存したのである。

神武天皇はかくの如き御先祖の遺志を續ぎ給ふた御志の中には信仰があらせられた、宗教心もおはしました。卽ち御先祖の爲に命を捨てるといふ孝なる御精神も現れて居る。同時に子孫の爲に生きる、子孫を思ふと云ふ精神もあるのであつた。されば其の御精神は蠻勇ではない。其の勇氣の中には民を撫育し給ふ御仁德も備はつて居たのである。實に修養を積み、文化を受

けた所の殆ど宗教と云ふべきものである。此の故を以て荒びたる土賊も御威風に從ふのみならず、天子と崇め神と拜して、天子に弓を向けるは、神を穢すものと恐れ尊んだのである。而して又御恩德に懷き、敵としたる君を戴き、國土平定の業に從ふたのである。かくのごとく御先祖を思ひ、國を思ふの御德に併せて誠を慕ひ知識を愛するといふ聰明なる御性質もあつた。正義の爲に喜んで犧牲となる、今日より云へば人道と名づくべきものもあらはれて居つた。かくの如く精神が既に此の時代を支配したのである。これが我が國民をして、外患に遇ひても、內亂に遇ひても、饑饉に遇うても、外國の壓迫に遇ひても屈せず奮鬪し境遇を開拓して發達し來つた所以である。此の魂が日本全體を動かして働いて居るのである。これが卽ち東洋の他と異なる所以である。これが今より後世界の競爭に際してひけを取らぬ所以である。日本が進步して行く所以である。

今一つ大切なる原因がある。それは我が國婦人が他の婦人と異なる點である。支那、朝鮮、印度の婦人と全く異なれる所の我が國を作りたてたる大切なる要素は、實に婦人であると云うても過言ではないのである。卽ち日本魂は獨り男子の精神であるのみでなく、慥に婦人の精神に由つて作られたるものである。否昔に遡つて考ふれば日本魂は婦人の精神が生み出したものであるというてもよろしい。其の證據は今申した神武天皇の御聰明にして武勇に渡らせられた其の御志はその御性格は何れから來つたのかといふに、之は最も我が國に於て神と崇める天照大神卽ち天皇の御先祖なる此の女王の御勇氣があり、御思慮が深く、御熱心であつたと云ふ事は、神器を傳へ給ふた時の宣を拜して知られるのである。又神武天皇の時代の婦人の勇氣の誠に著しかつた事は、建國の精神たる日本魂を生み出した者であると云ふ事が出來る。卽ち我が國の婦人は勇壯活潑で、男子に劣らず弓矢を帶して戰場にも臨んだのである。又神功皇后は男子の軍を率ひて三韓を征伐された。かゝる婦人の精神より出でたる詩歌、文章に就いて見ても、實に非常なる勇氣を有して居るものであつた事が明らかに知られるのである。孝謙天皇が女皇として國を治め給ひ軍事にまでも勢力は振はれた事は著しい例である。天皇が軍人に下された勅語に「額に矢はたつとも背にはたてじ」と仰せられてある。我が國民は進むを知つて退くのを知らないのである。當時の父母は兒を教育するに當り、最も勇氣を育て、かゝる語を以て子を諭し、天皇は國民を教育したまふた。當時武人の家たる大伴家の家訓に「海行かばみつく屍、山行かば草むす屍、大君の邊にこそ死なめ、のどには死なじ」という語がある。海に行けば我が屍は海に沈め、山を行

く時には君の御馬前に死なん。決して徒らには死なない。卽ち勇氣とは大君の邊りに死するを希ふのである。これは昔スパルタの婦人が我が子の出陣に當り「此の楯を以て敵を斃せ、然らざればこれに乘つて歸れ」と諭したと同じ事で、獨り勇氣が男子に讓らぬばかりでなく、知識思慮に於ても劣らなかつたのである。此の氣風が漸次形を改め、變化して來たのは卽ち支那から儒教が入り、印度から佛教が傳はつて、其の爲に我々の宗教心に、美術、文學、建築等に變動を與へた。然し之を受けて消化したのである。されば後に王朝時代の婦人は文化され、大いに上品になつて、文學の天才を現した。我が國の國文學も婦人の精神に由つて生れ婦人の頭腦から作り出されて居る。故に文學に努力を振ふたばかりでなく、宮中に於ける婦人の勢力は非常なものであつた。次ぎの戰國時代は勇烈なる母親、貞淑なる妻が現れた。然るに德川時代に至り儒教を以て女大學の如き教が作られ、大いに婦人の中に壓迫を加へ、その爲に從順等の德は現れたが、壓迫に過ぎて皐屈に流れ頭腦が固定して動かない樣になり、そこで我が日本の婦人は沈んで來た。これは恰も冬の時代に譬ふべき時である。而して古來の勇壯なる、有爲なる、樂天的なる勇氣に滿ちた婦人の德は玆に少しく抑へられて居つたが、其の魂は決して死せず、其の間に潛伏力を養ひ、明治の世に至り、世界の文明の光に接觸して再び覺醒し、潛伏力を發せんとする有樣に至つた。而して二千五百年來日本魂を育てたる母親たる、我が先祖が有した其の要素は決して缺損せられず諸子の中に殘つて居るのである。日本には婦人に魂があり、精神があつたから日本といふ國は死ななかつたのである。これは實に大切なる事實である、そこで今日の時代は我が國固有の魂に、支那、印度の思想が一つになつて作つた日本魂と、希臘思想、クリスト教の精神、近世科學の精神が一つになつた西洋の魂とが、此の日本に於て衝突して、日清、日露の戰爭を起し、其の貿易界に思想界に衝突を來したが此の難關を打破して、世界的精神、字内的大勢を作つて進まんとする勢を示して居るのである。一昨日此の講堂に於て西園寺侯は我が日本の前途は今後の婦人にお賴みをするのであると云はれ、又過日、前田正名君は、我が國將來の發展は高等教育を受けた婦人に由るより外はないと語られた。社會も亦日本婦人の實力を認めて來たのである、實に此の責任を負ひて立つ勇氣がなければ、到底諸子の體面を全ふする事は出來ないのである。眞の從順は出來ないのである。眞に日本の爲に盡すは建國の昔にあつた婦人の熱心、思慮がなければならないのである。此の日本魂の存する事を自覺し、これを作つた婦人、更に今後大國民を育つるの責

任を有する婦人は、負けて勝つの勇氣によりて、善を以て惡に、至誠を以て偽に、忍耐を以て怒に、愛を以て敵に勝つの戰をなさねばならないのである。願くば諸子此の勇氣を振つて我が日本の精神を宇内に擴大するの使命を全ふせられん事を、希望して止まないのである。

（「講演集」第一）明治四十年二月

趣味教育の價値

今年の修業證書授與式

今年の修業證書授與式に於て特に記憶すべきことは、本校の創立とともに此の世に生れ、本校に附屬小學校、幼稚園の設置せらるゝとともに入學したる豊明小學校生徒に修業證書を授與し、豊明幼稚園生徒を進級せしむる事なり。過般之等生徒の過去一年間に於ける成績の報告を聞くに當り、最も興多く、喜ばしく感じたることは、彼等の構成發表の力の著しく發達したる事なり。一年間修練したる今日、一度彼等が心裏に描きたる想像は、或は言語となり、文章となり、繪畫となり、細工物となりて遺憾なく現るゝに至れり。之本校が教育の宿弊を慨歎して、之を救はんが爲に構成發表に重きを置ける結果、その特色の顯れたる者として窃に滿足に感ずる所以なり。

扨て本校の齡を算すれば、實に幼稚園生徒と同年にして、將來を百年の遠きにのぞむ本校の計畫に比すれば、漸く幼稚園の課程を成就したるに止まれり。然れども一方より觀察すればこの短日月に於ける進歩發達は非常なるものにして、屢々稱ふる如く、こは天の時、地の利、人の和を得たる結果ならずんばあらず。勿論この間には筆舌に盡し難き磐根措節に遭遇せるものありしと雖も、幸に不撓不屈の精神を以て、今日を迎へ、過去の記憶を愉快に回想するを得るに至れるは、諸子とともに本校の光榮とする所なり。

過去六年

恰も我等の課程に一階段を與ふるこの學年に於て、過去を回想し、以て將來の計畫に及ぶ事は、必要缺くべからざることなるとゝもに、また自然の勢なり。余は今朝この講堂に臨まんとするに當り余の記憶は過去六年の昔に返り、かの舊校舍の一室に席を設けて、最初の入學式を執行せる當時をたどりて、余の足は殆どその方に向はんとせり。而して當時烏合の兵に等しかりし生徒は、今や美はしき關係を保つことを得て、今日の校

風、級風、寮風を作り出せるに至れるも、其の課程は略々三時期の區別を見出すことをうべきなり。昨年の卒業式に於ても述べたる如く、卽ち第一時期は感情的時代にして、大學部第一回の卒業生を出す頃なりき。開校當時烏合の兵は漸く感情的融和を得て、花の如く美はしく、火の如く熱したる友愛の情を保つに至り、卒業生の組織になれる櫻楓會は、實に此の時に發芽するに至れり。次いで第二回卒業生の出づる頃に及びては、漸く感情に代ふるに知的の方面發達し、稍々もすれば萬事懷疑の中に葬られんとするに至りしも、幸にして知識と感情との調和を得て、更に一段の進歩を來せり。第三回卒業生に及びては情と知とに加ふるに意志の力を以てし、殆ど宗教的生命に入るを得たり。然れども物は熱中する時に於ては必ず偏するものなり。其の理想餘りに高く活動激して、或は健康を害しはせぬかと憂慮せり。之幾分か事實にして、全校生徒中、神經衰弱等の病にかゝりしもの他の年に比して多かりき。此に於てか趣味教育の必要は迫り、本學年の初めに於ては、文藝技術の方面を發達せしめて、兼ねて之により理想と實際とを合致せしむる方法をとらざるべからずといふ方針をとるに至れり。

趣味教育と櫻楓會バザー

本學年の初めに於て、とるべき方針を見出したることは、趣味教育にして、之を施すに當り、最も好機會に與へたるものは櫻楓會バザーなり。同じく技術を修練するに當りても、文藝を作成するに當りても、之を實際に應用すると否とは、其の發達上、非常の遲速を來らしむべきことは明らかなる所なり。この實際の必要を齎したるバザーは本校の教育方針を助けたる効大なりといふべし。

趣味教育の必要

人は興味件はざれば萬事成就し能ふものにあらず。例へば體育に於て、瑞典式體操の如きは如何にも體操として價値あるものなれども、これのみに走れば遂に無味乾燥となる事を免れず、表情體操も遊戯體操もこの興味を件はしむる爲に必要缺くべからざるなり。また服裝等に於ても質素は必要なれども、筒袖や綿服に服裝を一定して決して質素の習慣は養はるゝものにあらざるのみか、これ等は選擇の自由を壓制するが爲に却つてその反動として、一度社會の風潮に觸るゝの曉は、忽ち華美の風習に浸染するか、然らざれば其の趣味を缺き、粗野に陷ることを免れざるなり。適當の衣服を選擇して、最も適當に裝ふことは女子の必要なる德性なり。文藝會の如きも、或は現今學生

の通弊なる輕薄、惰弱、憂欝の病を助長せしむるものあるべしと恐れて排斥するは恰も地球より花を奪ひ、月を除かんとし、人生より感情を遠ざけ、精神を葬らんとするに似て、決して健全なる人格、完美なる國家を造る所以にあらざるなり。此に於てか趣味教育によりて劣等なる感情を退け、不健全なる感情を癒し、高尚にして優美なる感情を與へざるべからざるなり。

感情の價値

第一、感情は我等人格の一要素なり。人格は我等の精神なり。換言すれば精神は自識して、自識の最大要素は感情なり。

第二、人生とは何ぞや、これ人生の價値なり。或學者は曰く「宗教とは人生の價値を認むる事なり」と。而して人生の價値を知ると云ふ事は、感情なり。感情なくば美術なく、驚嘆の念なし。物の事實を知り、眞を知ることは、知識の方面なれども、事實の價値を知るは我等の感情によらざるべからざるなり。

第三、人類の產物中、最も大なるものは美術及び宗教なり。この美術及び宗教の根源をなすものは、感情なり。かの名高きシラエルマヘルは曰く「人に美術、宗教等、精神的生命なくば動物に等し」と。又人間の最も高尚となれるものは社會にして、この社會は、一つの關係とも云ふべく、この關係は畢竟感情によりて成立するものなり。

第四、經濟と云へば實際的のものなれども、經濟的價値は美術に存す。

第五、道德は從來知、行の二、卽ち知と意とによりて成就せらるゝものと思惟せるも、之大なる誤りにして、之に生命を與ふるものは感情なり。

第六、感情の教育的價値は如何。かの世界の大家とゆるされたるクラーク大學總長のスタンレホール氏は、近年最も感情につきて研究せらるゝ所あり。其の說に曰く「過去の教育は知識の教育なりき、然れども二十世紀の教育は感情の教育にあり」と。また米國の教育界に於て其の名高き、ハーバード大學總長エリエツド氏は「此の世界は科學の最も大切なる觀察、知識、論斷によりて支配せらるゝにあらずして、理想的感情によりて支配せらる」と。また曰く「偉大の國民は如何にして作らるべきか。只幼兒の中にある正しき感情を教育するに外ならざるなり」と。

かの有名なるコルレージの言に「我が頭は知に富めるスピノザと共に居ると雖も、我が胸には情豊かなるポール住むべし」と。シドニー、スミスは「若し汝が人を教育するに當り、兒童

を愉快にせしむるに於ては、彼等の記憶によりて、其の生涯を幸福ならしむべし」と。我等は教育の價値を認めて、教育上にこの要素を加ふることを怠るべきにあらざるなり。

理想的感情

然れども反對論者は云はん。感情教育も大切なれども、我が國女子は古來感情に富み、從つて往々極端に走りて病的に陷るにあらずやと。元來感情には利己的感情、他愛的感情及び理想的感情あり。而して從來女子が抱ける感情は、多くは最も幼稚にして野蠻なる利己的感情なりき。之を教育して他愛的は勿論、我等の理想より生ずる最も高尚なる理想的感情を養はざるべからず、而して理想的感情を養ふ最大なる材料は、美術に求めざるべからざるなり。之卽ち趣味の教育に須つ所以なり。

本學年の成績

本學年の始めに企てたる方針によりて教育したる結果は如何。

第一、本校生徒の趣味を積極に養へる事なり。例へば文藝の如きも、其の弊害を凡て拋棄して、却つて高尚なる理想を發表して、之を樂しむに至れり。

第二、級の爲、寮の爲、全校の爲、燃ゆるが如き精神を奉ぐるをうるに至りしこと。之バザーの働き等に最もよくあらはれたり。

第三、理想的感情を認むるに至れり。眞善美は我等の理想にして、理想は我等の神なり、宗教なり。神に合體する精、神と我々との間におこる關係感情は、我等の人格を高め、我等の基礎をつくるものなり。本校の關係者が、殆ど全身全力をあげて盡瘁せらるゝも、決して個人的の考にはあらずして、この宗教的精神を讃するによる。之永久かはらざる人生の一大連鎖にして、これによりて人と人、人と神とは其の關係を堅く結ばるゝに至るべきなり。而して今年得たる此の美はしき精神は、來らんとする卒業式に、或はバザーに現れて、敢へて空想にあらざる事を語るに足るべし。

（「家庭週報」第九十五號）明治四十年三月

第四回卒業式告辭

來賓諸君、父兄保證人諸君、本日は諸君の前に於きまして、本校第四回卒業生並びに附屬高等女學校第六回卒業生に卒業證書を授與し、且一言の告辭を述ぶる光榮を荷ひます事は、非常

の喜びとし、且諸君に向ひまして謝すべき事と思ひます。如何となれば此の卒業式は、母校と卒業生のとの間に結びまする永久不易の契約をなすのであります。父兄、保證人諸君、來賓諸君は、是等の證據人であり、且彼等卒業生が將來に於て約束を全ふすべき保證者の位地に立つて戴かなければならぬからです。彼等卒業生の腦裏にはかゝる機會に於て最も深き印象を刻むもので只儀式的の詞に止るなく、何か意味ある告辭をなす事が大切であると考へます。然し今日は豫て御案内申し上げました通りに、午後のプログラムがいろ〳〵御座いますので、卒業生に對して述ぶべき事は、先日來數回時を使って申して置きましたから、凡て省く事と致しまして、只一言今年の卒業生は母校に對し、且社會に對し、如何なる決心を以て、母校を出づるのであるかと云ふ事を、來賓諸君、父兄、保證人諸君の前に御報告致し、且諸君にお賴みして置きたいと考へます。

第四回卒業生である所のあなた方は、母校に對し、社會に對して、如何なる事をお誓ひなさつたのであるか。又夫れは何に由つて發表されたのであるか。あなた方の最後に學校へお出しになつた答案は普通一般の答ではありません。之は我が國の女子高等教育をうけた婦人は、如何なる事を以て世に貢献すべきかと云ふ決心でありました。又最後に私に面會の際答へられた事と、實踐倫理の答案とは前後三年間に建設せられた所の確信を表白し、又如何に夫を實行すべきかと云ふ決心でありました。又あなた方の身體である櫻楓會が宣言致しました第二の維新、卽ち我が國内部の革新を今後の教育ある婦人に由つてせねばならぬと云ふ事を決心して、之に同盟せられたのであります。此の卒業式と云ふ光榮ある處に於きまして、之等吾々の内に於て互に約束を結びました事に就いて、發表する事を希望致しますが、時間が許しませんが、幸に今回卒業生の企に由つて成り立ちました午後の文藝會、並びにバザーに由つて幾分顯れる事であらうと考へます。此の計畫は櫻楓會員の計畫でありますが、其の實行者として盡された所の第四回卒業生の熱心、努力は午後に於て明らかにせらるゝ事でありませう。此の午後の催しを觀覽せらるゝに當つては必ず種々の疑問が起るであらうと考へます。故に私は先ず豫測せらるゝ疑問の二三を今後卒業生の證據人となり、保護を願ふ關係深き方々の前に、殊更に答へて置かうと存じます。

第一は櫻楓會員が始めて社會的事業を試むるに當り、何故に男子の入場をお斷りしたのであるか、曾て我が國の風習として我が國民の半數なる婦人を特別の人間として女人禁制の場所を設けられた時代がありましたが、明治維新とともに漸く此の禁

制がとかれたので、今度は復讐的に男子不可入と云ふ札を立つるのであるかと云ふ疑問もありませう。又或者はこの反對に我が國婦人は未だ自ら守る力が弱い爲に、多くの女子を保護する學校に於ては、其の間に起り易き不都合を防禦的に所置するのであるかと考へる者もありませう。又一説には我が國の風習として、男女席を同じうせずと云ふ教、是は殊更に男女の區別を甚しくするものであるが、是に從つて、益々別を嚴しうするものであるかと云ふ問も起りませうが、是等とは全く異なつた所の考を以て、我が櫻楓會は立つて居るのであります。

然らば櫻楓會のとる理由は如何と云ふに、我が國古來の風習として、男女の區別が餘りに懸隔して居る爲に大いに婦人を弱からしめ、狹からしめたのである。故に今後の教育は此の區別を可成少くして、女子も人間である。卽ち本校教育の主義である所の女子を人間として、國民として教育する事が大切であると考へます。從來の教育は男女の別を餘りに立てすぎて、教科書の如きも、悉く男子用のものと、女子用のものとを作つたのである。而して女子はあまり役に立たぬもの、吉凶苦樂悉く他人に依るとせられたのであります。然るに日清戰爭の際には女子自ら立つて色々の事業を起しました。例へば愛國婦人會の如きものも當時に萠したのでありました。其の他續々婦人の事業として見るべきものが起りましたが、其の黑幕には必ず男子があるのである。我が櫻楓會は最初から此の弊を改めんが爲に、女子自身の力によつて何事をも成就しようと決心致したのであります。今回のバザーの如きもこの主義に基き文藝の筋書を作る事から、賣品を製作する事から、凡て婦人の手で致しました。且是迄のバザーは多く男子のポケットをあてにしなければ、目的を達せられなかつたのであるが、櫻楓會では我が國婦人の爲に公開すべき圖書館に棒ぐる事であるから、成可く多くの御婦人方の同情を得て、其の計畫を果さんと希望したのである。併しながら社會が男子と女子とから成つて居りますので、女子が一事を企てようとするには、男子の同情をも充分に寄せられれん事を希望するのはもとよりであります。そこで本校教育の方針は此の際大いに男子の方々にも實地を御覽戴いて、御批評を願ひたいのであります。本校創立の當初から公言して居りまする所の、女子を女子として教育するのは勿論、人間としても、國民としても、教育して居る事が、斯くの如き際に幾分か御覽下さる事が出來るであらうと考へます。

然し遺憾ながら、櫻楓會の諸設備は、多くの男女を迎へて、其の主義を發表するには、あまりに幼稚であります。且女子が、常に自ら主となつて働く習慣を養ひます爲に、成可く多く

の婦人を集めようと致しました爲に、設備の狹隘を告ぐる憂ひもあつたのであります。かくの如き理由のもとに男子の入場をお斷り致したので、決して守舊の考から出たのでは無いのであります。

又一方には夫と全く反對の考を以て、我が國從來の風習として、女子が社會的事業を試み、之を公衆の前に發表する事は如何はしいものである。之が爲に、女德を損するといふ恐れはあるまいかとの說もありますのでせう。昨年の卒業生は意志の結合をしたのであるが、其の意志の緊張と云ふ事の上に、今一層發達する爲に、本年の卒業生は構成發表と云ふ事を加へたのであります。其の結果は如何であるといふに、最も熱心な、最も忠實な、風習を殘しました。昨年以來今回を合せて、三度の文藝の筋書を作り、又其の考を發表した所の人々は、自分の考を充分云ひ顯す事も出來なかつた人々でありました。然るに此の弊を自ら覺つた處の彼等は、今迄の習慣を改めて、積極的に進んだ爲に、今日では充分自身の考を顯す事も出來るやうになり、人格を次第に圓滿の域に進むる事を得たのであります。又健康も大いに增進した事は、統計に依つて明らかにせられて居ります。故にかう云ふ事に就いて諸君の御心配なさる事はあるまいと思ひますが、私の最も心配する事は、先に述べました如く、女子をも人間として、國民として教育せんとする所の主義方針を實現する事が出來たであらうかと云ふ事であります。彼等は如何なる所に別れて參りましても、生涯に於て此の考を成就しようと約束致したのであります。而して彼等が行く所は概ね保守の考に滿たされて居るのであります。私が殊に父兄諸君に願ひまするのは、此の事であります。我が國の社會は女子を人間として取扱はないのである。彼等が圓滿に發達する事を喜ばないのである。彼等の延びんとする萠芽を悉く破壞せんとするのである。彼等は如何なる逆境に陷りましても、終り迄堪へ忍ぶ所の決心を持つて居るにも拘らず、稍々もすればあまりに嚴しき外部の厭迫に其の萠芽を傷けらるゝ事はこの上もなき遺憾の事と考へます。其の僅に三日や七日の命を持つて居る所の彼の櫻ですらも、雪や霜や又今朝の如き雨風にいためらるゝ時は誰か之を惜しまぬものがありませうか。まして永久の生命を持ち、男子と同じ萠芽を持つて居る所の婦人、全世界の物質にも代へ難き所の靈あるものに對しては人道の上より見るも、之に障害を加へる事は文化の進步を奪ふ敵であります。然るに今日の社會は婦人に對する事が、誠に殘酷であつて、彼等に少しの過ち少しの缺點があれば、忽ち之を針小棒大にして、漸く延びんとする所のものを悉く破壞せんとするのであります。願は

くば來賓諸君、父兄、保證人諸君どうか彼等の人格を認められ、彼等が生涯に於て此の責任を全ふする樣に、彼等の證據人となり、保護者となられん事を希望致します。

（「家庭週報」第九十六號）明治四十年四月

印象と發表

其の一、人格の經程

カントは自分の乘つて居る馬に向つて、「若しも汝が、我と云ふ詞を使ふ事が出來たならば、予は直ちに汝の背より下りん」と云つた事がある。我卽ち己を意識すると云ふ事が、人間と動物の異なる所である。獨逸の哲學者のフイヒテは、自分の子供が我と云ふ詞を使つた日を、其の子が此の世界に生れた誕生日とした。我々も其の通りである。我々の最も奧底にある、我と云ふものを見出した日が生れ變つた日で、生命を見出した時である。

我々人間の先祖なるアダム、イブが善惡の區別を知つた日は、墮落した日であると、聖書にはあるが、今日の解釋によれば、之は人間が生れたのであり、道德的觀念が始まつたのである。我々は今一度、生れかはらねばならぬ。卽ち我々の本性、或は絕對的自我、又は神聖なる我と云ふものを、自覺した其の日が、眞に生れ變つた日で、人格を作る事の出來る人間となつた日であると思ふ。然らば我を知るとは、如何なる事であるか。禪宗では坐禪を組み、凡ての邪念を去り、無我の境界に入つて、始めて自性を見出すと云ひ、クリスト教では祈禱により、沈思默考して我を見出す事が出來ると云ふ。此の樣に考へると眞の自我は恰も鑛坑に深く潛んで居る金銀の如きもので、是を見出すのは容易な業ではない樣に、考へる人もあらう。又潛んで居る所の活きた電線に此の宇宙の震動が一旦觸れると忽ちにして復活するので、人間に精神的生命の出來るのは、奇蹟の如きものであると云ふ樣に考へられた時代もある。そこで私は諸子が見出さなければならぬ、自我、卽ち此の精神的生命の根本となるものに就いて、惑ふ處はないかと思ふのである。併し是は迚も諸子に、詞を以て說き示した所で、わかるものではない。然らば如何なる方法を以て解せしむると云ふに、各自の力によつて、解せしむるより外はない。夫を解する爲に、諸子は今後如何なる努力をしなければならぬか、先づ自我を解するに足る丈の人格を作らねばならぬ。もし此處に居る大部分の人が、眞の自我を解する事が出來ぬとすれば、夫は未だ解するに

足る丈の人格がない故と、思はねばならぬ。私の云ふ人格とは、精神的人格である。故に是迄世間に用ひられて居つた詞とは、區別をして置かなければならぬ。此の精神的人格、卽ち最も高尙なる人格の出來て居る人は、自我を發見して居る人である。私は今ケーオス（Chaos）とコスモス（Cosmos）との關係によりて諸子の頭腦を分類し、以て精神的人格の如何なるものであるかを說かんとす。

ケーオスとは宇宙を組織する力、及び其の原素は皆其の中に含まれて居るけれども、形もなく秩序もなく、生命もない、混沌たる有樣である時を、指して云ふのである。

コスモスと云ふのは、今日の宇宙である。既に拵らへ上げられて、一定の秩序を保つて居る。夫れに一番近いのは今日の我が地球である。其の中には陸もあり海もある。就中最も進んで居るものは、我々人間である。其の人と人との關係、凡ての天體との關係を以て組織されて居る。此の宇宙を指して、コスモスと云ふ。我々は皆一つの小コスモスである。ケーオスとコスモスといふ語を私は人格にあてはめたいのである。今諸子の頭腦の狀態を區別してケーオスの時代に居るものと、コスモスの時代になつた頭腦との二つとする。

人の態度には、丁度創世の始め、世界が混沌たる狀態で、其の分子が、遊離して居る樣なものがある。之はケーオス時代で未だ人間と見做す事の出來ない者である。凡ての人は等しく、二つの目二つの耳を持つて居る故、何か聞える樣であり、何か見ゆる樣である。然し其の間に統一がなかつたならば、只一つの行動に過ぎない。然し是等の行動が正しき關係を保つと、一の觀念世界となる。是を名づけて感覺、知覺、又は概念と云ふ。多くの概念が、悉く關係を保つて調和したものが、卽ち、コスモスである、我々の頭腦がコスモスとなつて後、始めて人格は發展して行く事が出來る。斯くの如くケーオスから始まつて、コスモスとなる間の過程を區別して、次の時代とする。

第一、材料の時代

個々別々の事實、他から與へられたる知識、又は人々の經驗を聞き集めて居るけれども、未だ其の材料を組み立てる力もなく、何等の統一したる點もなき狀態、卽ちケーオスの時代である。

第二、構成の時代

ケーオスの時代の次ぎは、多くの材料を色々に組み立てる時代、卽ち構成の世界で、これはアートの世界、又はサイエンス

の世界と、名付けてもよい。此の時代に於て我々は、哲學、科學等の學說、或は假說（Hypothesis）によつて、自己の腦中に、科學の世界、宗教の世界等、種々の世界を組織する。此の道德、宗教、科學、文學等の世界が結び付くと玆に始めて小宇宙が出來る、此の小宇宙を意識と云ふ。意識が出來て後始めて意志が出來るのである。尙一言注意しておく事は、譬へ自分の腦中に哲學、文學、宗教等種々の世界が出來たと云つても、直ちに夫が小宇宙を形成するのではない。思考力の働きに依つて、凡ての物の間に存して居る密接なる關係を發見し一々正當なる判斷を下して、悉く諸世界を調和統一するに非ざれば、小宇宙は形づくられぬ。例へば、我々の知識は、感覺の世界等に、種々の材料を入れた計りでは、何の働きをもする事は出來ぬ。夫等の材料を研究して關係をつければ始めて眞の知識となると、丁度同じ事である。

第三、意志の時代

內に出來たものを外に現すのが、發表である。我々は世界から始終內に引き入れて、それを製作しては、外に出す所の働きをして居る。是はケーオスの時代及び構成の時代を經て、始めて出來るので之が我々の人格となるのである。我々の人格は、オーガニズムであると云ふことを忘れてはならぬ。卽ち複雜なるものが種々組織されて出來た所のもので、ケーオスではなく、コスモスである。諸子が若し人格が出來て居るとするならば、諸子の頭腦はコスモスである筈である。コスモスであるならば、己は如何なる組織の一部分であるか、己の力、己は人格は如何なるものであるかを知つて居らねばならぬ。我々の生涯の目的は、人格品性を作るのにある。それは讀書をなし、人の經驗を聞き、眼で見た事、耳に入つた事、身體に觸れた事等の、あらゆる材料を使つて、其處から或物を創作しなければならぬ。知識を養ふのも人格を作るのも、同じ事である。而して我々には其の時に適當したものを作るのであるから、假令或る暗示（Suggestion）を受けても自ら働かなければ、銘々其の時々に應じて、物を組み立てる事は出來ないのである。其の組み立てると云ふ事は、卽ち關係を作ると云ふ事で、我等の知力は、心靈上の働きの間に、關係をつけるのである。夫は分類する事、概念を作る事、法則を發見する事等種々ある。そこで類似したる點、反對したる點を發見する事、之が卽ち分類となり、綜合となり、同化となつて何かを組織する所の働きとなるのである。

婦人の長所は類似點を發見して同化する事であつて、之が同

情心となる。故に文學、音樂等、學術に於ては天才を顯す事がさして困難ではないが、之に反して異なるものを區別する能力、物を發見するに必要なる能力には誠に乏しい。併し人間には此の兩方面を具へる事が必要で、此の兩方面の能力を具へて居る人は、最も完全に近い人と云ふ事が出來る。外部から與へられたるものの中から、悉く有益なるものを選擇し、之を自分の働きによつて、必ず何かに組み立てる處の力が大切であつて、人格は全く此の組織によつて出來るものである。而して此の我なるものは、決して個人的のものではなく、必ず他の人格と關係を持つて居るのである。宇宙或は神と關係を有して居るものである。ゲーテは「汝の人格を作れ、而して他の人格を尊敬せよ」と云つて居る。故に自分の人格を作ると同時に人の人格をも作つて行かなければならぬ、私はよく意志の擴大といふ語を用ひたが、自己の考を擴大して、宇宙或は神の意志と合體せしむる事が必要である。諸子は此の境界に達しなければならぬ。玆に至るには、自ら經驗し自ら關係を發見して、永久其の關係を續け、生涯の目的を一貫する事を心掛けねばならぬ。文學、哲學、宗教等を學ぶも皆同じ事で、自ら學び得た所のものは、社會と共に永久に生きて行くのである。されば自ら己の力を知り適性を認めて、自信力を堅くし、目的に向つて進まねばならぬ。之をする爲には、世人の毀譽褒貶等は敢へて意とすべきではない。之をなすには、第一依賴心を捨て、自からなすの決心をしなければならぬ。大學に於ける三年間の教場でするばかりが研究であると思ふと、大變な間違ひである。直ちに自らを發見し、自らの力を使つて自らを作る人は、非常なる働きが出來る。而して我々の人格を築き上げて行く事は、生涯の事業である。故に心理學、宗教學、社會學、道德學等を學ぶに當つても、之を自己に結びつけて、其の關係を段々堅め且つ發達せしめて、大なる人格を作らねばならぬ、此の學校の創立以來、余は櫻楓會との關係を發見し、其の結果今日の校風を作つたのである。之がインスピレーションとなり、ヒューマニテイとなり、其の人格と人格との關係が大なる愛となるのである。卽ち我等自身の人格と人格との間に段々關係をつけて、宇宙と合體し、全體の意志と結合して社會を動かし、宇宙の働きに應接して行く所の人は何時も滿足であり、何事も希望に充ちて、限りなく向上して行くのである。

ケーオスの時代も、コスモスの時代と同じく、外部より刺戟を受けるのであるが、其の違つた點は原動力が外にあるのと、內から出るのとである。然し內から發する力の中には、本能的衝動的のもの等もあるが、今云ふのは心理學上のそれではな

い。其の原動力の内から發する人を實力ある人と云ひ、然らざるを實力のない人と云ふ。

善く働く人の中にも、外からの刺戟に由つて働くものと内から發して働く人とある。此の内から發して働く人は、外からの刺戟を受くる事も防ぐ事も自由である上に、外の力をも動かす事が出來る。換言すれば、己の意志の力に由つて、自分の境遇を開拓する事が出來るのである。斯かる人は一種の根據がある故、他から冒す能はざる所のもので、假令、不幸にして、親、兄弟、財産等を失ふ事があつても、餘りに心を動かされない。斯くの如き人でなければ、永久のものと云ふ事は出來ないのである。今一つ内に力のある人の異る所は、自分の力を開拓するに就いて必要なる材料、方法、力等を自分の内から、拵へ出す事が出來る。假令學校を離れても、學問に不便なる土地に移つても、其の爲に妨げらるゝ事なく、自由を得て居るのである。然らば其の實力とは何を云ふのであるが、即ち左の如きものである。

第一、原理を構成する力

第二、原理を行爲に組織する力

第三、品性を構成する力

此の原理を組織すると云ふ事は、ケーオス時代の人にもある事ではあるが、それは獨斷的であつて、他人の組織した形式を其の儘に遵奉するのであるから、形式に流れて、眞に生命となつて居ない。然るにコスモスの人は歸納的に研究する。自分の經驗に訴へ、多くの事實を統一して、自分のものとするので、所謂大悟徹底とも云ふべく、心眼が開けて、之即ち眞理なりとの確信が得られるのである。今迄學校にて學んだ事は道德の原理、社會の原理、宇宙の原理等、皆原理である。即ちそれは只原理であり、形式であるから、これを自ら發見して、自らの身に行ふのとは非常なる差異がある。而して總てを歸納的に研究して、己が主義とし、己が品性とし、己が力とする事は、學問の目的であるが、其の力をどれだけ諸子は、養ふ事が出來たであらうか。今回の文藝會に就いての諸子の報告によれば、先づ自分の考となつたものもある樣であるが、是は己の經驗と、實驗と、觀察とに由つて組み立てたものを、又社會にある所のものと結びつけて、一つの關係を發見したのである。本校は大學として恥しからぬ設備があり、今後益々あらゆる方面の觀察に、適當なる境遇を與へんとして居るが、諸子は此の好材料を使つてこれを有機化し、己が力とする事が出來なければ高等教育の價値は現はれないのである。

凡てのものを有機化する迄に最も大切な事は、同じものを分

類して概念を作ること、及び違つたものから同じものを發見して總合すること、所謂比較研究が大切である。私が昨日中に手にした書簡を研究しても、種々の原理を見出す事が出來る。一例を云へば、或米國婦人より、教育に關する書物を貸與せられたが、成るべく少い時間で、充分に讀みこなす事の出來る樣に、書物に印をつけて便利を計られた上、色々夫に就いての注意を書いた親切な手紙をも添へられた。此の手紙を見て私は、人の爲に、全體の爲に奉仕する事の、如何に美しいかを切に感じたのである。

斯くの如く、觀察、讀書、實驗等に依り、其の事實を歸納的に研究して得た所の考は自分のもので、立派な原理である。それが又行爲の世界を構成して、一つのコスモスとなる。我々の行爲は我々の主義の實現せられたもので、其の行爲が重なつて出來たものが、我々の品性であり、是が生涯の間、繰り返されて、一つのコスモスとなつたものが、我々の傾向となり、人格となるので、之が眞の情操である。換言すれば、我々の主義を作るのは知識で、行爲となるのは意志で、行爲が重なつて出來た所の人格は我々の情操である。之等が出來て、初めて我々の力が出來た、自分の中に原動力が出來た、と云ふ事が出來るのである。我々の行爲は主義があつて初めて現はるゝので、主義を構成する爲には、倫理學及び種々の倫理學說、倫理學史等を學ばねばならぬ。猶夫を纏める爲に、哲學を究め其の基礎たる科學をも修め、而して自分の奉ずる主義が出來て來なければならぬ。卽ち諸子の行爲の標準がなければならぬ。換言すれば、善惡の區別が付いて居らねばならぬ。例へばカントの主義、ダーウインの學說を知つたのみで、其の間の矛盾は果して何れが是であるか、非であるかが解釋せられぬならば、己が生涯は如何にすべきかといふ事が分らないのである。其等を統一せず、己が考を構成せずして、猶他の材料を求め、益々異つた所のものを集むるが如きは、何の價値もないのである。先づ自分の考を定め、其の上の進步を期したならば、幾多の材料を集めても、最も有益に用ひられ、既に關係は保たれて居るから、己が道德主義も出來、生涯の方針も立つのである。

世界の人類が構成した道德主義、宗教上の信仰には、無數の矛盾がある。其の主義、信仰を研究し統一する前に、先づ

第一に全體の解釋がつかねばならぬ。宇宙の實體は何であるか、或ものは、この自意識、卽ち精神であると云ひ、或ものは物質であると云ふ、何れが是であるか、宇宙は無限であり、我等は有限である。其の有限のものと無限のものとの關係は、いかなるものであるか、又人生は如何なるものであるか等は、皆

解釋すべきものである、之を皆、人類が數千年間研究を重ね、解釋し來りしにも關らず、未だ判然たる解釋はつかぬのである。有限なる人間は各々性質を異にし、隨つて各々見るところを異にして居るから、一人の頭で、凡ての宇宙を見る事は出來ぬ。然し漸々光を認めて來たのであるから、一層深く研究したならば、更に光明多きものを發見する事が出來るであらう。併し容易に、其の全體を解釋する事が出來ないのであるから、學問の目的は、宇宙を解釋する爲であり、己を解釋する爲である。斯くして後、始めて行爲の標準が定まつて來るのである。如何となれば、行爲は自他の關係であるから、宇宙を解し、己を解釋するには、凡ての學說を解釋しなければならぬ。故に先づ解釋すると云ふ事が、學問の第一階段である。

第二には批評をせねばならぬ。數多の學說と、學說との間に生ずる矛盾に批評を試み、其の間の異動を察し、其の間の關係を解する時は、全體が如何なるものなるかがわかる。之をなすには、或は分解し、或は總合する働きを要するのである。

第三に必要なのは組織する事である。今迄ありし考よりも、更に進んだ所に組み立てるので、此の働きをして、始めて滿足する事が出來、其の主義は、益々進歩發達して行く事が出來るのである。諸子の行爲の標準は、或は宗教、克己說、或は快樂說等、種々であらう。之等の總てを統一して、自分の主義を構成するには、先つ分類し、總合する事が必要である。例へば快樂說は感情を主とし、克己說は理性を主とするので、其の間には互に矛盾がある。然し何れにも又一の眞理があるから、虛心平氣で其の一つの說を信ずれば、滿足する事を得れども、是にも道理あり、彼にも道理あり、何れに從ふべきであるか、兩者を如何にして調和すべきであるか、如何なる點を取るべきであるか、是等は科學と、哲學との關係、無限と有限との關係、己が生涯に就いて、或は社會と己との關係を知る上に必要な事である。

人格を一つのコスモスとすれば、個人的道德、社會的道德、政治的道德等の各方面がある。各方面を別にして云へば、快樂說、殊にミルの樣に全體を目的として、結果を重んずる說は、社會的道德、政治的道德上に、最も重んずべきもので、社會全體の方面には、是非この說をとらねばならぬ。克己說は、人格的道德の上に、卽ち個人的行爲の標準を立つる上に、最も必要である。しかし個人と雖も、孤立したるものでなく、是非社會と、相提携して行かなければならぬ。之を調和統一したものを自我實現說と云ふ。斯くの如く凡ての學說を批評して、最後に己が主義を定め、夫を守るに至らざれば、やはりケーオスに過

ぎないのである。此の働きがなければ、單に片々たる知識のみで、確信は得られないのである。

確信を得て、更に之と社會との關係を結び付けて人格とし、之を國家社會に行ふのが天職である。換言すれば、先づ自分の主義を作り、之を如何にして應用して行爲とすべきかの方法をも、講じなければならぬ。己を一つのコスモスとして行く人は、やがて國家社會との關係を作り、更に擴大して世界とも關係をつけて行く事が出來る。而して行爲を組織する方法は、卽ち主義と實行とを一致せしむる事である。今日世の中では、自分の主義とする所と、行爲と矛盾を來す人が多い。斯くの如き人は、未だケーオスの時代にある人であるが、自分の作りたる主義を常に行ひ主義と行爲と一致する樣、勉めて居る人は、コスモスの人である。此の主義と實行と、一致する事を指して、行爲と云ふ。行爲は卽ち、努力の結果である。如何となれば、未だ服從しない所の感情を支配して、自分の考に一致せしめんとするには、非常なる努力を要するのである。カントの如きは人間の目的は克己である、感情を支配して、自分の理性に從はせるのであると云つて居る。此の主義を實踐躬行して行く事が出來て、始めて之を感情的に、愉快に行ふ事が出來る。其の狀態を指して德と云ふ。總ての困難に勝つ所の習慣が積つて、品性となり、情操となり、善を樂しんで行ふ事が出來るのである。之教育上感情に注意せねばならぬ所以で、換言すれば、品性人格を養ふはやがて感情を教育すると云ふ事になる。卽ち我等の人格を、コスモスとするには、其の感情の關係を善く解釋し、研究して、有機體とするにある。然らば如何にして感情を教育すべきか、感情は左の如くに區別する事が出來る。

（一）自己的感情 ｛防禦的感情／自重的感情｝
（二）社會的感情
（三）道德的感情
（四）宗教的感情
（五）集中的感情

是等凡ての感情を統一して各々配置（Disposition）を定め、品性としたものが、人格的感情卽ち情操である。

前に述べたる如く、我々がコスモスとなるには三階段がある。卽ち第一を知識の時代と云ひ、知識を以て原理を作る。第二を意志の時代とし、意志を以て行爲をなす。此の行爲が繰り返されて品性となつたものが卽ち情操である。これを第三の時代とす。此の知情意が圓滿に統一せられて、我々の全精神、全人格となつたものが、小宇宙である。此の人格が、他の人格と

關係を保つたものが、社會國家をなすので、其の關係を擴大するのが、我々の目的である。又其の關係によつて、我々の人格は、發達して行くのである。我々は此の關係を明らかにし、此の力を養ふ事に全力を注がなければならないのである。

其の二、假說に就いて

我々がケーオスの時代からコスモスの境界に進み、生涯發展して止まない人格を築くには、前に述べたる如く、第一材料の時代、第二構成の時代、第三意志の時代の三階段を經つゝ行くものである。

そこで先づ材料を得てこれを分類し統一する。卽ち一の組織を構成しなければならぬ。此の働きをするには、心身をこゝに集中する事が最も必要である。（集中に就いては「新年の希望」參照ありたし）而して集中せしむるレンズの作用をするものは卽ち假說（Hypothesis）である。

假說を作らずして物を研究し、思考する人は恰も目的を定めずに旅行する樣な者である。彼のコロンバスは自分の知識と、信仰とに矛盾を見出し、そこで此の疑問を解かうとして一の假說を作つた。卽ち地球は平面であるといふ從來の信仰と異なる所の、地球は圓いものであらうと云ふ一の暗示を得た。卽ち一の構成したのである。此の暗示の中には想像、感情、意志何れも加はつて出來たものである。是に於て研究の目的が定まるのである。力の集中點を見出すのである。

併しながら此の假定說は果して眞であるか、否かは未だわからないのである。そこでそれを實際に徵して確める働きが起つて來るのである。卽ちこれが觀察であり、實驗である。既に一の假說を作つたコロンバスは世人の嘲笑批難を意とせず、非常なる困難を犯して航海を決行して遂に假說と同じなる結果を得て、一大眞理を見出したのである。又コバルニカスが始めて太陽中心說を發見して以來、天文學に由つて其の實證はあがり、今日に於ては既に動かすべからざる眞理となり、知識となつたのである。これは宗教、科學其の他總てのものに要するのである。卽ち假說は原動力となるのである。

物理學を研究する人は力に就いて、化學を研究する人は原子を就いて一の假說を持つて居る。又宗教家、文學者の如きも、信仰、或は思想に就いて、假說を持ち、其の上に考を築き立てようと勉めて居る。神と云ふ事に就いても、或は之を無限絕對のものと云ひ、人格的のものと云ひ、或は一元論を稱へ、二元論を主張し、或は汎神教を信ずるあり、之等は皆假說であつて、我等の信仰も一つの假說である。此の假說なくしては信仰

も成立しないのである。宗教、科學、文學共に我等は假說を作つて行かなければ進步活動は出來ない。假說を作り、之を信じて活動してこそ人は進步するのである。

扨て此の假說を作つて、それを追ひつゝ進む間は、時間に於てどれ程を要するものであるかと云へば、或は一日にして解決するあり、數年を要するあり、或は數世紀を要する事もある。之を豫め覺悟して置かなければ、或は失望し、或は懷疑に陷る事がある。之は最も小さき一例ではあるが、四五年前、私の身體が非常に衰弱した時其の原因を考へて種々の書籍をよみ、學者の說を參照して一つの假說を作り、色々と實驗したが、如何にしても明らかならざる點があつた。然るに今日に至りて其の結果が明瞭に擧つた故に、之は眞理であると云ふ事を信ずるに至つた。若し私が一週間か二週間を試みて、迷路のうちに中止したならば何の得る所もなかつたであらう。一身の病氣の原因と云ふが如き事ですら、斯くの如くである。況や大なる問題に至つては、數千年を要するものもある。されば此の假說たるや、少くとも我等の一生涯を通じて研究すべきものであるから、其の間の態度を如何に持續すべきかに至つては亦茲に繰返して云ふまでもない事である。我々の研究にも、信仰にも、又事業の計畫にも、假說は缺くべからざるものであると共に此の覺悟が大切である。

其の三、印象と發表との價値

吾人の頭腦の働きに二つのものがある。其の一つは印象卽ち物に感ずる事で、他の一つは發表卽ち外に向つて活動する事である。此の二者の關係は、人格を發展するに缺くべからざる要素で人格の基礎たる假說を作るには、印象と發表とは必ず相伴はねばならぬのである。

我々の生活は活動である。其の活動の源は何れにあるかと云ふと、それは頭腦の中にある二つの要素、卽ち印象の中心と、發表の中心とがそれで、前者を感覺中樞と云ひ、後者を運動中樞と云ふ。勿論これ等中樞の働きは精神なくして出來るものでなく、精神あつて始めて感覺あり、活動あるものであるが、此の二つの中心は卽ち腦を形成する腦細胞で、其の細胞には各無數の線がある。此の線が互に接觸する事によつて種々の感覺を起し、活動を起すのである。そこで先づ感覺中樞は譬へば心の眼に當る處で、こゝに物を感じこれを反省し、構成して直ちに運動中樞から發表するのである。故にこれを心の手と云ふ事が出來る。

發表の原因は印象であつて、印象があれば必ず其の結果とし

て發表があらはれるのである。故に盛んに發表するには、盛んに印象しなければならぬ。故に印象なき發表なく、發表なき印象はないのである。換言すれば印象は知、發表は行ひに譬へる事が出來る。知と行ひとは決して離るべからざるものであつて、知とは事物を知り事物に感ずる事を云ひ、行ひは卽ち實行する事である。我等の行爲は一として知る事感ずる事に基因せざるはなく、其の知る事は又行ひから來る。卽ち我々の經驗である。我々は絕えず四圍の境遇から印象を受ける。これが反射して直ちに行爲の上に現れるのである。四圍の境遇とは第一自然的境遇、第二社會的境遇、第三宗教的境遇、第四審美的境遇である。斯かる種々の方面から入り來るものが、種々の感情を作つてそれが思想となり、假說となり、信仰となり、更に進んで發表となり、活動となる。我々は人格を作り、信仰を築かんとせば、此の兩方面を、必ず併行せしめねばならぬ。若し一方に偏する時は、完全に進步する事は出來ぬ。故に此の兩方面を完全に教育する事は、大切である。然るに我が國今日の教育は、比較的印象せしむる事につとめる所は多いが、これを發表せしむる事は、最も稀である。諸子が自ら實力の不足を感ずるのも原因は比所に存して居る。故に此の發表をよく教育する事は、大切なる事であつて、之を助けるのは藝術の教育である。是に於て我々は內にある所のものと、外界に現るゝ所のものとが一致して、始めて意の如く行ふ事を得るに至るのである。此の發表を教育上等閑に附した事が我が國の學生をして實力なきに至らしめた大原因である故、此の缺點を補はなければ、今日の學生を救ふ事は出來ないのである。然らば發表は人格養成上に如何なる價値を有するかを次ぎに述べん。

發表の知的價値

發表は藝術の爲に必要なるのみならず、知識を明らかにし、思想を確實ならしむる爲にも、缺くべからざるものである。我等が腦中に構成したる所の知識を發表すれば、其の知識は一層明らかに、且つ廣く其の關係は確實となる。理想又は假說に於けるも亦之と同じく、只腦中に描きたる不明瞭なる理想も假說も一旦發表するに及んで、初めて確實なるを得るのである。

ミカエル・アンゼルは或寺院の彫刻を賴まれた時、腦中に一つの理想を描いたが、彼は之を直ちに大理石には試みずして、粘土を以て一つの模型を作り、これがために、一層己が理想を明らかにするを得て、有名なる彫刻を完成したと云ふ事である。之我々の經驗に由つても、證明せらるべき事であつて、此の發表を試みざる、實行を試みざる教育は、其の人の思想を判

然たらしめず不得要領なる人格を養成するのである。

發表の道德的價値

是說明する迄もなく、我々が道德に就きて非常に決心する所あつて、腦中に一つの理想を描く事ありとするも、之を實行せざれば何の價値もないのである。此の感ずる所を發表して始めて善き習慣は養成せらるゝのである。

發表の宗教的價値

ポールの格言に、「行ひなき信仰には生命なし」と。實にクリストの如く、釋迦の如く、孔子の如き行ひあつて、初めて其の信仰は尊く、且つ價値あるものと謂ふ事が出來るのである。

發表の社會的價値

人は單に考へ、單に論ずるのみでは、何の價値もない。眞に考を持つならば、それは己が級に向つて、學校に向つて、又自分の家庭に向つて、發表せざれば、其の考は水泡に歸し、何の益する所なくして終るのみである。かやうに分類すれば限りはないが、之を約言すれば、發表は我々の人格を作り、全品性を作る上に、大切なる要素であるが故に、印象と發表とは併行して進む樣に計らなければならぬ。

人格とは何であるか。我々の人格には主觀的方面と、社會的方面とあり。卽ち人格とは、一方には內に感じを持ちて自らを進め、一方には之を外部に向つて顯して行く事である。然るに人格と云へば、形に現れた肖像か何かの如くに思惟し易きものであるが、實に人格は過程であつて、其の日其の日の行ひが、其の人の人格であり品性である。卽ち我々の人格品性は、始終成りつゝありなしつゝある所の働きでなくてはならぬ。萬一此の印象を怠るが如き事あらんか、根のなき樹木、水源なき湖沼、原動力なき汽車に等しいものである。又此の發表を等閑に附する事あらんか必ず意志の薄弱を來し、効果なき生涯を送るに至る。玆に於て我等の常に勉めざるべからざる所は、一方には充分善良なる印象を受けて生命の源を養ひ、高潔なる感情と高尙なる理想を構成し內に燃ゆるが如き信仰を保ち、之と同時に充分發表の力を養ひ、而して內外を一致せしめなければならぬ。斯かる人を完全圓滿なる人と云ひ、此の活動力ある人を、眞に健全なる人と云ふのである。

發表に就いては、歐米でも昔は學校教育が寺院等に委ねられて居た爲に、少しも重きを置かれなかった。然し其の短は家庭で補はれたのである。然るに今日では、交通機關、其の他凡て

の事が工業的組織となり、便利を來した爲に、之が家庭で補はれる機會がなくなり、教育上には非常なる影響を及ぼしたので其の弊を救ふ爲に、音樂、體操、手藝等の必要を認めるに至つた。我が國の教育に於ては殊に遺傳的に物の覺えると云ふ事卽ち印象する事を奬勵する事は度を越えたのであるが、近來漸く學校教育に手藝の方面を加へ來つたのであるが、大抵は形式に止つて、精神が働いて居らないから、やはり發表の點が非常に遲れて居るのである。本校が特に自然研究、手工教育等を奬勵するのは、やはり此の發表の缺けたる所を、補はんが爲である。

私が諸子に向つて、實力が足りないと叫びながらも、諸子に多大の望を囑し、諸子に於ても、兎に角是迄に進み來つたのは何故であるか。是卽ち本校の教育が一方に偏する事なく、發表にも重きを置いたからである。又諸子も外部より受けたる印象を發表する事に勉めたからである。實に此の學校の中は、一の社會であり國家であり、且つ天然の景にも富んで居る。それはつまり諸子を適當な境遇に置いて、我々が年來の缺點と認めた所を、改めしめんが爲である。

其の他例へば運動會、文藝會の如き、今回のバザーの如き、皆目的は此の發表の教育にあるので、此の發表の缺けたる事を補ふに、やはり本校の取つた方針が叶つて居る事を信ずるのである。故に諸子は、此の原理を應用する事が大切である。本年四月櫻楓會に於て催す所のバザーは卽ち此の原理を應用せしめん爲であるから、之をよく解して置く事は甚だ大切である。

つまりバザーは教育の爲にして居るのであるから、此のバザーをよくすると云ふ事は我々の行爲を全ふすると云ふ事で、バザーの成功は、やがて本校教育の成功と云ふ事になるのである。又或意味から云へば、一種の社會教育であつて、此の一般の社會を教育すると云ふ事は、本校の教育主義卽ち社會と共に進むと云ふ事である。然らば如何にして此の成功を來すべきか、卽ち原理を應用する事より外にはない。之をなすには諸子の知力を要し、判斷力を要するのである。

要するに人格を養ふに最も大切なのは、第一印象を豊かにし、第二發表をよくすると云ふ事で立派な發表の出來ないのは印象が乏しいからで、それでは到底雄大なる思想、燃ゆるが如き熱心高尚なる理想は作られぬ。立派なる花を咲かせんとせば、先づ其の根本を養はねばならぬ。偉大な發表をなさんとせば、此の生きた境遇、生きた社會、生きた宗教、生きた精神界から、偉大な印象を充分受けねばならぬ。而して諸子は偉大なる印象を充分受け得らるべき境遇に導かれてあるのである。

國史より受くる印象

我が國の歴史が諸子に與ふる所の印象は、實に大なるものである。大なる發表をするには、大なる印象を受けなければならぬ。然るに我が國の歴史は大なる震動を受けて、其の度毎に一大發展をして居るにも拘らず、國史、國文を研究する人は、思想が停滞し易い傾きがある。然らば如何にして有効ならしむる事を得べきか。これに就いては本校文學部の教授の方法、其の他を改良するの必要を認めて着手して居るのである。

現時は泰西文明と東洋文明とが、本邦に於て接觸して、此所に一つの矛盾があつて、一大文化の光輝を放たんとして居るのである。歴史は卽ち國民的實現であるから、玆に一大印象を受けて發見する所があるならば、我が國婦人の一大發展を來す事が出來るであらうと思ふ。それで諸子は國民的潮流に觸れて、高尙なる理想を養ひ、立派なる人格を作る事に勉めなければならぬ。

本校の歴史より受くる印象

今一つは本校の歴史である。抑々本校は如何なる目的を以て生れたのであるか。又本校は今日社會と如何なる關係を持つて居るかと云ふ事を、明らかに知る事が大切である。既に時は迫つて居る。卽ち來る九日の第二計畫發表會＝明治四十年二月九日第二期本校擴張計畫發表會＝に於て一大印象を受ける事が肝要である。本校は我が國で最も有力なる同情を持ち、社會各方面の密接なる關係を有して居るのであるから、斯かる社會の關係を知つて、印象を受ける事が有益である。我々は此の發表會に於て善良なる印象を受け、社會に存する傲慢に對するに、謙遜を以てし虛僞に報ゆるに、至誠を以てし、上下社會の仲媒者となり、善を以て、惡に勝たねばならぬ。我々は至誠を以て、一意專心事をなすの外、何ものも持たぬのである。我々は味方に對し、敵に對し、或は其の中間にある懷疑者の爲に、如何なる態度を、現すべきであらうか。玆に決心する所あつて、初めて我々に非常なる熱心が起り、信仰は養はれ、益々謙遜になる事が出來るのである。されば諸子には、充分なる決心を以て、着々實行せられん事は余の切望してやまざる所である。

其の四、吾人の態度

前回に於て印象と發表との關係を說き、我が國の教育に發表の要素が缺けて居る事を述べた。實に今日多くの學生の通弊は、出來るだけ多くの知識を詰め込まうとするのである。知識

を貯ふるばかりで、少しも發表しないのは所謂論語讀みの論語知らずといふ人になるので、只一事なりとも眞に其の事を覺つて、發表し、實行する方が遙かに尊いのである。リンコルンは百姓から身を起して、アメリカ大統領中錚々たるものとなつたが、彼が日々の修養の料とした書物は、バイブルと、イソップ物語との二つで、それを眞に咀嚼し、實行したのであつた。又無一物の貧窮から起つて千萬圓の財産を造つた某老人の立志談に、自分は朝起、稼ぐ事、水風呂に入る事、飲酒喫煙をせぬ事の四ケ條を守る事を決心したとの事である。かやうな人はこれが眞理と思へば早速これを實行し、發表するのである。今日の教育は此の點を缺いて居るから、學生の頭腦が明晰にならず、人格が發表せられないのであらうと思ふ。余は過日から說いた事を諸子に實現せしめなければ止まないのである。卽ち諸子の心身の態度を改めさせなければならないのである。諸子は第一に心の態度を改め、次ぎにこれを身體の上に發表しなければならぬ。そこで以下精神の態度と身體の態度に就いて說明しようと思ふ。

精神的態度

先づ從容自若として事に臨むの態度を有さなければならぬ。これを沈勇若くば沈着とも云ふ。かやうな態度は如何にして得らるゝか、卽ち困難なる境遇に陷り、或は迫害に遇ふ時は忽ち心が頹れ、又非常に愉快に、滿足を感ずる時には油斷を生じて輕佻になるものであるが、我々は如何なる場合にも決して動じないといふ態度を保たなければならないのである。此の態度を有するものは、己を支配する事が出來る。己を支配する力を得るものは天下、國家を支配する事が出來るのであつて、從容として死に就く事の出來るは此の故である。かくの如き態度を得る所の最高の力は自治である。最高の自治、これを自主（Self-mastery）といふ。卽ち自分の主となり、自分を支配する事である。

かくの事き態度に至る根本は精神である。此の境界に達すれば我々の心は神々しきものとなる。卽ち、渾身義、渾心忠とも云ふべき人格となつて、全身全力を集中して事に當るを得るのである。

精神の要素は如何なるものかといふと、知、情、意の三つで、これが現れたるものを眞善美といふ。眞善美の三者が完全に調和したる狀態を神聖といふ。此の三つの元素が種々なる關係を保ち、活動してそこに知（Wisdom）、愛、力（意）といふ樣な意識を現すのである。而して此の三者の活動する狀態を例

せば、力に憎み、或は嫉みが加はると粗暴になり、力に愛が加はると最も高尚なる情緒となり、熱心となる。即ち物が發表される原動力となる。知に愛が加はると熟練になり、愛に知が加はると向上心になり、力に知が加はると鋭敏になり、愛に力が加はると同情になり、知に力が加はると思慮になると云ふ如きこれである。

今一つの發表に必要な事は主義である。主義なき發表は人格を作る事は出來ない。そこで常に主義によりて發表をなし、發表の完全に進む時は品性となる。品性はまた發表を助くる。これを例せば愛が完全に發表さるゝに至れば尊敬となり、熟練が完全の域に達すれば直覺となり、向上心が完成すると良心となり、知が完成すると歸納となり、鋭敏が完成すると判斷力となり、知識が完成すると無意識即ち第二の本能となり、衝動が完成すると知覺となり、同情が完成すると仁愛となり、熱心が完成すると意志となる。

以上の如く先づ最初に於て主義を立て、即ちこれに適ふ所の發表が出來る樣に、意志を以て心身を支配するのであるが、發表が完成し來る時は、もはや意志を以て心身を支配して發表するのでなくて、こゝに擧げた例の如く感情により、自然に發表される樣になる。これが即ち品性となるの時である。

併しながら品性と云ふのも、これまた過程であつて、一刻も靜止する事なく、常に外から刺戟を受くると同時に、外に向つて發表しつゝ其の間に進化して行くものである。前に云うた自若と云ふも、畢竟進化しつゝある間に保つ所の平均である。故に我々の精神の狀態も亦過程である。此の故を以て精神の要素も亦進歩しなければならぬ。即ち要素が一方に偏さない樣に、平均をとり調和する術を知らねばならぬ。

次ぎにまた其の要素の一部、例せば情と云ふ一要素の中にも亦種々な矛盾が起つて來るのであるから其の調和をもとらなければならぬ。即ち愛にも三つの方面がある。これが調和を保つ事が必要である。即ち己を愛する事、人を愛する事、全體を愛する事、此の三つが衝突する如く考へらるゝ場合があるが、我々は全體の一部である。故に全體の一部として己を愛するので、それと同じく他の人もまた全體の一部であるから、全體若しくは自分を愛すると、同じ樣に愛するので、そこに愛といふものは始めて完全に調和するのである。

而して我々の此の精神的態度を動かすものは利己心である。己の利欲を離れた心にならなければ自若たる態度は保たれないのである。而して主義がなければ同じく保たれないのである。クリストが十字架にかけられて尙己の敵の爲に神に祈り、ソク

ラテースは從容として毒盃を仰いだのも一の主義があるからである。以上は精神的態度の根本に就いて申したのである。

身體的態度

我々の發表は一番先に身體に現れるのである。されば精神的態度と身體的態度とは必ず一致するもので、精神の態度は直ちに身體に現れるのである。故に發表を試みる上に第一缺く可からざるものは主義であると云ふ事を前に申したが、諸子の衣服にも、毎日の食事にもこの主義がなければならぬのである。

畢竟我々が學問をするのは主義を作る爲、主義を作るのは實行するに外ならぬのである。

其の五、自主の人

前回に於て自治と云ふ事を說いた。人間を大別すると自らの主人になる人と、奴隷になる人との二種がある。我が國では奴隷と云ふ階級がなかつたから、我々には其の感じが鈍いけれども、西洋には近來迄殘つて居つたから、それに就いての觀念が明らかであるが、此の自主と奴隷との區別は、換言すれば自由を得たものと、得ないものとの相違であつて、昔から奴隷制度の行はれて居つた所、壓制甚しかつた國では、人民が其の苦しみから脫し、自由を得ん爲に必死の力を出して、「我に自由を與へよ、然らざれば死を與へよ」と迄絕叫したのである。此の政治上の自由を得んが爲に永い間奮鬪を續けたのである。歐米の天地に於ては幾度か戰爭をなし、血を以て漸く購ふたのである。其の時には政治上の自由を得さへすれば人間は滿足を來す事が出來て、此の世界は天國となるのであらうと考へて居つた。併しながらそれだけでは未だ滿足が得られなかつたのである。何となれば心の自由を得て居らないからであつた。卽ち何かに支配されて、人間の思ふ樣に活動されなかつたのである。そこで人間の心の自由を得させる爲に、卽ち人を救ふ爲に宗教が起つた。或る學者は「若しも此の世の中に罪と云ふもの、憂といふものがなかつたならば、宗教は起らなかつたであらう」と云ふたが、つまり罪と云ふも、苦といふも、何かに束縛されて意の如く活動する事が出來ないものを指して云ふのである。キリストは「病めるもの、惱めるもの、重きを負へるものは我に來れ、さらば汝を息はせん」と云ふた。卽ち自由を得させんとの意である。釋尊も同じく人間を此の束縛の中から救はうとせられたのである。クリスト教と佛教とは少しく方面が異なるから、余は前者を積極と云ひ、後者を消極と申すのであるが、併し歸する所は一つであつて、何れも人間を束縛から免れし

め、眞の自由を與へんとするのである。故にクリスト教信者でも佛教信者でも救はれたと云ふ考を持つて居るものが澤山ある。畢竟我々が救はれた、安心立命を得たと云ふのは、眞の自由を得て不羈獨立の人間になつたと云ふ事になるのである。

そこで此の奴隷の境遇を脱して眞の自由を得るには道が二つあると思はれる。卽ち厭世主義と樂天主義とである。これに由つて宗教が人心の必要から起つた事がわかるのである。但しこれは後世に至つて哲學者が宗教を究めて見出した原理である。

厭世主義の流れを汲んだ所の哲學者ショウペンハウエルは、宇宙は意志であると說き、樂天主義に據つたヘーゲルは宇宙は理想であると云ふた。前者は佛教の方面で、後者はクリスト教の考と一致するのである。而して此の兩方面を調和して新しき哲學を組織したのはハートマンである。此の人は世には意志と理想とがある、これを調和したものは無意識であると云ふた。これは哲學の思想として、今日最も發達したものであるとは云へないが、此の說の中にも確に我々の採るべき所があるのである。余は今こゝで哲學を講ずるのではないが、我々の渴望して居る自由を說く爲に說をとり出すのである。今我々の云ふ意志は、知、情、意の統一されたものを云ふのであるが、ショウペンハウエルの云ふ意志は、宇宙の向上の力で先へ先へと進んで、止めんとして止める事の出來ない所の一の力を云ふのである。我々も宇宙の一部分であるから、我々の心の中にも此の力があつて、種々の慾望が起る。然るに人間は如何に活動しても、到底これを滿たす事は出來ないから人間に苦しみがあり、悲しみがある。此の慾望を斷つてしまはなければ眞の自由は得られないと云ふ說である。ヘーゲルは宇宙には理想があるから人間が向上し、活動し、これを實現する事によつて自由は得られると云ふ說である。ハートマンは宇宙には意志があり、理想がある爲に時々衝突はあるが、其の衝突があるから益々奮鬪しなければならぬ。其の間は感情が燃え、知識活動し、愈々意識盛んになる。而して活動を續ける事によつて、兩者合體し、衝突なくなり、始めて無意識になる事が出來るのである。これが宇宙の本體であつて、人間の自由を得る所の根源であると說いて居る。

我々が奴隷の境遇を脱して、眞の自由を得るに至るには、其の意志と、理想と、卽ち慾望と、理想とが合體して一つになれば、始めて安心立命する事が出來るのである。理想と云ふのは卽ち我々の說であり主義である。併しながら始めは其の主義と行ひとが容易に一致しない。故に此の境界を脱する爲に戰がある。卽ち知、情、意すべてが働くので、克己の時代である。此

の點に於て厭世主義にも一つの眞理がある。次ぎの時代には主義を以て行ふと云ふ事を自ら意識して行くのである。次ぎの時代には意志と主義とが合體して無意識に行ふ事が出來る樣になる。何人も此の階段を踏まねばならぬ。是に至つて眞の自由の境界となるのである。此の經驗を積んでオーソリテイーとなつた人の語を二三揭ぐれば、

ロングフエロー

「成功の能力は何處にあるか。他に祕訣あるなし。たゞ汝のなし得る事を最もよく、しかも少しの名譽心を加へずにするにあり。」

ミルトン

「自然を咎むる勿れ、自然は彼の部分はこれを爲せり。汝、爲せ、汝のものを」

「決心せよ、高尙なる我に眞なる全體の平均をとれよ。而して自由になれ」

此の束縛と云ふ事は何れにもある。我々の頭の中を攪き亂して居るものは束縛である。それでこれ等のものと戰をして居る人は勇氣を以て滿たされ、之に反する人は沈んで居る。さてこれから諸子が無意識に物が出來る樣になるには如何にすべきかと云ふ部分を述べようと思ふのである。

其の六、婦人と發表

我が國の婦人には、殊に此の發表（Expression）と云ふことが缺けて居る。之はどう云ふ譯であるかを考へねばならぬ。これは

第一遺傳、第二我が國の習慣風俗、第三子供の時からの教育によるものである。發表といふことは、人間の自然の性であり、人間の進歩の上に大切なものであるが、我が國從來の女子教育の方針は、其の反對なる抑壓（Repression）と云ふことであつて、女子は小さい時から、抑へ付けて發表させない樣にしたのである。從來は女が少しでも話をすると、牝鷄が晨すると云つて、殆ど女子に對しては其の精神を發表することを禁し、只一向に女は從順であり、優美であり、謙遜であるべきを要求し、斯かる婦人を作るには、發表をなくしなければならぬと云つて、自由を束縛して、活動を止めたのである。斯くの如くにして、育て上げられた女子は如何なる女子であるかと云ふと、不具な人間であつて、人類を作る要素卽ち人間たるべき人間には未だ達して居ないのである。先づ第一に斯かる女子は獨立が出來ぬ、常に親により、夫に縋り、或は子を賴んで居るので、若しこれ等のものから離れたならば、乞食をするか、厄介物とな

るかの外致し方なく、つまり男子の寄生虫なのである。是は經濟的の方面の事であるが、精神的の方面から云つてもやはり同じである。夫に死なれ子がなくなればもう其の人の生命はないのであつて、女子の愛は我が夫、我が子より外には働かない。我が夫、我が子を愛すると云ふことは動物にもあるのである。それ以上國家とか、社會とか、人道とか云ふ樣なものは眼中になく、只血族間にのみ愛は限られて居るのである。故に其の發表も夫の爲、子の爲に盡すばかりで、其の他には何にもない、女は貞操さへ守ればよいとして居たのである。

斯くの如く、日本の女子は、身體も、精神も小さく、狹く、つまり一つの制限をつけられて、それ以上には伸びられない。其の他には發表はせられないのであつた。つまり女子を人類の要素として認めて居らなかつたのである。然し女子が人間であるならば、只家庭の要素であるのみならず、社會の要素であり、國家の要素であり、人類の要素でなければならぬと余は信ずる。つまり我が國の教育は、女子を女子にし過ぎた。卽ち女を人間として教育しなかつたのである。而して女子自らも、かくの如きもの、だと思つて、滿足して居るのである。此の考が變らぬば、女子を救ふことは出來ない。婦人を救はなければ、家庭の困難を救ふ事は出來ぬ。家庭を救はなければ社會は救はれないのである。卽ち我が國を救ふことは出來ないのである。

若しも我々の身體を構成して居る所の細胞の半ばが、不健全なものであつたならば、それは實に憂ふべきことである。之と同じ樣に、國家の半ばであるところの女子が不健全であるならば、其の國家の將來は誠に悲しむべきものと云はねばならぬ。故に本校の主義方針は第一に女子を人間として教育するのである。諸子の內には人間たり、人間たり得べき力を有するのである。これを發達せしむるのである。第二に女子も亦人たる以上、之を國民として教育するのである。第三に女子としての特性を教育するのである。かくの如く女子に人間としての教育をするには男子に必要である樣に、やはり發表といふことを教育する事が必要なのである。余が常に諸子に個人と社會との關係を說き、人と共に事をし、力を合せて全體の爲に盡さねばならぬと云ふことに考を向ける樣に教育するのは、全く此の從來の缺點を補つて、諸子を人とせんが爲である、然るに婦人は稍々もすれば個人的になり易い。それは前に申した原因によるのであつて、其の爲によく發表することも出來ないのであるから、先づこれを破らなければ發表といふ事は說かれないのである。

發表を二つに分けて、第一を身體の上に表れるものとし、第二を職業或は藝術の上に表れるものとする。そこで女子は先づ

第一着に身體の束縛から解放しなければならぬ。卽ち先づ自分の身體の上に發表することは、獨り身體の上に大切なばかりでなく、精神の上にも最も大切な事であるから、既に述べたる如く、諸子は先づ心身の態度を改めねばならぬ。之をなすには、先づ主義を立てることが必要である。幾十年來、幾百年來の短所を改むると云ふことは實に困難であつて初めには非常の努力を要するのである。併し少しの間屈せずに此の努力を續ける時は、段々樂になり、餘り努力しないでも、只意識によつて出來る樣になり、遂にはそれが習慣となり、品性となつて、少しも努力せずに全く無意識でする樣になるのである。精神が身體に發表されると云ふことは自然のことであつて、頭の中で考へる事は自ら身體に發表され、又身體に發表されるものは自ら精神に印象されるものである。丁度精神あつて身體があり、身體がある爲に精神があると同樣に、吾々の印象と發表とは決して離るべからざるものである。昔から人相と云ふものがあるが、人相とはつまり精神の發表である。又一つ骨相と云ふものがある。此の骨の形もやはり遺傳により、精神によつて出來るのであるから、骨の形に依つて精神を知ると云ふことも出來るのであらう。故に我々は身體の發表の原理を知つて、精神をよく養ひ、善い印象を受けて、善い發表をすることに勉めねばならぬ。

其の七、發表に必要なる原理

我々の思想、感情を發表するに最も大切なるものは言語である。これを用ひずしては、とても深い思想を現す事は出來ないばかりでなく、言語なくては頭腦中に思想を構成する事も出來ないのである。言語に就いてジョージ、ミバートの研究した結論をあぐれば次の如くである。

言語
- 情をあらはすもの
  - 一、發音を綴る事を得るもの
  - 二、發音のみにて意味なきもの
  - 三、動作にあらはすもの
- 知をあらはすもの
  - 一、發音するのみにて意味あるもの
  - 二、發音し得るものにて合理的なるもの
  - 三、動作にあらはすものにして合理的なるもの

これに由ると我々の思想、感情、想像は第一發音、第二意味ある言葉、第三動作、此の三つを通して現れるものである。余は第一動作、第二言語、第三文章の三種に分けて講じたいと思ふ。

動　作

動作と云ふものは、我が國ではあまり注意されて居らない爲

に、自分の考を發表することが出來ないばかりでく、これを重んじない所からして、品性も出來ず、知識も進まないのである。故にこれは諸子に由つて完全に築き上げたいと思ふ。元來發表の惡いのは品性に缺點がある爲で、人は言語を以て言ひ表す事が出來なくても、其の風貌を一見して其の內なる人が確然わかるのである。それで余は動作に表す事に就いて一の主義を申さうと思ふ。卽ち諸子は先づ自分に缺點があれば、それを改めて自分の身に行ふ事から始めて、時々刻々、絕えず動作に實現すると云ふ事を怠つてはならぬ。これは品性を磨く上に缺くべからざるものである。要するに第一着に動作に發表する事を勉めなければならないのである。

身體に表るゝ發表を大別すると次ぎの三部となる。

一、頭の發表

二、軀幹の發表

三、四肢の發表

第一の頭の發表を別ちて、目と、鼻と、口との三部とする。眉目及び額は吾々の知力を發表する所であつて、鼻と頰のあたりは情を表すと同時に、高尙なる意志を表す。口と顎のあたりも意志を表すのであつて、又勢力若しくは活力を此處で示すのである。

第二軀幹の上部卽ち肺は知を表し、心臟は情を發表する部に屬し、腹部は意の部に屬するのである。

第三上肢もやはり三つに分かれる。手首卽ち指掌の部は知を、下腕は情を、上腕と肩の邊は意力を表すのである。

下肢も上肢と同じで、足部は知を、下腿は情を、股の邊は意を表すのである。

以上の如く各部意味を擧ぐれば

頭	口と顎	鼻と頰	目眉と額
	決斷	良心	知（歸納）
身幹	胃	心臟	肺
	感情	尊敬	直覺
四肢	肩と上腕	臂と前腕	手首と手
	知覺	同情	本能

目はまた知、情、意を表す。目に依つて知力のある人か、統一の出來る人かと云ふ事は直ちにわかるのである。吾々の頭の働きが積極的である時には、瞼が上り、消極的の働きをして居る時には下る。瞼が上つて白眼迄顯れたのは非常に怒ると云ふ樣な劣情の起つた時で、虹彩の半ば迄瞼の下つた時は、非常に注意力の働いて居る場合、瞳孔の九分の一迄瞼の下つた時は通常

の注意、瞳孔の三分の一迄瞼が下つた時は不注意の状態、三分の二迄瞼のかゝつた時は内省の狀態、九分の八迄になれば半睡狀態、瞳と彩虹とが全く隱れたのは、非常なる憂鬱、煩悶、衰弱を表すのである。全く閉ぢたのは睡眠か死である。眉毛もやはり吾々の頭の中の働きを顯すもので、知の戸口である。眉毛が上づつて居るならば心の窓を開いた狀態、卽ち Open heart である事を示し、下つて居れは其の反對である、又眉は意志と情緒とを表すもので、情緒の働くときは大抵眉毛は上り、注意が集注するときは下るのである。

鼻と頰とは我々の意志、慾望及び情をあらはす。而して鼻は餘り意志に從はないで感情を表す處である。

第一鼻が平常の狀態に靜まつて居る時は、感情の平和である事を示し、第二鼻孔が收縮する時は殘忍冷酷を示し、第三其の反對に擴大する時は感情の動きたる事、又は激昂したる事を表す。第四鼻の上に横皺の寄せるのは、人を攻擊し侵擊する態度である。第五鼻孔が收縮して皺のよる時は、人を憎む態度である。第六其の反對に鼻孔が擴大して鼻の上に皺がよる時は憤怒を表し、第七鼻孔が上に向く時は敏感を示す。第八鼻孔が小さくなりて上を向く時は、人を輕蔑する時である。第九鼻孔が擴大して上を向く時は嘲笑の意を示す。

口は吾々の力を表出する本である所の感情を表すのである。精神が働いて居るか、どうかと云ふ事は顎でよくわかる。第一顎が少し下つて居るのは、力が減じて居る時で、第二澤山下つて居るのは全く力が減じたのである。第三大いに顎が上つて居るならば大いに力を出して居る事を示すのである。又唇は第一少しばかり開いて居るならば、力或は意志の緊張などを中止し、又は放任して居ることを表し、第二堅く閉ぢて居る時は決心を示すのである。第三全く開いてしまつたのは驚愕を表し、第四少しばかり開いて口の角が下つて居るのは、憂ひ煩悶して居る時、第五唇が全く締り、兩端が下つて居るならば、不平不滿、第六全く開いて兩角が下る時は恐怖の情、第七少しばかり開いて兩角の上つて居るのは喜び、第八締りて兩角の上るのは賞讃賛成の意、第九開いて兩角が上るのは大いに喜び、大いに笑ふと云ふ樣な情を表すのである。

軀幹、肺は知を表す處である。昔からインスピレーションを受けると云ふ事を云ふ。これは昔宗教では聖靈を受ける事を云ひ、我々の頭の中に光を受ける事をよく云ふが、此の詞は何から起つたかと云ふと、肺が空氣を吸ひ込むと云ふ事から出たのである。内に吸ひこむことをインスピレーションと云ひ、外に出す事をエキスプレツシヨンと云ふ。それから大いに悟りを開

くとか、物を了解するとか云ふ時には、深く呼吸するのでさういふ事をも意味するのである。兎も角も肺は知を現すのである。心臓は情を表す處であつてハートといへば、胸をさすのである。これ卽ち愛を示すのである。吾々の最も大切なる精神的生命も此の心臓の鼓動が止まる時は卽ち死である。又心臓の働きは直樣我々の情緒を示すものである。かう云ふ關係からして吾々の身體の中央にある心臓をさして吾々の情を表す所とするのである。

腸胃は我々の全體の力を表す處であり、又是が我々の力に非常なる影響をするのである。故に此處は吾々のエネジーの本を養ふ所である。軀幹の筋肉が緊張して居るならば、確に精神に滿ち大いに奮起して居る時である。

其の反對に臆病であるとか恐怖、頽悶、意志の薄弱と云ふ樣な事は、軀幹が前に傾くのである。そして凡ての筋肉の弛むと云ふ事は懶惰を示すのである。故に吾人が意志を働かし心を活動さす時には必ず身體の上に注意をしなければならぬ。

次ぎは四肢卽ち手と足とである。手は知を表し、腕は情を、二の腕は意を表すのである。指の働きは賢を表すもので、指の活動の鈍い人は餘り賢い人ではない。卽ち知力の働く時は直樣手が表すのである。近頃手工教育を教育の最も重い要素として居るが、それは知力に非常に關係をもつて居るからである。そして肘から前腕の間は情を示すのである。クライストが人類を思ひ、之を愛する情は、恰も羊飼が羊をを愛する如くであるといひ、其の愛を現す表象として羊を抱く圖を描いて居る。又母親の愛は腕を以て子を抱く所にあらはるゝ。又上腕は吾々の力を示すのである。故に賢き國民例へば伊太利人などは、大抵非常に指がよく利くのである。我が國民も東洋人の中では最も指端の業の巧みなるものとなつて居るのである。

手と頭との働きは大いなる關係を有するものである。例へば記憶を呼び起す時に若し一つの事ならば一本の指を頭にあて、數個の記憶を呼び起す時には指の全部を以てするのである。また五本の指の中でも堅いもの乾いた物には示指を觸れしめ、濕つぽいものには中指を以てし、柔いものには藥指を以てし、粉の如きものは小指を以て觸れて見ると云ふ樣に分業になつて居る。又指の中でも拇指は大なるものを、小指は小なるものを表す。つまり拇指は力を表し、四指は知を表し、掌は情を表すのである。故に手は西洋でも種々の禮儀を表す事となつて居る。例へば握手するにも指の處で握るのは尊敬の意を現し、掌でするのは親とか兄弟とかいふ極く親しい人に對して情を表すので

あり、力を表すには拇指を以てす。凡てこの禮儀といふ事も一定して居るのであるから、其の社會の秩序に從つてすればよろしいのである。拇指を内にし、手の全體が内屈する時は物を包むとか、蓄積するとか云ふ事を表すので、其の反對の拇指を外にし、凡て外に向つて緊張するのは非常に力ある事、又決心したる事を現すのである。手は物を拒む時下にさげ、賛成する時に上にあぐ。卽ち積極的態度と消極的態度と、まだ其の外に手のあげ方によつて中間のものを表すのである。

それから手によく似て居るものは足である。股は力であり、膝頭から下の脚部は情であり、足趾は知を表すのである。足の裏は情を、踵は力を示すのである。そこで脚部は尊敬とか、愛情とかを表すのである。又足のさきは用心をする、卽ち慎みを表すのである。全體の平均をとり中心をとつて歩むには、足の裏を踏みしめて歩む。そこで歩む時に趾が働き力がいつて居るならば、確に其の人は精神に滿ち、向上の意氣盛んな事を示すのである。故に足の働き方によつては怠惰なやうにも愚かなやうにも見えるのである。

故に吾々の精神を發表するといふ事は、たゞ顔ばかりでなく詞のみでもなく、全體が活動しなければならぬ。例へば吾々が物を深く考へて頭の中が充實されてある時、物を心配する時、又は非常に煩悶するとか云ふ時には、自ら頭が下るのである。さうなると手も亦それに應じて働くと云ふ風に、凡てが協同するものである。

以上述べた發表の原理は、常に應用して無意識に出來るやうに心掛くる事が肝要である。之を人工的にする時は、非常に醜いものである。然し其の初めに於ては模倣時代を經過しなくてはならぬ。之は所謂奴隷で、まだ他の束縛を受けて居るのである。故にこの束縛をとかるゝやう、日頃から原理を應用して遂には自然に出來るやう心掛けねばならぬ。

音聲

音聲を分ちて三とす

一、冷靜なる聲　（氷＝辯論的＝科學的）

二、溫かなる聲　（水＝感情的＝文學的）

三、熱したる聲　（蒸氣＝反抗的＝爭論的）

音聲に抑揚がある。抑揚によりて此の三種の音聲が出るのである。

抑揚は何れの國の語にも必要である。殊に英語に多いのである。これ等に就いては文法、修辭學等によつて其の原理が明らかであらうと思ふにより玆には略して、只音聲の出し方に就い

て婦人の缺點を述べて置かうと思ふ。婦人には落涙するやうな聲、高過ぎる聲、早過ぎる聲を出すものが多いがこれは改めなければならぬ。

言語文章

言語文章之を廣義で云へば、文學といふに含まるゝのである。そこでこの廣義の文學の要素が四つある。卽ち一、感情、二、想像、三、思想、四、形成、これであつて、一より三までは印象で、四は發表なのである。

其の八、天　才

印象を發表するに當り、不知不識の間に眞善美が現われ來るやうな人格を天才といふ。天才は集中である。卽ち天才は力である。情である。自然である。天才發揮は人格養成に反するものと思ふのは誤りである。天才は人格である。本校に於て、生徒各自に天職を信じさするのは卽ち其の人の天才を現させんが爲である。故に余は此の講演の終りに於て、天才とは如何なるものなるか、又天才は如何にして出るものなるかを述ぶるの必要がある。

古來天才といふは天より附與された力、卽ち神が我々の上に特に下し賜ふた力と思うて居つた。英語のジニアスは羅甸語より來つたもので、其の人を導く靈の力といふ意味である。昔は偉人例へばソクラテース、プラトーン、モーゼ、ソロモン等を指して天才と云うた。卽ち神より出でたる靈が其の人々の頭に宿れるものとの信仰なのである。それでソクラテースに就いては「知識と科學とを諸の口に向けて開いたるにより、其處より知識の泉が流れ出づるもの」と云ひ、ホーマーに就いては「崇嚴なる理想と美の充ちたる世界を悟る力を與へられたるもの」と云ふ語がある。

然るに近世に至つてかやうな迷信的の考は人々の頭腦より取り去られて來た。が、なほ今日に於ても全くないといふわけには未だゆかない。宗教に於ても天才は聖靈に由つて出來るもので、無限にして解釋すべからざるものとして居る。又天才と云はるゝもの自らも左樣に信じて居るのである。

そこで我々の考ふる所によれば天才である所の力は實に神聖なものである。所謂神と合體した作用であると云ふも妨げない。卽ち我々の云ふ意味の神と關係のないものではない。此の力の働く時には自らもわからない程の現象が現われるのである。併し天才といふも我々の心理狀態である。今日の心理學に於て分析せらるゝ心理狀態である故に、今日の天才の解釋は昔

のものと異なつて居る。今茲に此の問題を深く考ふる材料として、古來天才と稱せられ、又自らも天才と信じ居たる人々が、天才といふものを如何に解釋したかを引用しようと思ふ。これに由つて天才と人格との關係を略々會得する事が出來るのである。

ズルザー「天才は畢竟腦髄の偉大なる、一般的の力である。偉人と天才とは同一である。」

デユボース「天才は自然の熟練に由つて他の人のよくせざる事を容易によくし得るものである。」

ハルダー「天才は心理的能力の非常に強くなる性質と、非常に擴大する性質である。」

フルーゲル「天才は認識力の一要素である。」

（註―注意力、記憶力、抽象力、頓智、辯別力、了解力、理性これ等は何れも認識力である。）

ウイランドは天才を分けて次ぎの三種とした。

一、文學的天才　文學、美術の天才、即ち人を悅ばしむる天才を云ふ。これは自分の有して居る理想を最もよく、又容易に發表する力である。

二、哲學的天才　人生の幸福に關する正當なる概念より來る眞理を發見して行く力より成り立つもの。

三、實踐的天才　これは實用的天才である。

ジョーリー「天才は創始的能力である。現今社會にあるものは、皆人類が一致共同して作りたる働きである。此のすべての人の力を合せて、なほ出來なかつた事をなし得た人である。即ちこれを發表、才能、發明、新しき働き等にあらはしたものである。」

以上の人々の見解に於て一致する點は、創始發明等である。これ等はすべて天才を客觀的に見るもの、即ち結果を云ふたものである。然らば主觀的方面即ち天才の心理狀態は如何なるものであるか。これに就いて古來の人の言を引けばウエース「發明と云ふは新しき美を作り出す力である。科學に於ける眞理、美術に於ける新しき美を生ずる力である。」

カント「天才は模範的創始力である。」

ヘーゲル「創始力が天才を組織したのである。創始的衝動、及び發見したる概念の最も高尚なるものである。」

前回に於て天才には主觀的方面と客觀的方面とがある事を述べ、而して、其の客觀的方面についてはほゞ說明したのであるから、今度は主觀的方面について話さうと思ふ。主觀的方面とは心理的方面を云ふのである。その主觀的即ち心理的方面を分類して三とする。即ち、第一文學的天才、第二知的天才、第三

實際的天才之である。

文學的天才

これは美術家、文學家、發明家等の心理狀態で、旺盛なる感情を有し、從つて最も想像力に富むものである。而して、吾人は此の心理現象を指して、インスピレーション（靈感）を受けたる狀態といふのである。如何なる心理現象かといふに、心に非常なる震動を受け、全く忘我の域に遊び、恰も夢みる人の如くになるのである。其の場合には知も、意も加はらずして、唯感情のみが激しく働くのである。故にかくの如き狀態にある時は、全く其の云ふ處書く處を意識せず、卽ち、アンコンシヤスの狀態で無意識に動くのである。是を指して文學的天才と云ふのである。

此の文學的天才の代表者を擧げる時は、かの有名なるゲーテであらうと思ふ。而してもし此の主觀的、感情的方面のみでなくして、知的、卽ち客觀的方面を有して居つた詩人の代表者を得んとならば、かのゲーテの友シルレルを擧げるが適當であらうと思ふ。

ゲーテの嘗て云うた言に、

「汝は生涯に就いて、意志なく、目的なし、併しながら想像に於て、追想に於て、機關に響く處の想像力を生むべき世界ならざるべからず」と。天才の頭腦には一の生產力がなければならぬが、その生產力は如何にして作らるゝかといふに吾人の頭腦にある種々なる觀念を一個の生命ある有機體に組みたてる所の力が必要である。その組み立てる力とは意志の力である。然るに、玆に或る種の天才に至つては、意志の力なしに、その觀念を組立て得る働きをなしうる人である。普通一般の人は意力を使つて組織するのであるが、この種の人は、其の困難を感ぜずして自然に之が出來得るのである。

ベッチネルが云ふた言に

「詩人の最も樂しき時は、夢の間なり。その夢や日々の務めに向つて眼を開き眺むる處の知の活らきに於けるものなり。」夢は自分の意志の力と知の力とを用ひず、殆ど自分を忘れて居る境界であるが、之と同じ道理で、吾人の想像は、恰も、眼を開いて夢を見て居る境界に居るのである。それで、其の夢を書き表せば立派な詩となるのである。故に有名な詩人の詩は、恰も知も意も加はらずして出來る、一種の發明の如きものである。故に昔はこれを聖靈の働きであると考へた時代もあつたのである。またシルレルの如き知と意と加はりたる知的天才を分つと次の二種となる。

一、有意的思考

二、無意的思考

無意的思考の狀態は最も詩人の尊ぶ處である。卽ち妙境に入つた時であるが、此の時に於て、初めて詩人の天才が現るゝのである。

そこでその無意的思考所謂幻想とは如何なるものであるかと云へば、吾人が夜に見ると有意識との中間位なる心理狀態を指して云ふので、この狀態の時に、立派なる詩歌は出來るのである。ゲーテはかゝる天才家であつた。然るにシルレルの方は此の幻想のみならず、知的の働きを以て詩を作つた。

ゲーテとシルレルを比較して見るとゲーテは主觀的であつて、自分の思想、感情、經驗すべて自己の生命より編み出したのである。卽ち彼は主觀的の天才を表したものであるが、シルレルは之と反對で客觀的の天才を顯したものである。

故にゲーテの詩は感情であり、シルレルの詩は知と意とで成つて居るのである。

某詩人はゲーテに就いてかく云うて居る。

「彼は眞に活き、感じ、經驗し、眞に自ら行ひたる事をのみ詩に現せり。」而してゲーテ自身は次ぎの如く云へり「我は愛なくして愛を唱へたる事なし、我は我が詩が眞なる心の基礎と事實の追想ならむ事を冀ふものなり、我は我が胸にそを描きぬ」と。然り彼の喜びも、悲しみも、樂しみも、苦しみも、すべて彼の詩の主人公に表されたり。彼の主人公の脈管には、彼自身の血通ひ、彼の肺に呼吸し、彼の生命に主人公は活くるなりきと。

實に彼は自らその詩の中に活躍して居るのである。すべての發表は自己の發表でなければ、決して生命は表れないものである。吾人は平常此の原理を守つて何事をなす時も、全く無意識となつて、自らを發表する事が大切である。

ゲーテは曰く

「我が詩は永き自白の一片なり」と

シルレルは曰く

「詩は人類の完全なる發表に外ならず。」と

シルレルの詩は客觀的である。卽ち、この人道を見て、發表したのである。故に、彼は知的方面の働きを多く有つて居たのである。

吾人が一定の目的を以て物を考へる時には、吾人の頭の戸口には、理性の番人が居つて、良きと惡しきとを判斷して頭に入れるのであるが、此の天才はそれに反して、全くその番人を押しのけて、多くの思想想像が集り來るのである。斯くの如き文

學的の天才の狀態については、色々また研究せねばならないが、兎も角も、文學的天才、卽ち、人の情緒を動かす所の天才の心理狀態は以上の如きものである。而して天才は吾人の生命の源なる感情に伴ふものであるが、此の感情に伴ふ想像力は最も必要なものである。さうして此の想像力は吾人の生涯に取つて最も大なるものであるから、大いに之を養はねばならぬ。卽ち、吾人の思想、想像が最も美的に構成される樣に養ふのである。此の想像力を養ふのは、やはり趣味を養ふのであつて、之は最も大切な事と思ふ。或人は之を卑しめ、誠に價値のないもの、實在でないものゝ樣に考へるけれども、決してさうでない。眞の實在、價値ある實在は、此の想像の中に存在するのである。

故に此の想像は吾人の生涯に於て必要なる力を作り出す源卽ち原動力になるのである。此の力が一種の文學的の天才となるのであるから、此の如き想像力は文學者のみならず、婦人には殊に必要なので、ベチヤーは次の如く云つた。想像は文明の秘訣眞髓にして信仰の眼である。想像力なき心は顯微鏡を用ひずしてなしたる觀察に等し。

かくの如き想像は感情的にも、科學的にも、亦實行的にも大切で、畢竟、實業も、政治も、凡ての想像力によつて、出來るので、實社會の凡ての淵源は、悉く想像力であると云うても過言ではないと考へる。ナポレオンは「凡ての戰は想像によりて勝を得たり」と云うた。

されば實行的天才の人は必ず想像の働く人である。我が校のバザーでも、文藝會でも、凡ての客の接待から、料理から、萬事に成功すると否とは、吾人の想像力如何に依るのである。又吾人が相談して、種々なる事を定めるも、やはり想像力の結果である。吾人は來らんとする近き將來も、遠き將來も、想像の力を働かせて、心の望遠鏡によつて之を觀察し、研究し、而してその準備をするのである。故に實行的天才と云ふのもやはり想像によつて出來る事は明らかである。

又吾人が交際場裡に立つて、社會的活動をなす時、或は、一家を幸福に治むる時、或は生徒を教育する時、最も大切なのは快活なる發表であるが、そのもとは矢張り心の想像力の態度であり、こは主に吾人の想像から來るのであるが、惡しき發表をなす人は、惡しき感情を抱く人か、或は頭の中の空な人である。之に反して態度の美はしき人、自ら超然として美的發表に充ちて居る人は、その思想感情が立派なのである。如何なる迫害に遭うても死に迫られても、實に自由にして少しも苦しむ事なく、幸福な發表をなし得る樣な習慣を作るには、朝夕の想像

に注意しなければならぬ。想像は信仰の芽である。かのキリスト教徒をして如何なる迫害に遇ひても恐るゝ事なく、希望を以つて死に就くを得、幸福な生涯を送らせたのは、天國を臨らせんとする想像によるのである。佛教徒は極樂を想像して往生した。けれども吾人は彼等の信じたる天國、或は極樂を信ずる事は出來ないから、吾等は吾等に適したる天國、極樂を想像して、その信仰を有つ事が吾人にとつて大切である。殊に病的の人にとりては、注意して善い想像を描く事が大切である。昔惡魔と云ふたものは惡い想像である。我々が自分の境遇を開拓する時に、社會を達觀して、我々の頭の中に立派なる想像を描く力があるならば、誠に愉快な感情を養ふ事が出來る。

其の一例として、會て牢獄に死の鎖を以て繫がれた或佛蘭西人の言に「鐵鎖の響きは我が爲にいと妙なる樂の音と聞ゆ、かくてこの音樂に身を縛しめられて刑場に行く道の如何に樂しかりしよ。」と、吾人は此の人の如く如何なる困難なる事にも、苦しき事にも吾人の所謂天國を實現しようといふ喜びを想像して、世の中を愉快に過す事が必要である。

哲學的天才

此の天才は意志力、知力が必要なので、吾人はこの科學的、哲學的天才家の經驗を學ぶ事はまた必要である。

ニュートンの朋友ホーレーを訪うて、貴君の發見は如何なる天才によつて出來ましたかと問ふた時に彼は答へて曰く「何も外に道理あるなし、只自分の考へて居る問題に、間斷なく自分の心を注いだと云ふ事である。」

又ニュートンにつき或人はかく云つた「彼と他の人との主なる差異は、彼が他の人よりも更に忍耐强きことなり。」

そこで文學的の天才については、次の如く云はれるのである。

「かれは無意識となり、夢想となり、睡中の歩みの如くなる。」

併しながら、第一の天才は、反省（文學的）で、第二の天才は觀察（哲學的）で、この兩者は差違があるが、然し兩者共に反省も觀察も含有するので、全く異なつたものではないのである。

實際的天才

此の天才は意志の力が最も必要なのである。例へば政治家、實業家の樣なもので本校などでは、リーダー（生徒の指導係として各級に置けり）にとつても此の天才は必要なのである。もし此の種の人を第一種の天才と比較して見る時は、第一の天才

は、恰も蠟の如きもので、第三のは是に反し鐵の如きものである。故にこの第三に屬する人は、鐵の如き意志を有する事が必要である。

扨て余がかく天才について種々述べ來つたその目的は、吾人が教育を施すに當つて、如何なる方針を取るべきかを考へ、研究する爲に述べたので、玆に於て三つの問題に遭遇するのである。

一、斯くの如き天才を教育して本校より出す必要があるか。

二、それが必要としても此の如き天才が出來るであらうか。

三、この團體の中より僅なる天才を出す事の利害如何。

而して社會は此の如き天才が出でて、初めて、進歩するといふ思想と、社會の進歩がかくの如き天才を產み出すのであるとの兩思想があるが、是は何れも眞理である。例へば櫻楓會の目的を達して行くには、人物が必要である。其の理想の人物が出來たならば、我々は其の人を指して天才と云ふ事が出來る。もしこゝにワシントン、ビスマルクの如き人が現れたならば、爲に、如何なる影響を與へらるゝであらうか。又メリーライオンの如き女子教育家が出來たならば、如何なる影響を受けるであらうか。

これ等は健全なる人格の天才である。次に如何にしてかゝる健全な人格を備へたる天才を作る事が出來るかと云ふ事について述べようと思ふ。

何故に本校にては今日まで天才を作る方針を取らなかつたか、本校の教育の主義方針は、卽ち品性を養ひ、女子をして、人として、又婦人として、國民として、必要なる品性、人格を養成する事である。而して、今日まで余は天才を作る事を奬勵した事はない。是は卽ち、人格を養ひ、德性を磨き、其の天職を完ふせよと教育するのみで、世間の所謂天才を出す事を望まなかつたのである。是は、甚だ危險な傾向が伴うて來る事を恐れたからである。第一此の天才を養ふに當つては、ともすると虛榮心を養ふ樣になる弊が伴ふからである。

第二には一方に偏する習慣を作り、遂には病的狀態に陷る樣な恐れがある事である。殊に女子教育に於ては其の弊害甚だしきものである。而して此の弊害の原因は種々あるが、第一の原因は卽ち第一の種類に屬する天才の心理狀態が多くは病的狀態に陷り、又は極端になつて殆ど世間から狂者の如く見らるゝ人が多いからである。故に第一の如き天才になるには、極端にならなければ眞の天才は現れないかと云ふ觀察をせしむる樣になるのである。世人の多くは此の天才を、半精神病である樣に考へて居るが、天才自らも多くは眞の狂者となつて、自殺を遂げ

る様な病態に陥る者が多いのである。

アリストートル「哲學、政治、美術、詩の才能に秀づる人は憂鬱の傾向を持つ」と。哲學者、大政治家、大詩人は多くは病的の傾向があるといふが、斯かる名高い人の心的狀態を聞いてみると健全なる腦力では出來ない様に思はれる。例へばバイロンの如きは殆ど病的に陥り、其の感情が盛んなる時に大いなる考が起るのであると云はれて居る。バイロンは、次ぎの如く云うて居る。

「かれの詩は眠れる間の夢なり。もし彼目覺めてあらば、彼に言葉なかりしなるべし。」

第三に起り易き弊は、子孫の教育に惡影響を及ぼすといふ事である。妄りに天才を作らうとする事が、子孫に種々なる弊害を遺すものであつて、却つて人類の文明を阻害するものであるから、是は最も怖るべき弊害である。殊に女子教育には最も大切なる問題であると考へられる。その問題は

第一、天才は多く結婚せざりし事。

第二、結婚したるものも、子孫を教育する如き家庭を作らざりし事。

第三、天才には比較的子孫少き事。

天才で生涯結婚せず、獨身生活を選んだ人は昔から多い。クリスト、カント、シヨウペンハウエル、デカート、リペンニツチエー、スペンサー、コント、ニユートン、ボスボロ、アルフレー等皆さうである。

其の他今日の社會にも多くあるが、如何なる理由の爲かは、大いに研究すべき問題である。今一つは天才は其の時代の偉人である。故に生涯を社會に捧げて世を救はんとするものであるから、家族を持つ餘裕がないのであらうが、今一つの理由は此の如き偉人は殆ど社會を自分の家庭とし、人類を同胞とし、宇宙を自らの國とした人であるからである。

天才が家庭をもつ事が幸福であるか否かといふと、多く幸福でない。其の子は多く不肖であつた。セーキスピヤ、ダンテ、アルゴーの如き人の子等は卽ちこの類であつた。天才なるものは精力集中であるが、其の精力集中に二種類あつて一つは全體の爲に其の力を集中する場合、二は其の力の一方に偏したる場合である。かのニユートン、ゲーテ、ダーウインの如きは一方に偏した人である。殆ど知的方面に偏した天才であつたから、溫かき情に缺けて居る傾きがあつた。其の精力集中が一方に傾く時は、狂氣となるのである。

而して天才が結婚して子孫を遺す時は、一層一方に偏する傾きがあつて、其の場合には確に病的となり、又狂者となるので

ある。又天才は一方に偏する性癖をもつて居るから、非常に極端となつて、配偶者との間が相互に合はない様になる。さうして天才と普通の人とはあまり能力に懸隔のある所から、其の配偶者は決して幸福に生活する事が出來ぬ。これが原因となつて破鏡の嘆に遭遇するに至るのである。

偏したる者の子孫には幾分か遺傳する。中にも音樂家の如き、殊に遺傳が多いのである。さればといつて、天才と天才との結婚は其の結果宜しくない。又天才を養成するを目的とし、シルレル、ゲーテの如き人とならんとする事を理想とし、是等の人の弊害をも併せてとつて、一方に偏するといふ事は、似非天才で、遂に世間に通用の出來ぬものとなるのである。これ卽ち余が所謂敢へて天才の養成をしなかつた所以で、我が國將來の國民を作り、子孫を教育する上に餘程愼しむべきである。

第一、女子教育、殊に高等教育を施す場合に於て、單に天才の養成を以て目的として可なるべきか否かと云ふに、是は一方に弊害を生ずるのである。卽ち女子の方面から云ふ時は結婚を好まず、又は子孫の教育を缺く等種々なる弊害が伴ふて來るのである。本校の教育の目的は卽ち品性人格を作るのであるが、其の目的を達して行く時は、天才は自から其の中より輩出するのである。此の如き目的を以て養成せられたる天才は決して病的狀態に陷らないで、健全なる天才の人格を作る事が出來るのである。併しかくの如き人格を養ふに缺くべからざる要素は卽ち知情意である。而して變調の發達又は過度の發達を避けたるものであつて、第一に人格を養ふに注意するのである。これは卽ち健全なるもので、決して一時的のものではない。故に此の意味の天才といふは、知情意の三要素を含まねばならぬ。それが調和したる天才は、ゲーテの所謂幻想の域に居る事が出來るものである。我らが諸の計畫をなすに當り不知不識の間に情を以て動く事が大切であつて科學をする人も、商業をする人も、吾人の感情を動かす點の感情は、凡ての人に大切である。而して此の感情は吾人にとりて、恰も太陽の如きもので、世界から太陽を除けば、進歩は直ちに止まる如く、吾人も感情の原動力なしに働きをなす事は出來ない。感情が吾人の働きの原動力となり、又天才の原動力となるのである。而して、其の天才は如何なる事に由つて養はるゝかといふに、是は想像である。其の想像は何によつて作らるゝかといふに、それは吾人の溫かい感情である。此の感情は吾人をして凡ての方面に向つて、自然に動かさしむる處の、淸き、溫かき感情で、斯くの如き感情が常に心の中に燃えて居つて、自然に發表される時は、之を以てCharmingと云ふのである。卽ち吾人の家庭を治むる時にも、

亦教育をする時にも、此の如き境遇を作る事が大切である。けれども只此の感情のみにては完全なる想像を作る事は出來ない。卽ちそこに知の要素を加へなければならぬ。さうして此の二者が相合して調和統一され、そこに完全なる關係を作り、これによりて、吾人の想像が生命を受けるのである。想像は内よりのみ來るものではない。吾人の力を養ひ、力を發表するには、やはり知識を外に求めなければならぬ。是を求むるのは、ニュートンの云ひし如く、忍耐し、觀察する力を養はなければならぬが、これは婦人に最も必要なるものと考へる。

第二には、卽ち、意志の力が大切で、この鐵の如き意志を失ふ時は、如何に想像が盛んであつても、情が淸くても、夫等は一時的で、直ちに消ゆるのである。到底永久的に吾人の價値を保つ事は出來ない。吾人の働きを永久に保ち永久に續くるものは、卽ちこの鐵の如き意志である。故にこの意志ある人は、親兄弟、友人若くば社會一般の人に反對せられても、決してその意志を變ずることはないのである。この意志は一團體を指導する人、又は一社會を統ぶる人には特に最も大切で、これをもたぬ人は、如何なる好機會があつても、眞理を認めて意志の擴大を計る事は出來ないのである。されば天才たるものは必ずこの意志を有するので、如何なる類の天才になるも、先づ健全なる人格を有し、且つ、この鐵の如き意志を有して居なければならない。之が卽ち本校で最初からその人格品性に先づ重きをおいて、土臺に健全なる人格を有した天才を養成しようと勉めて居る所以である。

（「講演集」第一・實踐倫理講話）

明治三十九年九月～四十年十二月